

京都府遺跡調査概報

第 80 冊

1. 浦入遺跡群
 - (1) 浦入遺跡
 - (2) 浦入西古墳群
2. 竹中遺跡
3. 余部遺跡第 3 次
4. 平安京跡左京五条三坊十一町
5. 長岡京跡左京第400次(7ANEMR-4地区)・
鶏冠井清水遺跡
6. 長岡京跡右京第584次(7ANGND-1地区)
7. 柏平遺跡

1 9 9 8

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当調査研究センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常の発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成8・9年度に実施した発掘調査のうち、舞鶴市教育委員会、日本道路公団大阪建設局、京都府農林水産部、京都府警察本部、京都府土木建築部、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて行った浦入遺跡群、竹中遺跡、余部遺跡第3次、平安京跡左京、長岡京跡左京第400次・鶏冠井清水遺跡、長岡京跡右京第584次、柏平遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会・亀岡市教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センター・京都市文化観光局・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・城陽市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | | |
|-----------------------|------------------------|------------|
| 1. 浦入遺跡群(浦入遺跡・浦入西古墳群) | 2. 竹中遺跡 | 3. 余部遺跡第3次 |
| 4. 平安京跡左京五条三坊十一町 | 5. 長岡京跡左京第400次・鶏冠井清水遺跡 | |
| 6. 長岡京跡右京第584次 | 7. 柏平遺跡 | |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 浦入遺跡群 (1)浦入遺跡	舞鶴市字千歳小字池カナル・花ヶ口	平8.4.16～ 平9.3.7	舞鶴市教育委員会	筒井 崇史 増田 孝彦
(2)浦入西古墳群	舞鶴市字千歳小字池カナル・花ヶ口	平8.4.16～ 平9.3.7		
2. 竹中遺跡	舞鶴市字堂奥小字稲谷口・鍋森	平9.8.20～ 9.25	日本道路公団 大阪建設局	竹下 士郎
3. 余部遺跡第3次	亀岡市余部町和久成	平9.7.1～ 8.12	京都府農林水産部	引原 茂治
4. 平安京跡左京五条三坊十一町	京都市下京区烏丸通高辻上ル大政所町682	平8.11.5～ 平9.3.11	京都府警察本部	石井 清司 竹下 士郎
5. 長岡京跡左京第400次・鶏冠井清水遺跡	向日市鶏冠井町南金村	平9.5.1～ 8.1	京都府土木建築部	石井 清司
6. 長岡京跡右京第584次	長岡京市井ノ内的田21	平9.12.1～ 平10.1.27	京都府乙訓土木事務所	八木 厚之
7. 柏平遺跡	城陽市富野柏平	平9.8.25～ 9.4	京都府土木建築部	有井 広幸

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

本文目次

1. 浦入遺跡群平成8年度発掘調査概要-----	1
(1) 浦入遺跡-----	3
(2) 浦入西古墳群-----	19
2. 竹中遺跡発掘調査概要-----	31
3. 余部遺跡第3次発掘調査概要-----	35
4. 平安京跡左京五条三坊十一町発掘調査概要-----	43
5. 長岡京跡左京第400次(7ANEMR-4地区)・鶏冠井清水遺跡発掘調査概要-----	69
6. 長岡京跡右京第584次発掘調査概要(7ANGND-1地区)-----	79
7. 柏平遺跡発掘調査概要-----	83

挿図目次

1. 浦入遺跡群

第1図 調査地位置図-----	1
第2図 調査地点位置図-----	2
(1) 浦入遺跡	
第3図 浦入遺跡N地点遺構配置図-----	4
第4図 縄文時代調査トレンチ土層断面図-----	5
第5図 縄文時代調査トレンチ平面図-----	5
第6図 流路状遺構実測図-----	7
第7図 流路状遺構出土遺物実測図(1)-----	8
第8図 流路状遺構出土遺物実測図(2)-----	9
第9図 竪穴式住居跡SH01実測図-----	10
第10図 テラス状遺構SH10・SH11実測図-----	11
第11図 テラス状遺構SH11鍛冶炉跡1実測図-----	12
第12図 飛鳥時代出土遺物実測図-----	12

第13図	テラス状遺構 S H14・S H22実測図	13
第14図	テラス状遺構 S H19実測図	14
第15図	奈良時代出土遺物実測図	15
第16図	浦入遺跡 B地点遺構配置図	17
(2) 浦入西古墳群		
第17図	浦入西2号墳墳丘測量図	20
第18図	浦入西2号墳石室実測図	22
第19図	閉塞石平・断面実測図	24
第20図	玄室内遺物出土状況図	26
第21図	出土遺物実測図(1)	27
第22図	出土遺物実測図(2)	28
2. 竹中遺跡		
第23図	調査地及び周辺遺跡分布図	31
第24図	調査地周辺地形図	32
第25図	第2トレンチ平板測量図	33
第26図	S X04平面図及び断面図	34
3. 余部遺跡第3次		
第27図	調査地周辺遺跡分布図	36
第28図	調査地位置図	37
第29図	調査地平面図・断面図	38
第30図	方形周溝墓 S X301実測図	39
第31図	出土遺物実測図	41
4. 平安京跡左京五条三坊十一町		
第32図	調査地位置図	43
第33図	平安京条坊図及び調査地位置図	44
第34図	調査地南壁及び北壁土層断面図	46
第35図	調査地平面図(1)	47
第36図	調査地平面図(2)	48
第37図	S E138・S K146・S E148遺構図	50
第38図	S A47遺構図	51
第39図	S K102遺構図	52
第40図	B4・B5・C4・C5区遺構図	53
第41図	S X24・S K54遺構図	54
第42図	出土遺物実測図(1)	57
第43図	出土遺物実測図(2)	59

第44図	出土遺物実測図(3)-----	61
第45図	出土遺物実測図(4)-----	63
第46図	出土遺物実測図(5)-----	65
第47図	出土遺物実測図(6)-----	66
5. 長岡京跡左京第400次(7ANEMR-4)・鶏冠井清水遺跡		
第48図	調査地位置図-----	69
第49図	遺構配置図-----	70
第50図	北壁・東壁土層断面図-----	71
第51図	方形周溝墓遺構図-----	73
第52図	出土遺物実測図(1)-----	74
第53図	出土遺物実測図(2)-----	75
第54図	出土遺物実測図(3)-----	76
第55図	出土遺物実測図(4)-----	77
6. 長岡京跡右京第584次(7ANGND-1地区)		
第56図	調査地位置図(平城京型復原による)-----	79
第57図	調査地遺構配置図-----	80
第58図	調査地土層断面図-----	81
7. 柏平遺跡		
第59図	調査地位置図-----	83
第60図	トレンチ配置図-----	84
第61図	Aトレンチ実測図-----	85
第62図	Bトレンチ実測図-----	86

図 版 目 次

1. 浦入遺跡群

(1) 浦入遺跡

- | | | |
|-------|------------------------------------|----------------|
| 図版第 1 | (1) 調査地遠景(南から) | (2) 調査地近景(南から) |
| 図版第 2 | (1) 石囲い炉跡検出状況(南西から) | |
| | (2) 縄文時代調査トレンチ全景(早期末～前期初頭調査区、南東から) | |
| | (3) 暗青灰色粘土層遺物出土状況 | |

- 図版第3 (1)流路状遺構全景(南東から)
(2)流路状遺構 a—b 土層断面(南東から)
(3)流路状遺構遺物出土状況(南東から)
- 図版第4 (1)竪穴式住居跡 S H01・S H04全景(南東から)
(2)S H01カマド全景(南から) (3)S H01カマド本体近景(東から)
- 図版第5 (1)テラス状遺構 S H10・S H11全景(南東から)
(2)テラス状遺構 S H11検出鍛冶炉跡 1 全景(西から)
(3)竪穴式住居跡 S H15全景(南東から)
- 図版第6 (1)テラス状遺構 S H13・S H14全景(南東から)
(2)S H14土馬出土状況(南から)
(3)テラス状遺構 S H20・S H23全景(南東から)
- 図版第7 (1)テラス状遺構 S H19全景(南西から)
(2)テラス状遺構 S H19全景(北東から)
(3)テラス状遺構 S H22全景(南東から)
- 図版第8 出土遺物(1)
- 図版第9 出土遺物(2)
- 図版第10 出土遺物(3)
- (2)浦入西古墳群
- 図版第11 (1)浦入西2号墳・浦入遺跡空中写真(南から)
(2)浦入西2号墳空中写真(南西から)
- 図版第12 (1)浦入西2号墳調査前全景(西から)
(2)浦入西2号墳表土除去後石材散乱状況(南から)
- 図版第13 (1)浦入西2号墳最終追葬面及び閉塞石検出状況(南西から)
(2)浦入西2号墳最終追葬面棺台検出状況
- 図版第14 (1)浦入西2号墳玄門付近遺物出土状況(南西から)
(2)浦入西2号墳追葬面検出状況(南西から)
- 図版第15 (1)浦入西2号墳玄室内遺物出土状況(北東から)
(2)浦入西2号墳転用枕付近遺物出土状況(南から)
- 図版第16 (1)浦入西2号墳追葬面玄室北西壁遺物出土状況(南東から)
(2)浦入西2号墳玄門付近遺物出土状況(北東から)
- 図版第17 (1)浦入西2号墳羨道部(北西から)
(2)浦入西2号墳羨道部石段状施設(北東から)
- 図版第18 (1)浦入西2号墳調査後全景(南西から) (2)浦入西2号墳玄室奥壁(南西から)
- 図版第19 (1)浦入西2号墳玄室南東壁(北西から)
(2)浦入西2号墳玄室北西壁(南東から)

- 図版第20 (1)浦入西2号墳玄室から羨道を望む(北東から)
 (2)浦入西2号墳羨道南東壁(南西から)
- 図版第21 (1)浦入西2号墳羨道南西壁(南から) (2)浦入西2号墳列石全景(東から)
- 図版第22 (1)浦入西2号墳列石南半分(東から) (2)浦入西2号墳列石北半分(南から)
- 図版第23 出土遺物(1)
- 図版第24 出土遺物(2)

2. 竹中遺跡

- 図版第25 (1)第1トレンチ調査前(南西から) (2)第1トレンチ作業風景
 (3)第1トレンチ完掘状況(南西から)
- 図版第26 (1)第2トレンチ作業風景 (2)S X04検出状況(北から)
 (3)第2トレンチ完掘状況(東から)

3. 余部遺跡第3次

- 図版第27 (1)調査前全景(東から) (2)調査地全景(東から)
- 図版第28 (1)方形周溝墓S X301検出状況(北から)
 (2)方形周溝墓S X301(北から)
- 図版第29 (1)方形周溝墓S X301(東から) (2)方形周溝墓S X301(南から)
- 図版第30 (1)方形周溝墓S X301(南西から)
 (2)方形周溝墓S X301西溝遺物出土状況(南から)
- 図版第31 (1)方形周溝墓S X301西溝断面(南から)
 (2)方形周溝墓S X301南溝断面(西から)
- 図版第32 (1)出土遺物(弥生土器) (2)出土遺物(石器)

4. 平安京跡左京五条三坊十一町

- 図版第33 (1)調査地上空から(右は烏丸通、上が北) (2)調査地全景(西から)
- 図版第34 (1)調査前風景 (2)南壁土層断面 (3)調査風景
- 図版第35 (1)B4・B5・C4・C5区遺構検出状況(南から)
 (2)調査地完掘状況(南から) (3)S A47完掘状況(西から)
- 図版第36 (1)S X24検出状況(西から) (2)S X24検出状況(南から)
 (3)S X24完掘状況(南から)
- 図版第37 (1)S K54検出状況(西から) (2)S K54遺物出土状況
 (3)土器溜まり2検出状況(北から)
- 図版第38 (1)S K03検出状況(東から) (2)S K98検出状況(北から)
 (3)S K102検出状況
- 図版第39 (1)S E138・S E148・S K146(南から) (2)S E138
 (3)S E138出土「ギンブナ」
- 図版第40 出土遺物(1)

図版第41 出土遺物(2)

図版第42 出土遺物(3)

5. 長岡京跡左京第400次(7ANEMR-4地区)・鶏冠井清水遺跡

図版第43 (1)調査前全景(北西から) (2)北壁土層堆積状況(南から)
(3)長岡京期完掘状況(北から)

図版第44 (1)SD07・SD13完掘状況(西から)
(2)SD40001(東三坊坊間小路西側溝)完掘状況(南から)
(3)SD40001溝内堆積状況(南から)

図版第45 (1)弥生遺構完掘状況(南から)
(2)SD19(方形周溝墓1)南辺溝内土器出土状況(南から)
(3)SD19(方形周溝墓1)北辺溝内土器出土状況(南から)

図版第46 (1)SD22(方形周溝墓2)西辺溝内土器出土状況(北から)
(2)SD22(方形周溝墓2)北辺溝内土器出土状況(南から)
(3)SD22(方形周溝墓2)北辺溝内木製鋤出土状況(西から)

図版第47 出土遺物(1)

図版第48 出土遺物(2)

6. 長岡京跡右京第584次(7ANGND-1地区)

図版第49 (1)調査地全景(南から) (2)調査地西壁土層断面(南東から)

図版第50 (1)調査地北壁土層断面(南から) (2)出土遺物

7. 柏平遺跡

図版第51 (1)Aトレンチ調査前風景(西から) (2)Aトレンチ東壁断面(西から)
(3)Aトレンチ完掘状況(西から)

図版第52 (1)Bトレンチ調査前風景(北から) (2)Bトレンチ南東壁断面(北西から)
(3)Bトレンチ完掘状況(北東から)

1. 浦入遺跡群平成8年度発掘調査概要

はじめに

京都府舞鶴市の北郊に位置する浦入湾に、関西電力株式会社によって火力発電所の建設が計画された。浦入湾周辺では、舞鶴市教育委員会による分布調査、及び火力発電所建設に伴う試掘調査によって、縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡や、製塩・鍛冶などの生産遺跡、古墳などが確認され、浦入遺跡群と総称された。

当調査研究センターでは、舞鶴火力発電所の建設予定地内に所在する浦入遺跡群の発掘調査について、舞鶴市教育委員会の依頼を受けて、平成7年度から実施している。調査対象地のうち、西半分を当調査研究センターが担当し、東半分を舞鶴市教育委員会が担当されている。

浦入遺跡群は、京都府舞鶴市宇千歳小字池カナル・花ヶ口ほかに所在する。当調査研究センターでは、平成7年度に、浦入遺跡群のうちM地点(嶋遺跡)・N地点(浦入遺跡)・D地点(浦入西古墳群)の発掘調査を行った。このうち、D・N地点については、次年度に継続して調査を実施することになり、調査の終了したM地点(嶋遺跡)についてのみ、すでに概要を報告している^(注1)。

平成8年度は、N地点(浦入遺跡)とD地点(浦入西古墳群)の調査を前年度に引き続いて実施したほか、新たにA・B地点(浦入遺跡)とE・F・G・H地点(浦入西古墳群)の調査に着手した。上記の各調査地点のうち、A地点を除いて調査を終了した。A地点については、次年度に継続して調査を行う予定である。

本概要報告では、平成8年度中に調査の終了した調査地点についての報告を行う^(注2)。

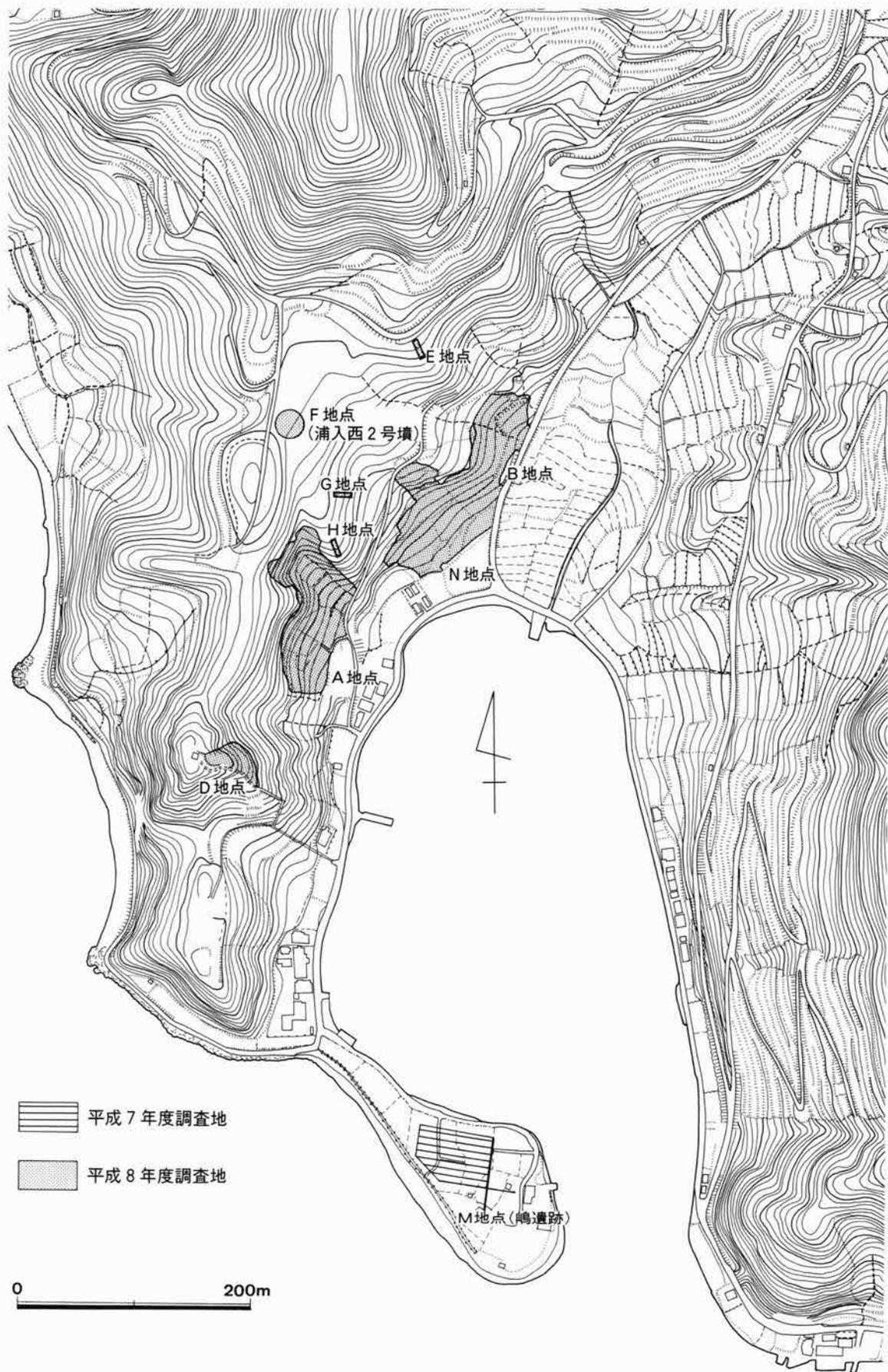
発掘調査は、平成8年4月16日から開始し、平成9年3月7日まで行った。この間、平成8年11月14日には、浦入遺跡B・N地点ならびに浦入西古墳群のうちF地点(浦入西2号墳)を対象として現地説明会を実施した。調査面積は、各調査地点合計で、約17,000m²に達する^(注3)。

発掘調査は、調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員石井清司・増田孝彦、同調査員奈良康正・筒井崇史が担当し、多くの調査補助員・整理員の協力を得た^(注4)。本概要報告は、増田・筒井のほか、植本順子(奈良大学学生)が執筆した。また、本概要報告の写真は、遺構を各担当者が、遺物を調査第1課主任調査員田中 彰が撮影した。

本発掘調査に係る経費は、舞鶴市教育委員会が負担した。
(筒井崇史)



第1図 調査地位位置図



第2図 調査地点位置図

(1) 浦入遺跡

1. 調査の経過

平成8年度の浦入遺跡の調査は、平成7年度に引き続いてN地点の調査を行ったほか、新たにB地点とA地点の調査に着手した。

N地点の調査は、平成7年度に、約3,500㎡を対象として、重機による表土掘削と遺構の検出作業を行った。平成8年度は、前年度の調査地に加えて、新たに1,500㎡を追加して合計5,000㎡を対象として調査を実施した。調査は、平成7年12月4日から平成8年2月28日、及び平成8年4月16日から平成9年2月3日にかけて行った。最終的な調査面積は、一部拡張区を加えて5,790㎡である。なお、平成8年度の調査で確認された奈良時代の製塩炉跡については、次年度に調査を予定しているO地点との関連が考えられ、周辺部も含めて次年度に再度、調査を行う予定である。

B地点の調査は、約1,800㎡を対象として、平成8年6月24日から重機による表土掘削を行い、平成8年7月26日から人力による調査を開始した。以後、断続的に遺構掘削・図面作成・写真撮影などを行い、平成9年1月21日に終了した。

A地点の調査は、約3,000㎡を対象として、平成8年10月21日から重機による表土掘削を行い、平成9年2月4日から2月27日まで遺構の検出作業を行ったが、本格的な調査は次年度に行う予定である。また、A地点の北側に隣接する谷部でも遺物包含層が確認されたため、平成8年12月3日から平成9年3月7日にかけて断続的に重機掘削を行い、次年度に合わせて調査を行う予定である。平成8年度中に着手したA地点の調査面積は、5,500㎡である。

本概要報告では、調査の終了したN地点及びB地点の報告を行う。出土遺物は、両調査地点分をあわせると、整理箱で約180箱を数えるため、ここではN地点出土の遺物を中心に報告する。

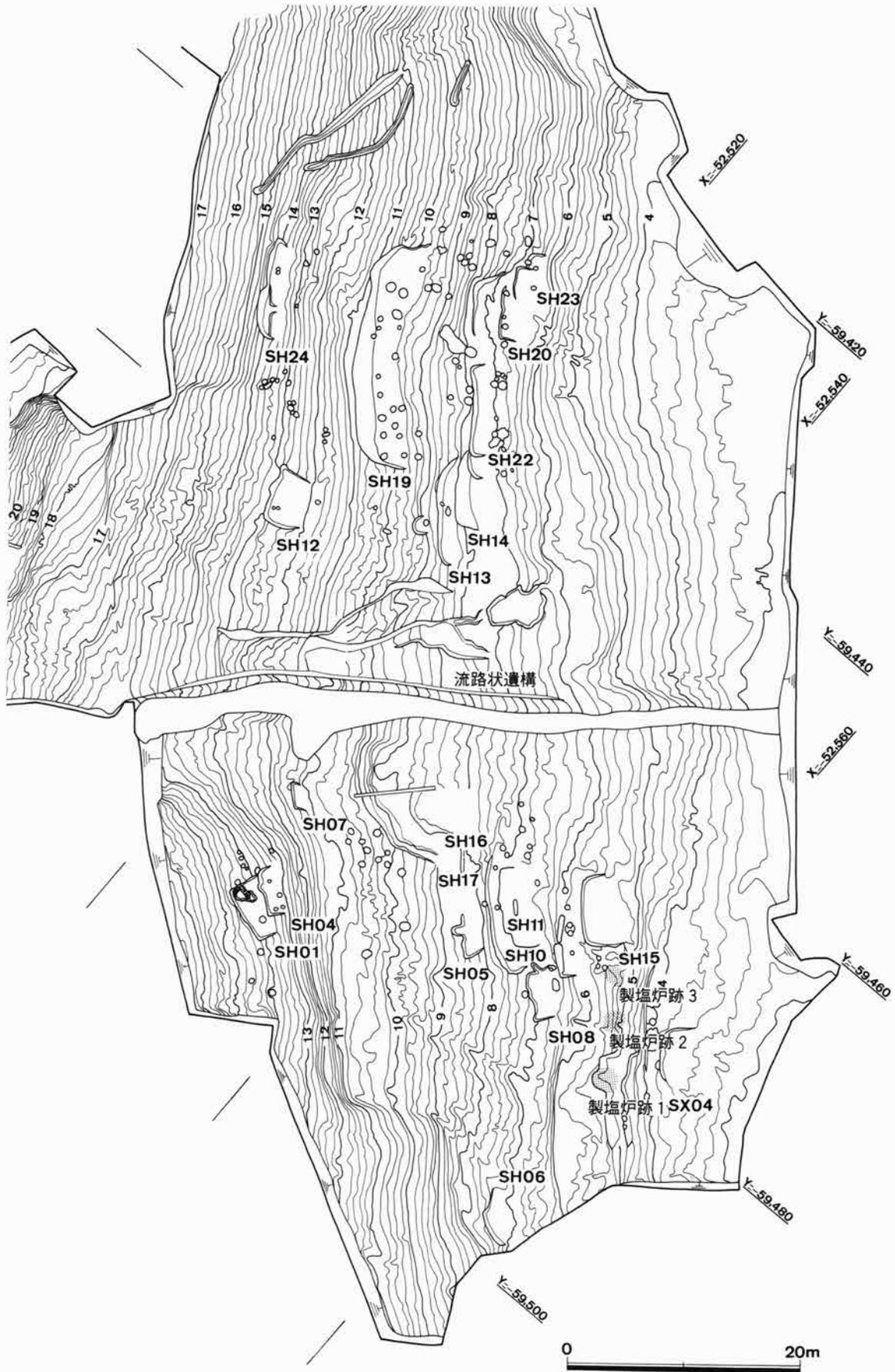
なお、浦入遺跡で検出された遺構・遺物に関する詳細な検討は、後日、刊行を予定している本報告書の中で行いたい。また、遺構の名称などは現地調査時のままであるが、今後、見直す可能性があることも付記しておく。

2. 調査の概要

(1) N地点

N地点は、浦入湾の最も奥まったところを見下ろす丘陵斜面に立地する。斜面はおおむね南東に向いており、標高は3～26mを測る。

調査の結果、ほぼ調査地点の全域から、竪穴式住居跡^(附5)・テラス状遺構^(附6)・流路・鍛冶炉跡・製塩炉跡などが検出された。これらは、大きく弥生時代後期・飛鳥時代・奈良時代の3時期に分けられる。また、調査区の南東部(丘陵斜面の低位側)で、縄文時代の遺物包含層を3層確認した。



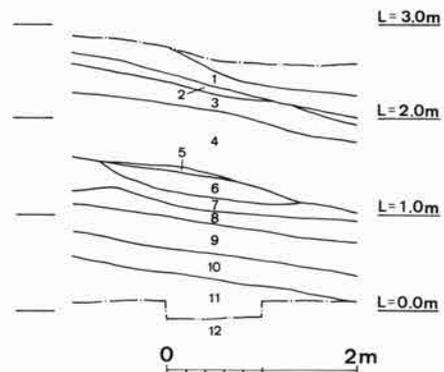
第3図 浦入遺跡N地点遺構配置図

①縄文時代

縄文時代の遺物包含層は、縄文時代早期末～前期初頭・縄文時代中期前半・縄文時代後期前半の3時期が確認できた。各遺物包含層は、厚さ1m前後の土石流による礫層や無遺物層を挟んでおり、層位的に区別できる。各包含層からは、多数の遺物が出土した。^(注7)

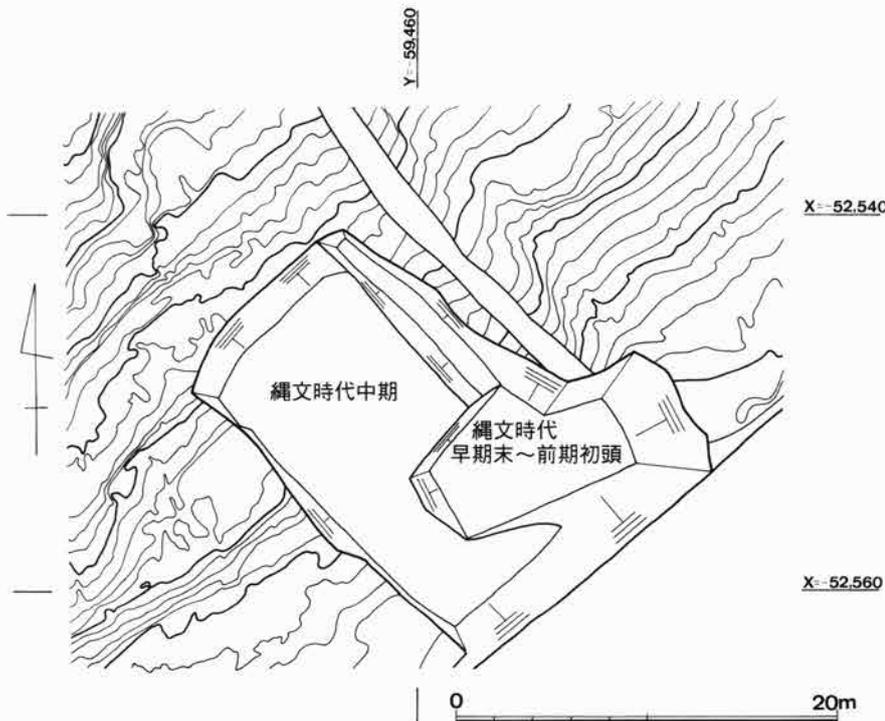
遺物包含層のうち、前2者については、調査地点南東に設定した調査トレンチ(調査面積約310m²)での断面観察と、小面積による面的な調査を実施したにとどまるが、縄文時代前期以来の土石流によって、埋没した谷地形を確認することができた。ただし、遺物包含層の広がりや谷地形の全容については明らかにできなかった。

縄文時代早期末～前期初頭の遺物が出土した暗青灰色粘土層は、標高0～1m付近に当たり、同層を中心に花粉分析及び炭素14年代測定を行った。炭素14年代測定の結果、6,450±70BP年という結果を得ることができた。^(注8) 出土遺物は、いずれも細片化しているが、表裏縄文などが認められる。



第4図 縄文時代調査トレンチ土層断面図

1. 青灰色砂礫混じり粘質土
(縄文時代後期の遺物を含む)
2. 暗青灰色粘質土
3. 青灰色～灰色粘質土
4. 茶褐色砂礫
5. 茶褐色粗砂
6. 茶褐色粘質土
7. 灰色～淡青灰色粘土(小礫を少し含む)
8. 茶褐色礫
9. 灰色～青灰色礫
10. 灰黄色礫
11. 暗青灰色粘土
(縄文時代早期末～前期初頭の遺物を含む)
12. 緑灰色シルト(小礫を含む)



第5図 縄文時代調査トレンチ平面図

縄文時代中期の遺物が出土した暗灰色粘土層は、細片化した少量の土器片(里木式か)と石鏃2点が出土したにとどまる。第4図に示した土層断面図では、中期の遺物包含層は示されていないが、層位的には4層と7層の間に位置づけられる。

縄文時代後期の遺物は、埋没谷地形の最上層にあたる暗茶褐色砂礫混じり粘質土層から出土した。縄文時代後期の遺物包含層については、ほぼ全面的に調査を実施し、包含層の南半部を中心に多くの土器が出土した。確認できた型式に中津式・福田K2式などがある。遺構としては、石囲い炉跡1基を検出したが、ほかに遺構は確認されなかった。

石囲い炉跡(図版第2-(1))は、調査地点のほぼ中央で検出した。炉跡の遺存状況は良好であるが、還元された砂礫混じり粘質土層中から検出されたため、現位置を保っていない可能性もある。炉跡は、厚さ4～5cmほどの偏平な石を「U」字形に立てて並べている。内面は赤く変色しており、炉底も固く焼け締まっていた。炉跡に隣接して、やや大型の土器が出土したが、磨滅が著しく詳細は不明である。検出された層位から、縄文時代後期に位置づけられる。

②弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は、調査地点の南側を中心に検出され、飛鳥時代の遺構群と重複している。検出された遺構には、竪穴式住居跡・流路状遺構がある。また、調査地点の南端に比較的良好な遺物包含層が認められた。この付近は、次年度の調査地であるO地点に隣接することから、O地点での調査成果と合わせて検討したい。

竪穴式住居跡(SH05・16・17) 竪穴式住居跡と思われる遺構を3基確認したが、丘陵斜面に立地することや飛鳥時代の遺構群に削平されていることから、完存するものはなく、いずれも丘陵上位側が遺存していたにすぎない。竪穴式住居跡から出土した土器には、甕・壺・高杯などがある。

竪穴式住居跡SH16は、調査地点の中央で検出された円形を呈する大型の竪穴式住居跡である。検出状況から、少なくとも2基以上の切り合いを有するものと考えられる。丘陵下位側を失うが、上位に掘削されているものは直径12.5mに、下位に掘削されているものは直径11.0mに復原される。SH16からは比較的まとまった遺物が出土している。

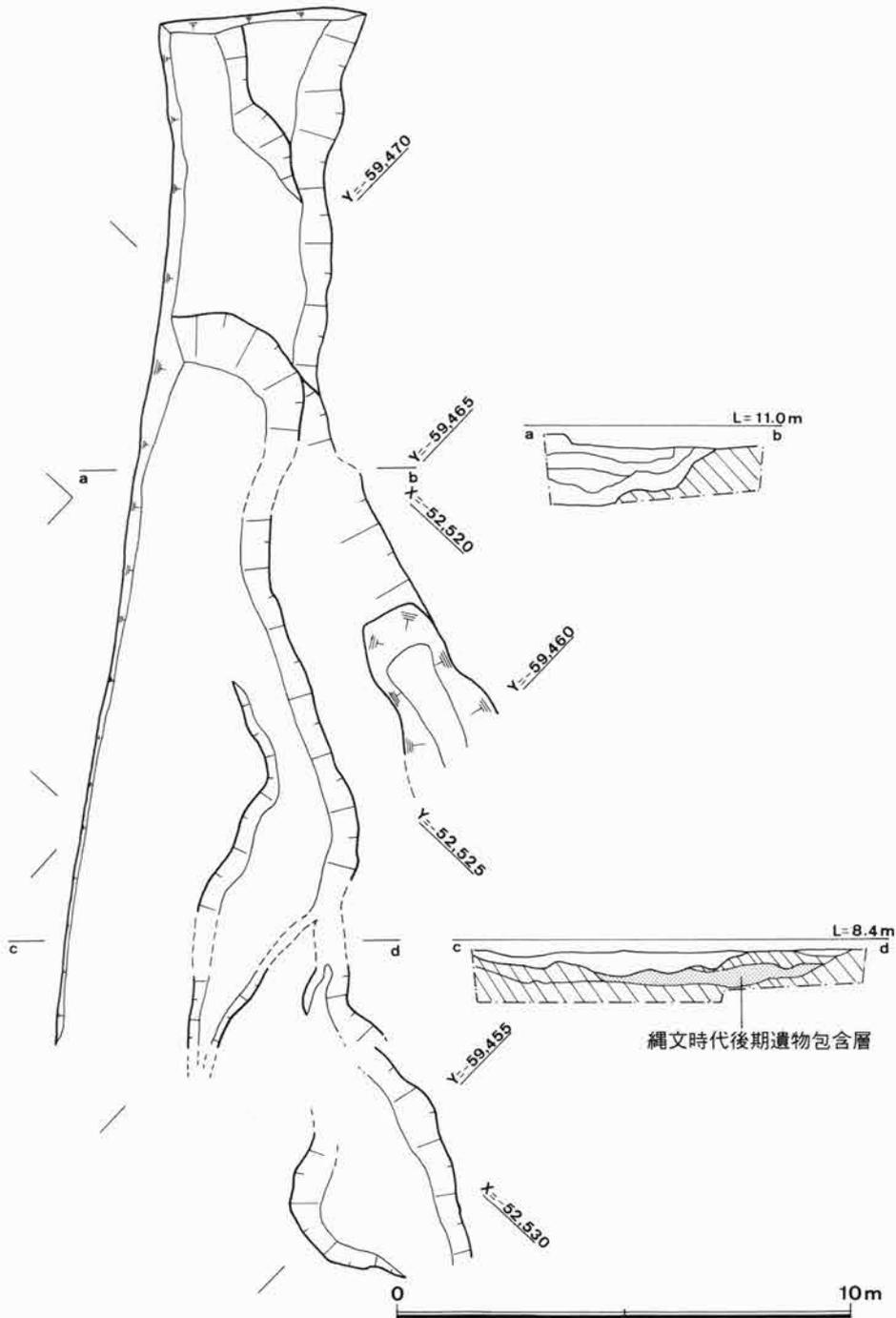
竪穴式住居跡SH05・17は、いずれもその一部が遺存していたにすぎない。おそらく方形の竪穴式住居跡と思われるが、規模などは不明である。出土した遺物も少量である。

流路状遺構(第6図) 調査地点のほぼ中央の丘陵斜面を流れていたと思われる流路状遺構を検出した。流路状遺構は、縄文時代後期の遺物包含層の上に堆積した茶灰色礫混じり砂質土をベースとして形成される。流路状遺構には、このほかに奈良時代と思われるものもあり、時期を違えて複数の流路状遺構が形成されていたと考えられる。検出した流路状遺構は、丘陵上位側で奈良時代のものと重複していた。

流路状遺構は、検出長約28mを測るが、北東側の肩を検出したにとどまり、斜面上方端、南西肩は未確認である。また、斜面下方端も明瞭な状態で確認できなかった。幅3.6～6.0m以上・深さ0.5～1.2mを測る。流路状遺構の底で検出された弥生土器群は、比較的まとまった状況で出土

しており、特に土層断面A-A'とした付近に集中していた。ここには丘陵上位側と約1mの段差があり、大きな掘り込み(竪穴式住居跡か?)が認められた。弥生土器の大半は、この掘り込み
に集中して投棄されたと考えられ、一括性の高い土器群である。また、土層断面A-A'のセク
ションから銅鏃1点(第8図28)が出土している。なお、弥生土器は遺構の確認できた斜面下方に
も扇状に広がっている。

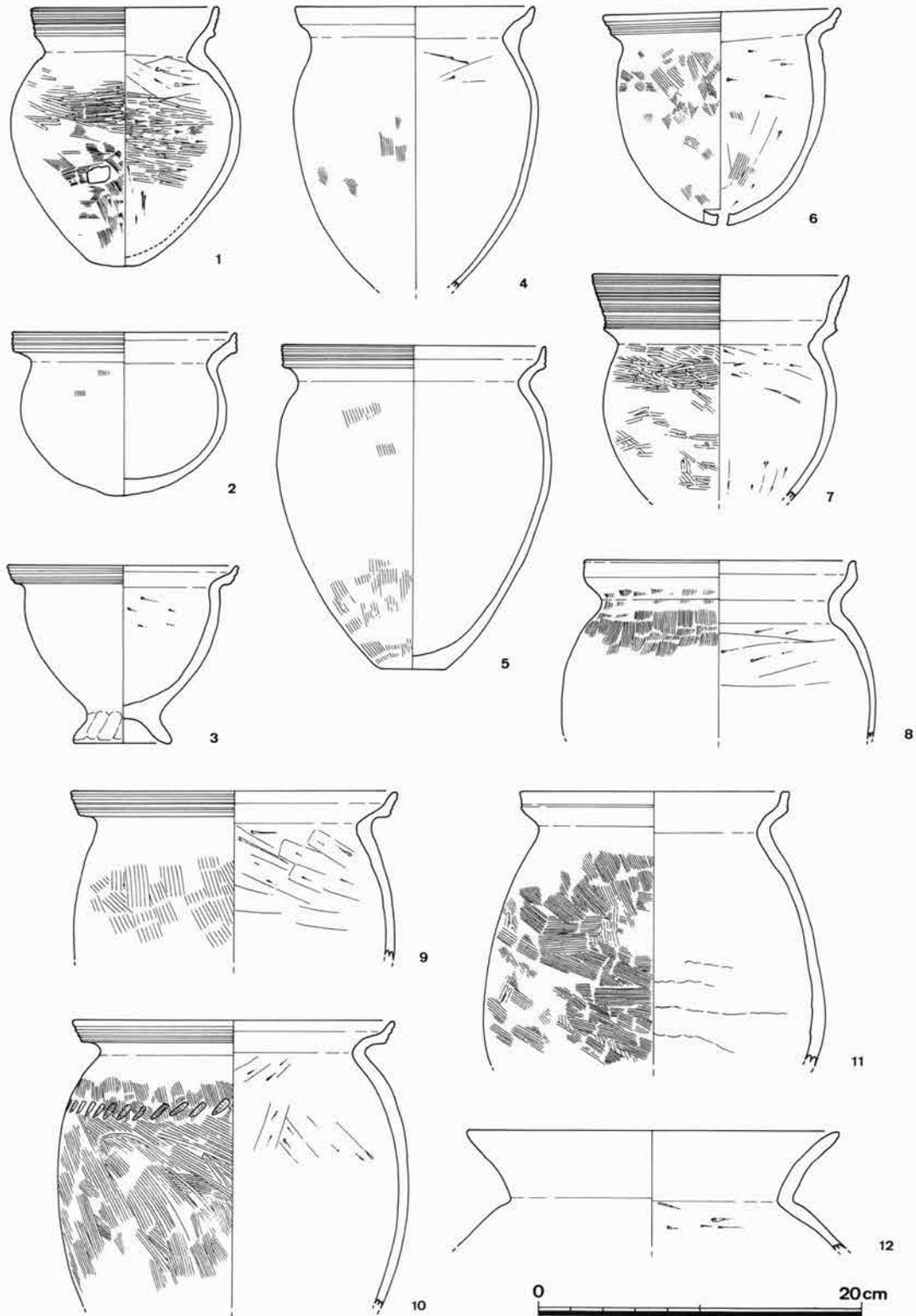
流路状遺構から出土した遺物は、先述の銅鏃1点を除いてすべて土器であり、整理箱にして約
60箱に達する。流路状遺構から出土した主なものを第7・8図に図示した。土器には、甕(1・



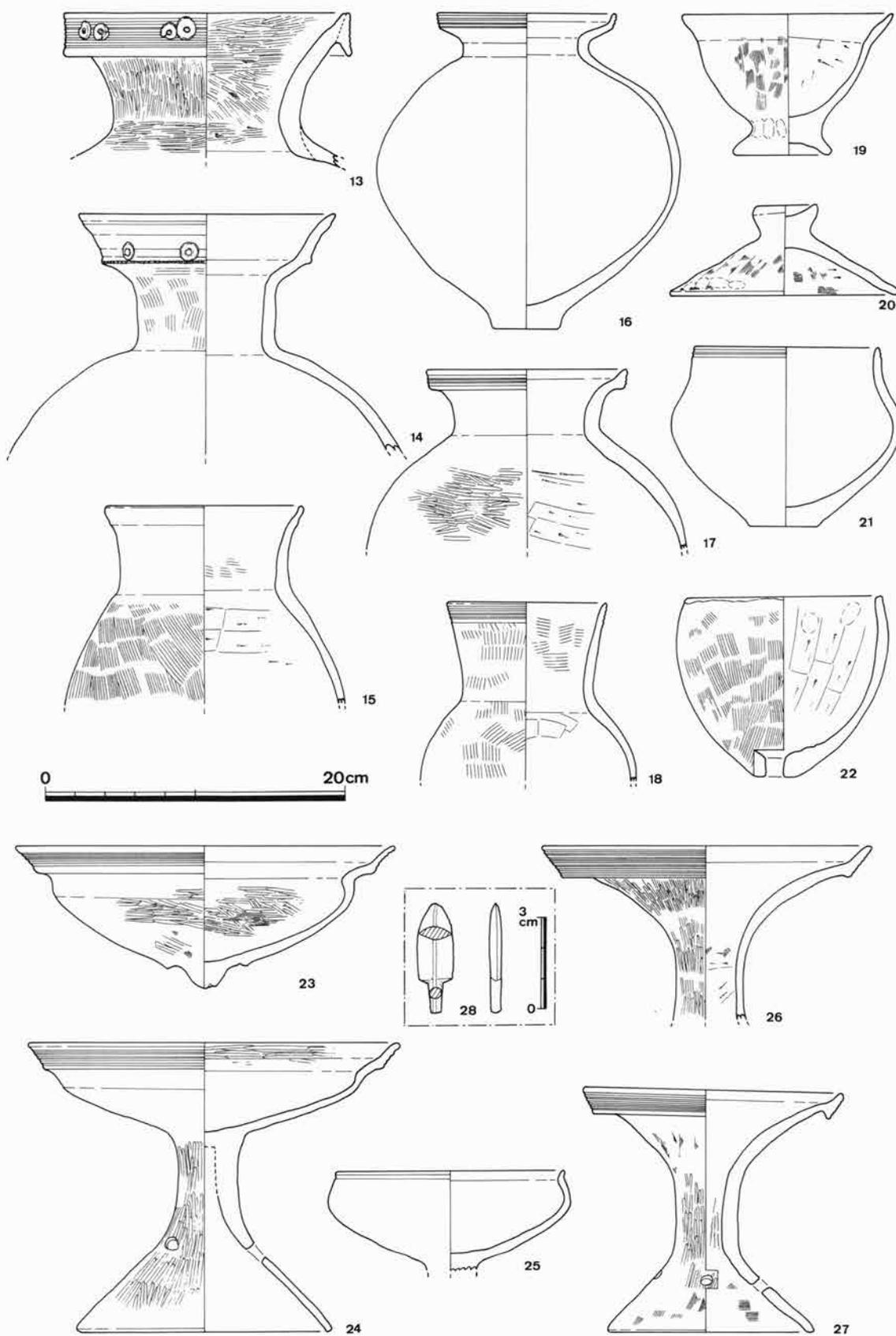
第6図 流路状遺構実測図

4・5・7～12)・鉢(2・3・6・19・21・22)・壺(13～18)・蓋(20)・高杯(23～25)・器台(26・27)などがあり、ほかに銅鏃(28)がある。

甕の大半は、丹後地域に一般的な複合口縁を有する甕であるが、北陸系と思われるもの(7)、口縁端部に面を持つ近江系かと思われるもの(11)、「く」字口縁の甕(12)なども少量出土している。



第7図 流路状遺構出土遺物実測図(1)



第8図 流路状遺構出土遺物実測図(2)

る。また、図示していないが、外面にタタキ調整痕を有する甕もわずかであるが確認している。外面にミガキを有する甕も見られる(1・7)。

鉢には、さまざまな形態のものがあり、有孔のもの(6・22)や台付きのもの(3・19)が比較的多く出土している。鉢のうち、2・3・6は、丹後地域に一般的な複合口縁を有する。

壺にも、多様な形態のものが見られる(13~18)。13は、口縁端部に粘土紐を貼り付けて垂下させる広口壺である。口縁端部には、擬凹線文を施した上に円形浮文を貼り付ける。14は、頸部がまっすぐに立ち上がる二重口縁壺である。口縁部外面に刻み目文と円形浮文を施す。15・18は、長頸壺と思われるものである。18は擬凹線文を、15は横方向の強いナデ調整を口縁部外面に施す。16・17は、口縁部外面に擬凹線文を有する受け口状口縁の広口壺である。

高杯・器台は、いずれも丹後地域に一般的な形態である。他の形態のものについては、現在整理中であり、有無も含めて確認できていない。

第8図28は、銅鏃である。全長3.6cm・関幅1.1cmを測る。

③飛鳥時代

飛鳥時代の遺構は、主に調査地点の南側で検出された。検出された遺構には、竪穴式住居跡・テラス状遺構・鍛冶炉跡などがある。鍛冶炉跡は、テラス状遺構SH11でまとめて検出された。

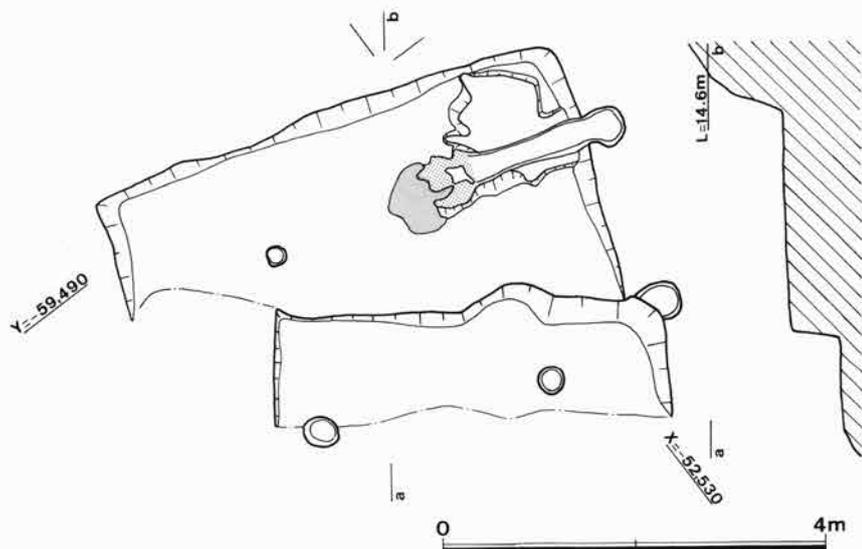
(筒井崇史)

竪穴式住居跡SH01(第9図) 調査地でもっとも高所に位置する竪穴式住居跡である。東側をSH04によって削平されており、全体の規模は不明であるが、確認できた西側の一辺は5.0mを測る。壁高は、もっとも残りのよい西壁で0.8mを測る。周壁溝はみられない。柱穴は1個確認した。住居跡の北壁の隅寄りのところに造り付けのカマドをもつ。カマドの西側には、床面より一段高くなったテーブル状を呈するが、その性格は不明である。

出土遺物は、カマドの東側で土師器甕2点が出土した(第12図40・44)。

カマドは、住居跡の内部に煙道を有するもので、煙出しは住居跡の外部に設ける。全長2.2m

を測る。浅い掘り込みを設けて焼成部と煙道部をつくり、その周囲に粘土を積み上げて構築されていた。天井部は崩落しており、上部構造は不明である。焼成部は堅く焼け締まっている。煙道は、ほぼ真北にのびているが、この方向は浦入



第9図 竪穴式住居跡SH01実測図

遺跡群の所在する丘陵斜面の傾斜に直交している。

なお、同様の形態をもつカマドが舞鶴市桑飼下遺跡や大宮町裾谷遺跡で確認されている。^(注9)

(植本順子)

竪穴式住居跡 SH08・SH12・SH15

竪穴式住居跡 SH01のほかにも、ほぼ同規模の竪穴式住居跡3棟を確認した。平面形はいずれも隅丸方形と考えられ、丘陵上位側の一辺は5m前後を測る。各竪穴式住居跡とも床面近くから須恵器や土師器がまとまって出土しており、造営時期を知ることができる(第12図)。SH08でカマドを検出した。また、SH12でもカマドの残欠と思われる焼土塊を確認した。SH01と同様、両住居跡の煙道ののびる方向は、浦入遺跡群の所在する谷地形に一致しており、北からやや東に振った方向である。

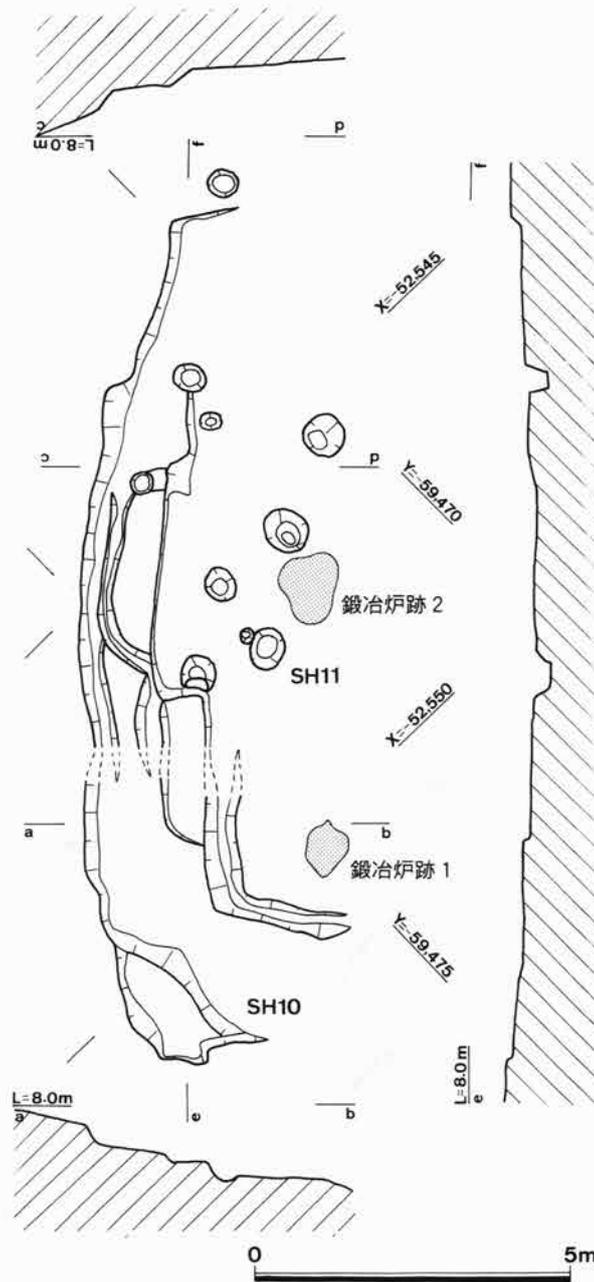
テラス状遺構 SH10・SH11(第10図)

調査地点南半部のほぼ中央に位置するテラス状遺構で、SH10とSH11が重複して検出された。当初は、1基のテラス状遺構と考えていたが、調査の結果、少なくとも2基のテラス状遺構が切り合っているものと判断した。

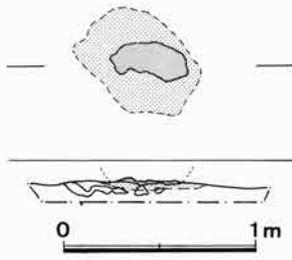
西側に位置するSH10は、上位側の長さが13.4mを測る大型のテラス状遺構である。しかし、床面の大半はSH11と重複するため、SH10本来の部分は周壁と約4m分が検出された周壁溝だけである。周壁溝から置き竈の破片が出土している。

東側に位置するSH11は、北東隅部分を欠く。丘陵上位側の残存長は8.7mを測る。丘陵上位側の周壁は直線にならず、約3.7m分が上位側に突出する。SH11の床面で、鍛冶炉跡と思われる焼土面を少なくとも2基確認している(鍛冶炉跡1・2)。周壁溝は、北西の部分のみで確認できた。SH10・SH11出土の遺物は図示していないが、須恵器杯H・杯G^(注10)が出土している。

SH10・SH11は、その規模や鍛冶炉跡が検出されたことから作業場のような空間であったと



第10図 テラス状遺構SH10・SH11実測図



第11図 テラス状遺構SH11
鍛冶炉跡1実測図

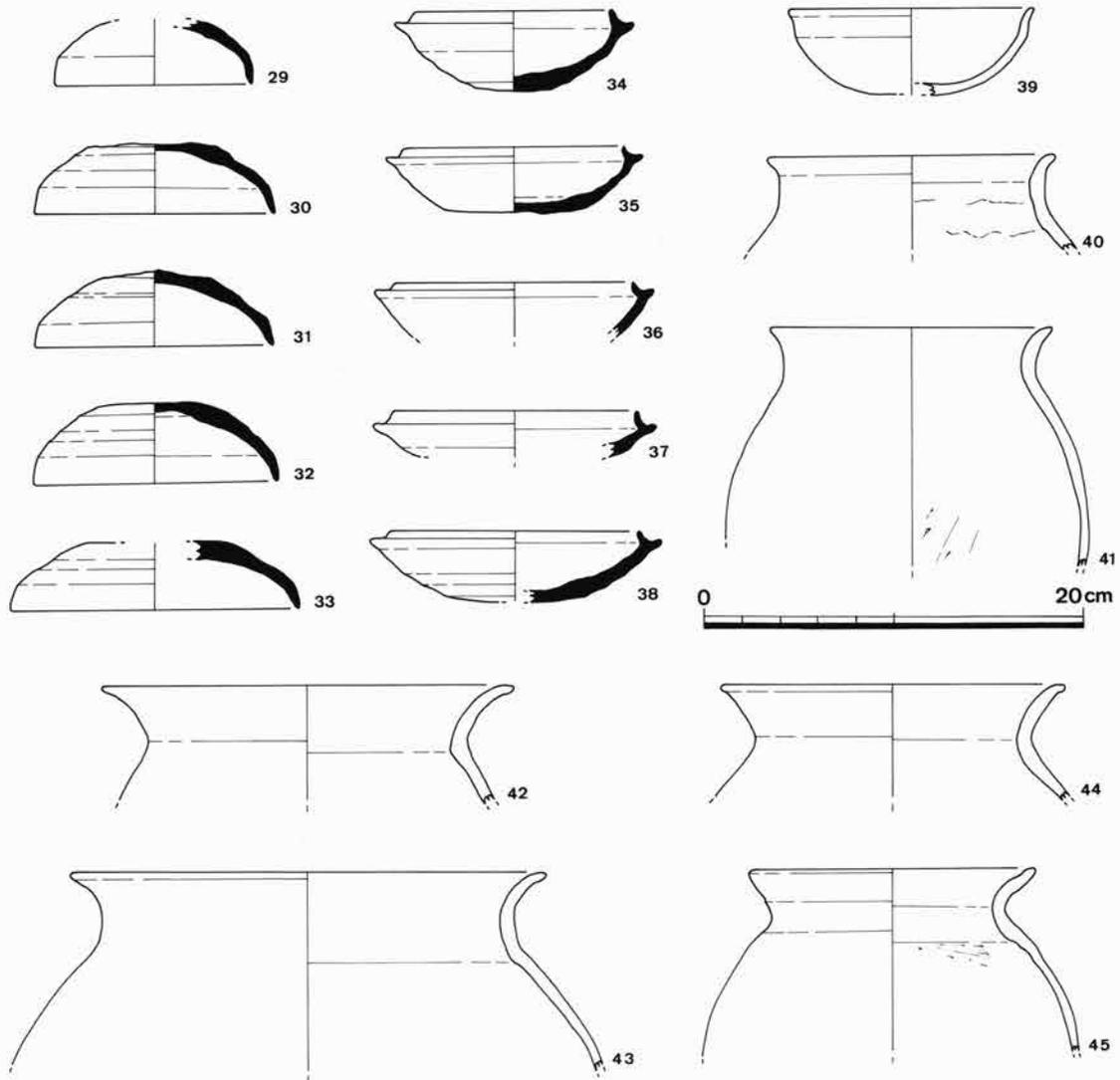
考えられる。

鍛冶炉跡1(第11図) SH11の床面上で少なくとも2基の鍛冶炉跡を検出した。このうち、鍛冶炉跡1を図示した。鍛冶炉本体は、上部が削平されており、炉底部のみが残存していた。残存する炉底部は長楕円形を呈しており、長軸長40cmを測る。炉底には粘土を貼り付けていたようであり、固く焼け締まっていた。炉底部の周辺は、赤褐色に酸化していた。検出状況から、鍛冶炉跡1は炉本体を粘土などを利用して構築したと思われる。鍛冶炉跡2についても状況は

ほぼ同じであった。

この2基の鍛冶炉跡以外にも焼土面を2・3か所確認したが、いずれも炉底と思われる固く焼け締まった部分を確認できなかったため、鍛冶炉跡とは断定していない。

なお、SH11の床面上の埋土を水洗して鍛造剥片・砂鉄を検出した。また、SH10・SH11の



第12図 飛鳥時代出土遺物実測図

40・44. SH01 29・31・32・36~38・42・43. SH08 30・33~35・39・41・45. SH15

埋土中から鉄滓数点が出土しているが、鞆など鍛冶関係の遺物は出土していない。

出土遺物(第12図) 当該期の遺物は、各竪穴式住居跡をはじめ、調査地内全体で出土している。今回図示したのは、竪穴式住居跡S H01・08・15から出土した須恵器蓋杯、土師器杯・甕である。大半は、床面出土遺物で各住居跡の時期を示すと思われる。

29～33は、須恵器杯H蓋である。口径は10.3～15.1cmを測るが、大半は11・12cm台に集中する。34～38は、須恵器杯Hである。口径が10.4～13.1cmを測り、杯H蓋同様、11・12cm台に集中する。杯・蓋とも底部または天井部にごく簡単なヘラケズリが施されるか、あるいはヘラ切りのままである。杯Hとその蓋の口径が縮小すること、ヘラ切りのままのものが見られることから、TK217^(注11)型式もしくは飛鳥I段階^(注12)のものと思われる。

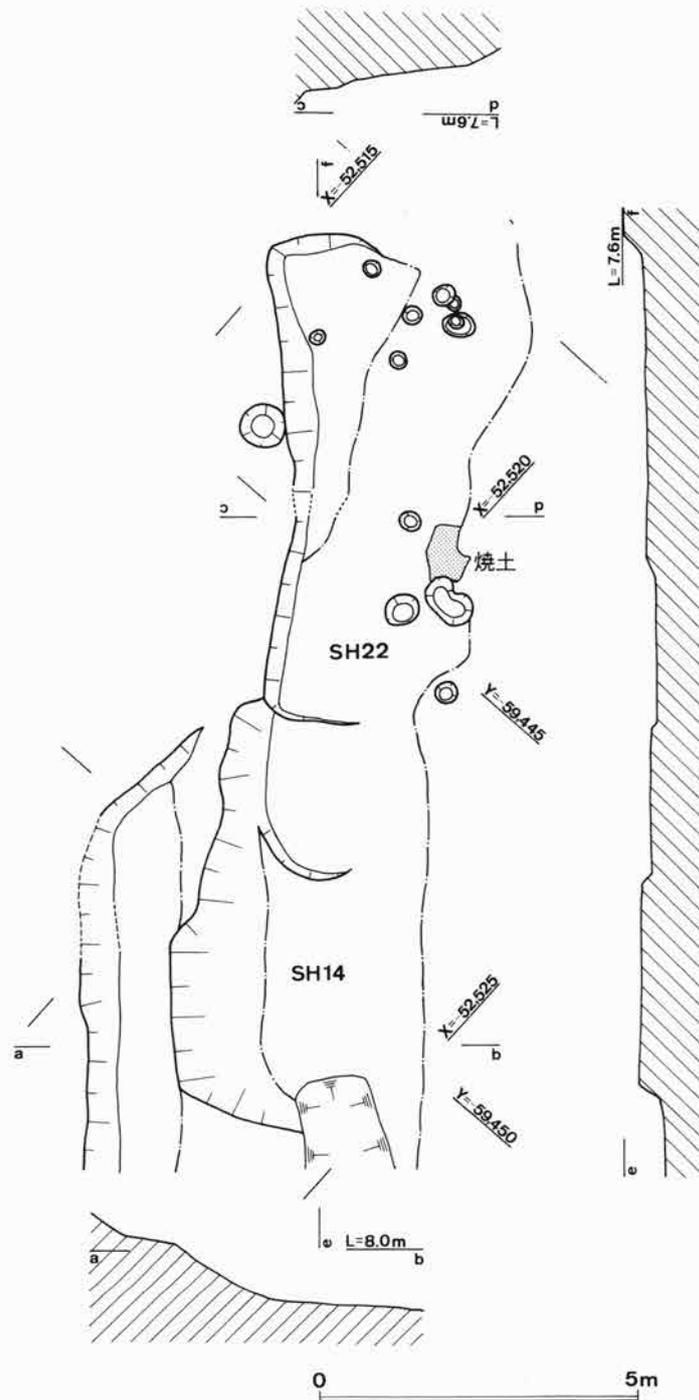
39は、土師器杯である。口径12.8cm・器高4.6cmを測る。口縁部外面に強いナデ調整を施し、口縁部をわずかに外反させる。40～45は、土師器甕である。口径は14.6～24.7cmを測る。体部外面は磨滅が著しいが、いずれもハケ調整と思われる。体部内面はケズリ調整が施される。口縁部が短く外反するもの(40・41)や口縁部が長く外反するもの(42～44)がある。また、45は口縁部内面に強いナデ調整の痕が見られる。

④奈良時代

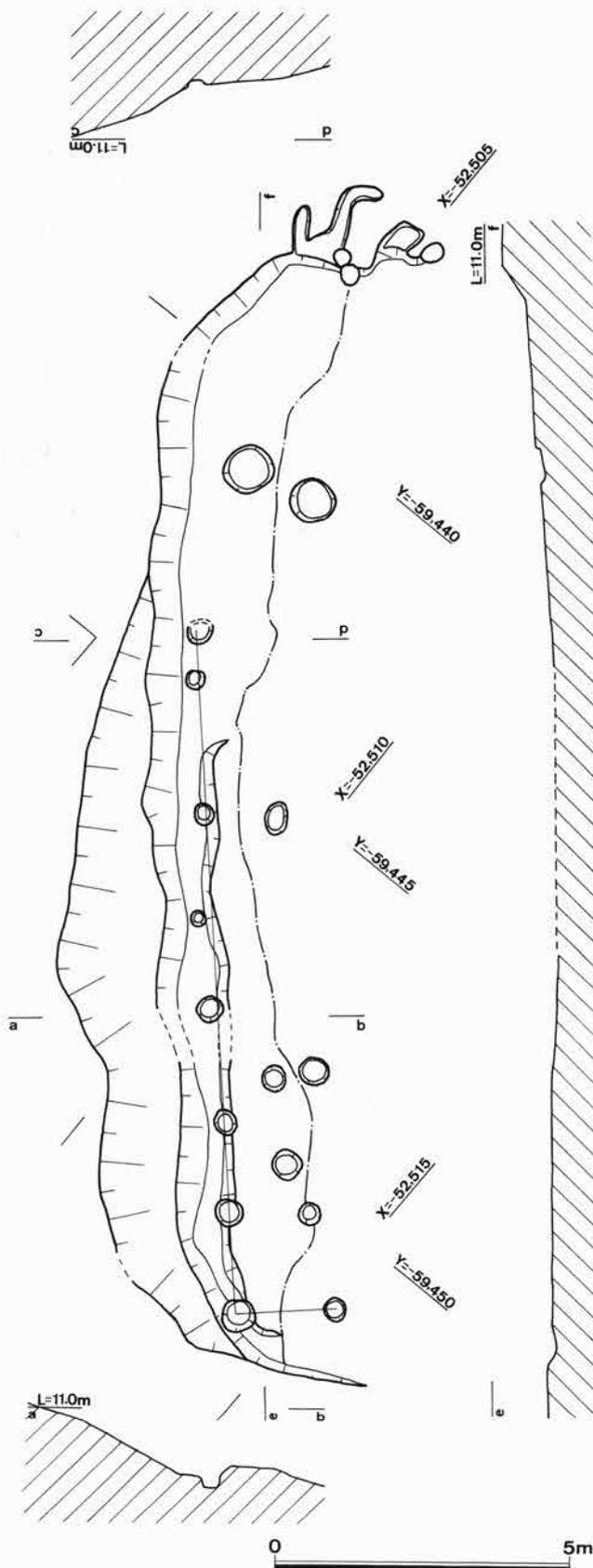
当該期の遺構は、調査地点の北東側でテラス状遺構が、また調査地点の南端で製塩炉跡が検出された。テラス状遺構については、居住用の掘立柱建物のほか、製塩作業に関連する作業場・倉庫などとして利用したと考えられる。製塩炉跡と思われる集石は3基確認した。

テラス状遺構S H14・22(第13図)

調査地点の北半部南東よりで検出



第13図 テラス状遺構S H14・S H22実測図



第14図 テラス状遺構SH19実測図

されたテラス状遺構である。当初、1基の大規模なテラス状遺構を想定していたが、床面に段差が認められたことや、遺構の掘形のラインが大きく屈曲することから、2つの遺構が切り合っていると考え、南西側をSH14、北東側をSH22とした。

SH14は、丘陵上位側の長さが6.2mを測るテラス状遺構である。掘り込みの深さが1m近くあり、埋土中から多数の遺物が出土した。なお、SH14の床面上では柱穴などは確認できなかった。

SH22は、丘陵上位側の長さが7.1mを測るテラス状遺構である。床面の大半が削平されていたものの、柱穴や焼土を確認できた。ただし、掘立柱建物跡などには復原できなかった。

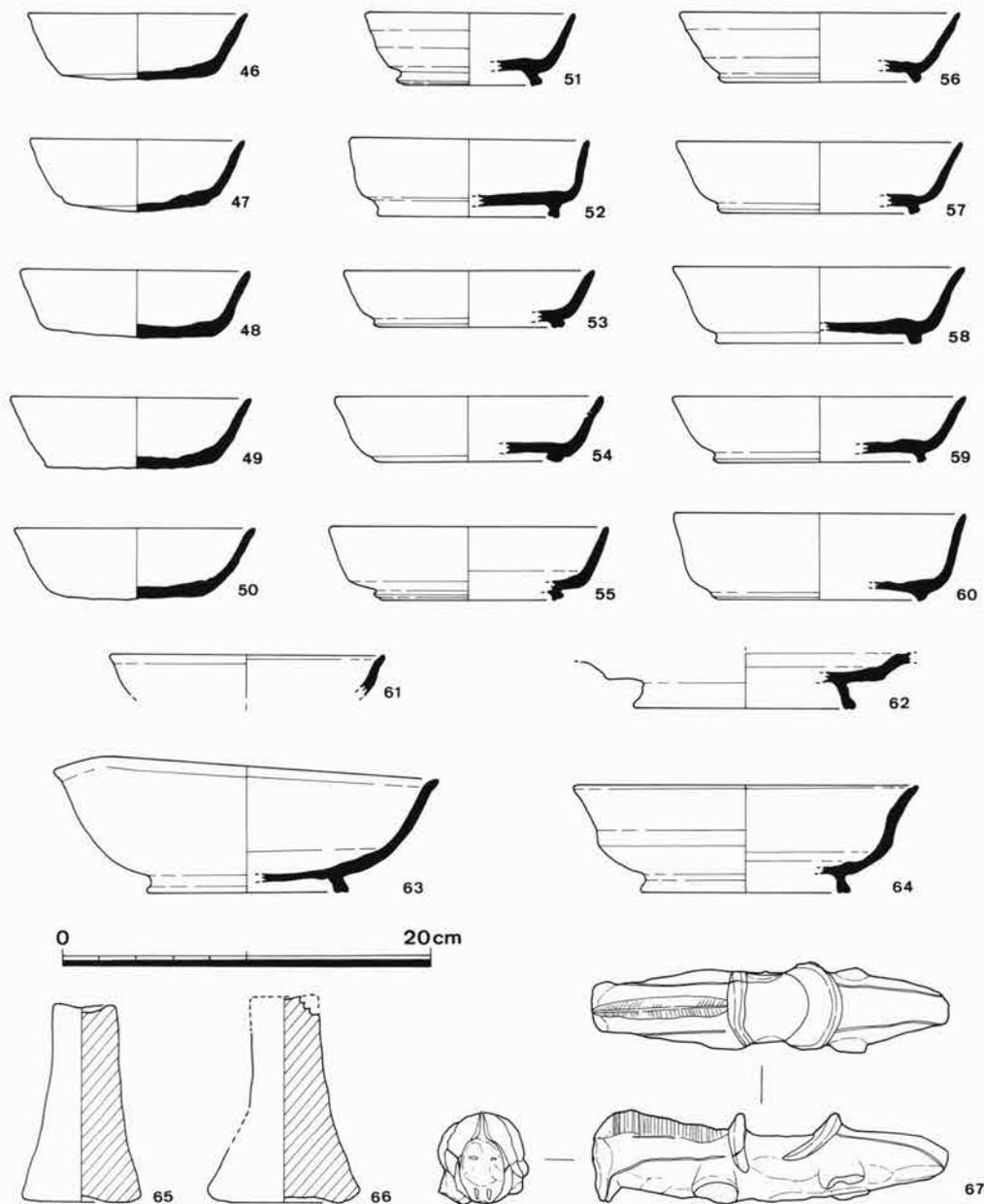
テラス状遺構SH19(第14図) SH14・SH22の上方に位置するテラス状の遺構である。長さ約18.7m、床面の残存幅0.4~1.7mを測る大規模なテラス状遺構である。テラス面で柱穴を多数検出しており、2ないし3棟の掘立柱建物跡が復原できるようなのである。SH19の埋土からは、完形の製塩土器支脚(第15図65)のほか、製塩土器と思われる土器の小片がまとまって出土している。

上記以外にも、SH13・SH20・SH23などのテラス状遺構がある。各遺構とも埋土中から多数の遺物が出土している。

製塩炉跡 製塩炉跡は、いずれも海岸部に接する丘陵先端に約5mほどの

間隔を開けて3基が並んで造られている。製塩炉跡の前面は比高差約1.4mを測る段差となっている。製塩炉跡は、標高5.4m付近に位置するため、いわゆる焼き塩段階の作業をここで行ったと考えられる。

製塩炉跡1・2は、径約1.2mの範囲に角礫を配置して炉床としたものである。また、製塩炉跡1の下層で確認した土坑から、船岡式製塩土器が出土した。製塩炉跡3は、若干削平を受けているようであるが、長さ約2m・残存幅0.4~0.8mのやや長方形に近い形状を呈する製塩炉である。製塩炉については、次年度に調査を予定している浦入遺跡群O地点との関連が考えられるため、周辺部も含めて次年度に再度、調査を行う予定である。



第15図 奈良時代出土遺物実測図

46~62・67. S H14

63. 製塩炉跡1前面遺物包含層

64. S H20

65. S H19

66. S H22

出土遺物(第15図) 須恵器・土師器のほか、製塩土器や土馬などがある。図示した遺物の大半は、テラス状遺構SH14から出土している。

46～50は、須恵器杯Aである。口径11.9～12.9cm・器高3.8cm前後を測り、ほぼ同形同大のものである。51～60は、須恵器杯Bである。口径11.2～15.7cm・器高3.2～4.7cmを測る。器高は、3.5～4.0cmの値に多い。口縁部は、52を除いて外上方にのび、直線のままのもの(53・55・59)とわずかに外反するもの(51・54・56～58・60)とがある。また、52・54は、高台が内方を向く。61は、碗の口縁部破片である。62は、やや高めの高台を有する皿と思われる須恵器である。63は、製塩炉跡1の前方の遺物包含層から出土した杯Fである。大きく焼けひずんでいる。64は、テラス状遺構SH20から出土した杯L(いわゆる稜碗)である。

これらの須恵器は、おおむね奈良時代中頃～後半に位置づけられると思われる。

65・66は、製塩土器支脚である。底径は異なるものの、高さはほぼ同じ(約11cm)である。

67は、テラス状遺構SH14から出土した土馬である。全長19.3cm・残存高5.2cmを測る。足は4本とも欠損する。

(2) B地点

B地点は、N地点の北東に接する調査地点である。丘陵の斜面は、N地点とB地点の境でやや屈曲しており、B地点の斜面はおおむね東南東に向いている。標高は8～18mを測る(第16図)。

B地点で検出された遺構は、竪穴式住居跡またはテラス状遺構4基・鍛冶炉跡4基にすぎない。これらの鍛冶炉跡については、すでに舞鶴市教育委員会による試掘調査時に確認されていたものである。

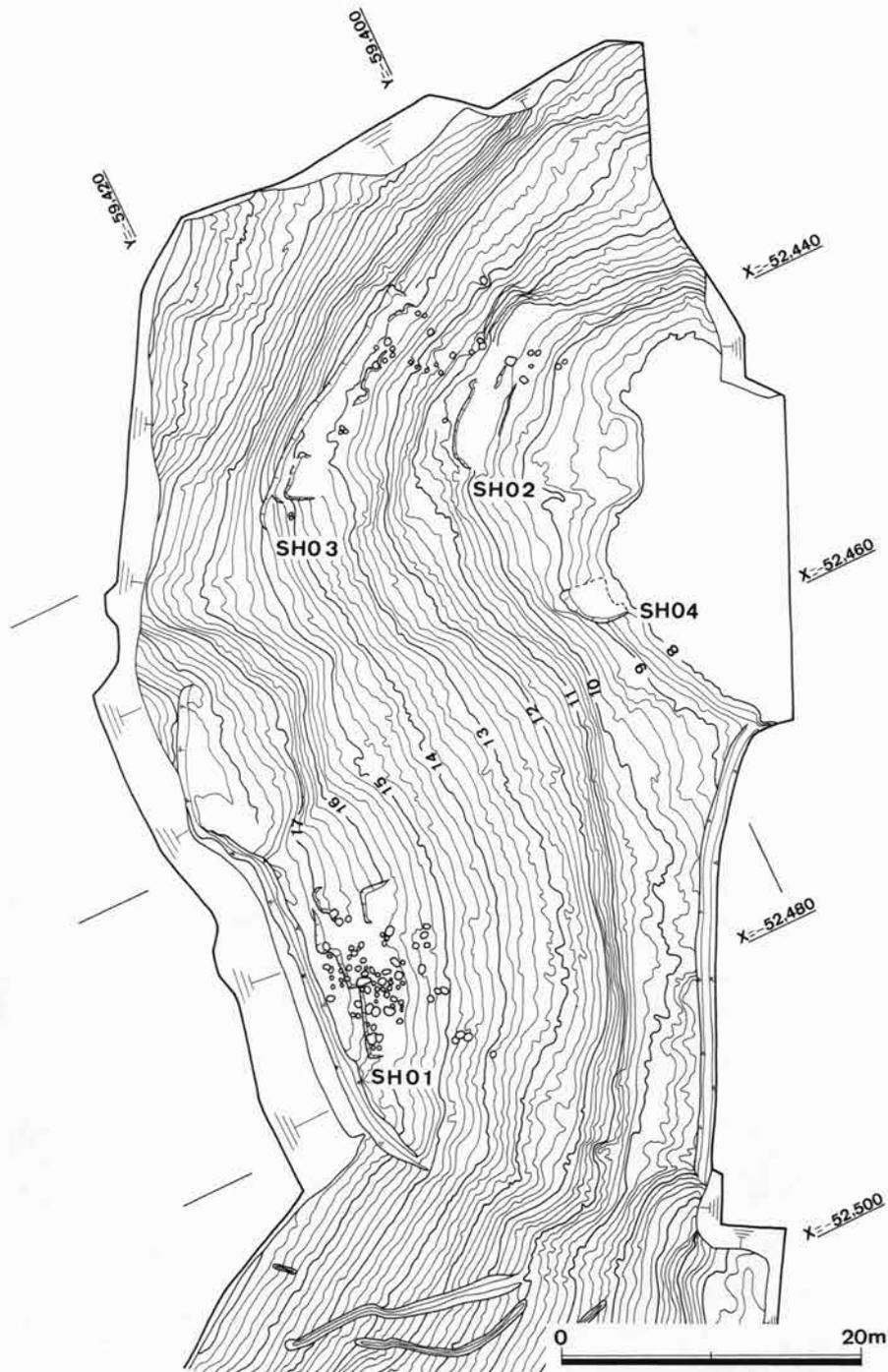
鍛冶炉跡4基は、いずれもテラス状遺構SH01でまとまって検出された。このことから、SH01は、N地点で検出されたテラス状遺構SH11と同様、作業場のような施設であったと考えられる。また、これらの鍛冶炉跡の時期は、周辺から出土した遺物から奈良時代と考えられ、N地点で検出された鍛冶炉跡とは、若干時期差がある。

竪穴式住居跡またはテラス状遺構から出土した遺物は、おおむね奈良時代に属すると思われる。また、中世の瓦質土器なども出土している。

3. まとめ

平成8年度は、浦入遺跡の本格的な調査を行い、竪穴式住居跡・テラス状遺構・流路状遺構・柱穴・製塩炉跡・鍛冶炉跡など多数の遺構を検出した。特に、縄文時代早期末から後期にかけての遺物包含層の存在や弥生時代後期の集落など、従来、製塩遺跡として注目されてきた浦入遺跡について新たな知見を得ることができた。以下、今回の調査成果について、若干の整理と問題点について述べることにする。

①今回の調査では、これまでに確認されていた縄文時代中・後期の遺物だけでなく、縄文時代早期末～前期初頭の土器片が出土し、炭素14年代測定から約6,500年前にさかのぼることが明らか



第16図 浦入遺跡B地点遺構配置図

かになった。今後、花粉分析などの成果も取り入れつつ、浦入遺跡周辺の古環境の復原、及びその変遷についても考えていく必要がある。

②弥生時代後期では、流路状遺構から大量の弥生土器が出土し、浦入湾周辺に大規模な集落が存在したことを示す資料として注目される。出土した弥生土器は、後期後半段階に位置づけられるが、これまでのところ浦入遺跡群では後期前半以前や古墳時代の遺構・遺物はほとんど確認されていない。したがって、弥生時代後期後半段階に至って大規模な集落が出現したことになるが、

その要因については今後の検討課題である。

③今回の調査では、古墳時代の遺構は確認されず、遺物もごくわずかししか出土しなかった。しかし、飛鳥時代になると、竪穴式住居跡や鍛冶炉跡などが検出され、再び集落が形成される。今回の調査では、飛鳥時代の製塩関連の遺物は、未確認で、製塩作業が行われていたかどうかは不明である。

④奈良時代の遺構としては、テラス状遺構や製塩炉跡が多数検出された。製塩炉跡周辺からは、現在、若狭地域の製塩土器編年で奈良時代に位置づけられている船岡式製塩土器が出土している。一方、テラス状遺構からは、製塩土器の支脚や製塩土器片が奈良時代中頃～後半に位置づけられる遺物とともに出土している。製塩土器片は、船岡式のような平底・厚手のものではなく、厚さは3～4mmを測るにすぎない。このことは、少なくとも奈良時代後半に椀形製塩土器と支脚を用いた製塩作業が行われていた可能性を示唆すると考えられ、来年度に調査を予定している〇地点の調査成果と合わせて再度検討することにしたい。

(筒井崇史)



浦入遺跡群遠景(南から)

(2) 浦入西古墳群

1. 調査の概要

(1) 浦入西古墳群D地点

建設予定地南端の浦入湾を望む標高40～59m付近に、直径6～15mほどの円墳5基が連なって築造されているといわれてきた。最高所に位置する1号墳の場所には、旧軍隊による煉瓦建物が位置し、古墳の大半は破壊されている。調査を行った結果、丘陵稜線上に位置する4基の古墳は、煉瓦建物を構築する際に排出された盛り土であり、古墳とは認められなかった。1号墳については、北へのびる尾根線状には古墳状隆起をなすものが4か所ほど認められることから、古墳である可能性が高い。また、D地点先端部分には階段状地形が認められたため、重機による試掘調査を行ったが、みかん園などの畑地造成に伴うものであることが明らかとなった。

(2) 浦入西古墳群E・G・H地点

3地点ともB・N地点の上方の丘陵張り出し部分に位置し、古墳状隆起をなしていたものである。試掘調査の結果、いずれも自然地形であり、古墳とは認められなかった。G地点については、下方に旧軍隊の煉瓦建物が存在し、これを構築する際に削平・土盛りを受けたようで、花崗岩の石柱や有刺鉄線が出土している。

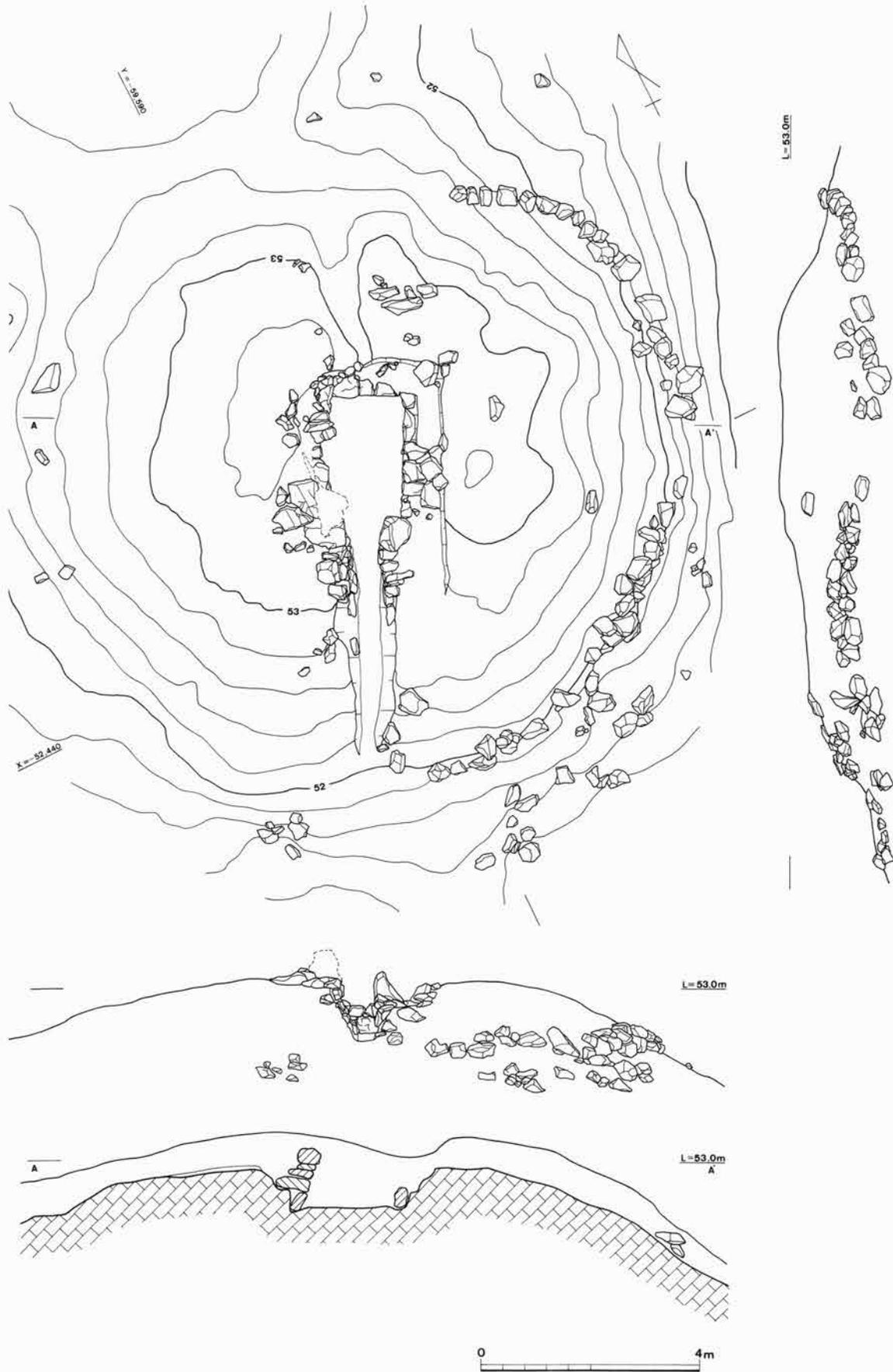
(3) 浦入西2号墳(F地点)

2号墳は、1号墳と同一丘陵の北方約290mの尾根稜線が西側に小さく張り出した部分に位置する。墳丘は、西・北側の一部を過去に畑地として利用しているため、墳丘裾部分が削平を受け、墳頂部は、中央部が大きく窪み、石材が立位で不規則に並べられていた。また、北側には古墳状隆起をなす地形が認められ、周囲には中世墓を思わせるような集石状遺構が6か所ほど確認された。この下方部分では、ゆるやかな傾斜でG地点へと続く平坦地が認められ、遺跡の存在が予想された。

試掘の結果、北側の古墳状隆起は古墳とは認められず、自然地形であることが明らかとなり、集石についても開墾に伴うものであることが判明した。下方の平坦部からも、遺構・遺物は検出されなかった。

2号墳は、造成予定地境界付近に位置し、調査後に現状保存される可能性も残されているため、墳丘・石室は最小限度の調査にとどめた。そのため、石室全体の掘形は検出していない。

①墳丘(第17図) 古墳の立地する尾根は、北・南側は緩斜面であるが、尾根側面となる東・西側は急斜面となっている。墳丘自体は、削平・破壊を受けるものの、比較的よく整った直径約11mの円墳である。北側には丘陵と区画する幅約2m・深さ約0.5mほどの素掘りの溝が設けられ



第17図 浦入西2号墳墳丘測量図

ている。この溝の中央部から羨道部前面までの墳丘東側裾部分には、表土を除去した結果、外護列石が設けられていることが判明した。

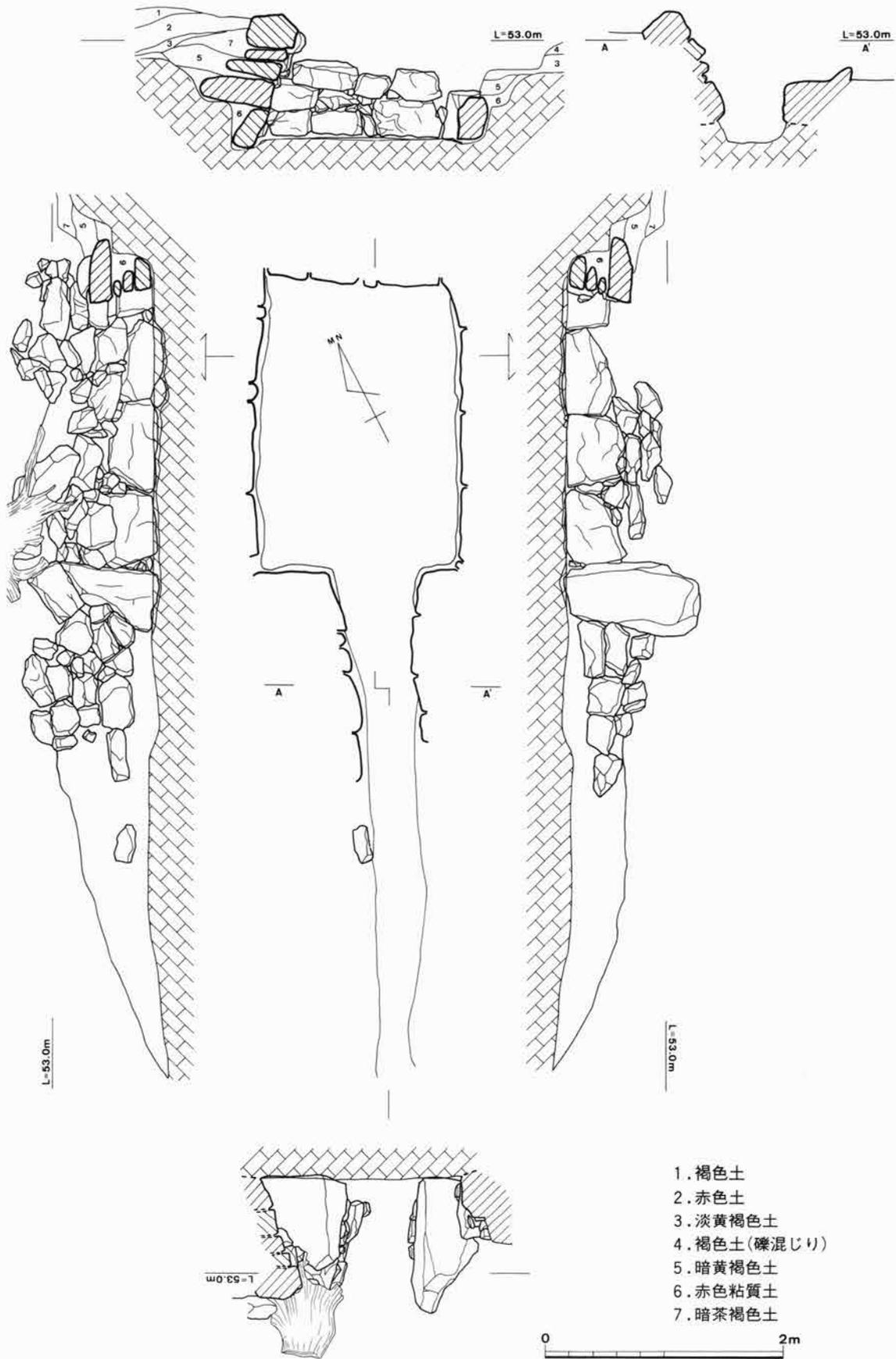
石室の構築にあたっては、旧地表面より玄室部分を長方形に掘り込み、この掘形南側の中央部分からは幅1mの墓道状の掘り込みがあり、羨道部分の掘形としている。玄室基底石を据えつけ裏込めをし、掘形掘削面まで石材を積み上げた後、盛り土によって墳丘を築くが、墳頂部が削平を受けているため、盛り土は褐色土を中心に約40cmが残存しているにすぎない。墳丘の盛り土は、石室の構築とともに併行して行われたと考えられる。墳丘東側半分は地山削り出しにより、西側は大半が盛り土により墳丘を構築したと思われる。残存する墳丘高は、列石最下段から約2mである。

列石は、標高52m付近を北側の区画溝中央付近より墓道状の掘形前面にかけての東側を半周し、地山を一部削り出した面に高さ約50cm、1～3石積み上げている。西側部分にもその残骸と考えられる石材が埋め込まれた状態で一部残存することや、開壜を行った際の盛り土内に比較的大きな石材が混入することから、本来列石は全周にあったと考えられる。東側の列石については、墓域の区画、西側については、盛り土流出防止及び墓域の区画に用いられたと考えられる。列石に使用されていた石材は、玄室内の二段目以上に積み上げられている石材とほぼ同様のハンレイ岩の転石を用いている。下方に展開する浦入遺跡側から見ると、かなり大きく見える。

破壊に伴う墳丘盛り土中及び石室内埋め土中から須恵器杯身・提瓶片が出土しているが、墳丘上のものか石室内のものは判断できない。

②埋葬施設(第18図) 本古墳の埋葬施設は、南西に開口する両袖式の竪穴系横口式石室である。使用されている石材は、付近一帯で採取できるハンレイ岩の転石を用いるが、一部割石も使用されている。石室は、先述したように、墳丘の東・南斜面に天井石・側壁に使用されていたと思われる石材が多数散乱していた。墳頂部では、東側側壁が起こされて立位で一直線上に並んでいた。石室の破壊の度合いは東側ほどひどく、奥壁から北側の区画溝にかけては幅の溝状の窪みが認められることから、北側から破壊が開始されたと考えられる。内部は、破壊に伴う土砂で完全に埋まっており、これとともに転落した天井石2石が認められた。天井石の規模からすると、玄室上には4石、羨道部には2石が最低架構されていたと推定される。また、西袖石付近には巨木が存在し、根株により西側壁がかなり内傾していた。本概要に載せた西側壁は内傾したままのものを掲載し、石室断面図では根株の影響を受けていない部分で実測を行ったため、奥壁寄りの断面図となっている。

石室の主軸の方位はN-28°-Eである。石室は、長方形の玄室と羨道部、墓道部からなる。石室の全長は、奥壁から墓道部まで約4.25m、玄室長約2.45m・玄室奥壁幅約1.55m、袖部での幅約1.65m、羨道長約1.8m、羨道幅は玄門部で約0.8m、最前端で約0.55mを測る。現存する側壁の高さは、床面から最も高い部分で約1.2mを測る。ここから墳丘前面までは墓道が約2.5m続く。玄室平面形は、長方形で床面積約4.2㎡、玄室比(玄室長/玄室幅)は1.5:1である。羨道は、玄門部が逆「ハ」字形に開く。



第18図 浦入西2号墳石室実測図

石室を構築するにあたっては、旧表土面の黒褐色土から玄室部分のみ約0.8mほど垂直に掘り窪め、基底石を安定させるため玄室床面を浅く一段掘り込む。基底石として用いられている石材は、偏平な石材である。2石目は、基底石掘形内の裏込めをした後、基底石設置の掘形よりも外側に大きく掘り広げており、断面では階段状の掘形が玄室部分全周を囲むような形になっている。これは、基底石の安定をはかるためひかえの長い石材を用いており、このひかえ部分の固定の段となっている。これより上方は、このような積み方を交互に繰り返し石室を構築している。この2石目の掘形検出面が旧表土面となる。3石目以降は、石室の構築とともに墳丘の盛り土を行っているが、裏込めは若干の小石を混ぜるが、薄く突き固めたような縞状の堆積は認められなかった。石室の基底石の配置は、まず基準としたのが両袖石であり、袖石設置後両側壁を設け、最後に奥壁を築いたようである。このことは、袖石の角や奥壁側の側壁角が見えないことや、東側壁北端の基底石が玄室基底石の寸法が足りない分だけ奥壁側に内傾させていることからもうかがうことができる。

玄室奥壁は3石、側壁は、東・西側壁とも4石で基底を構成するが、いずれも横長の石材を据える。東側壁では石が基底石の高さ、長さをあわすため縦置きされる。二段目は基底石よりも小さい目のひかえの長い石材を横積みし、隙間には小石を詰める。三段目以上は1・2段目の積み方を交互に繰り返していったようである。玄室床面は、0.5～4cmほどの玉礫を敷き詰めた床面となっており、最終追葬に際してはこの上に約15cmの盛り土をし、東側壁に沿って棺台が2石配されていた。

玄室の完成後、横口である羨道部を構築したようである。羨道部には、玄室床面から南西に向かってゆるい傾斜を持つ溝状の施設が設けられている。玄室完成後に掘削されたことを裏付けるように、袖石の面にあうように羨道側壁設置部分だけ外側に掘り込まれている。羨道部基底石は、東・西側壁とも4石で構成されるが、前端に向かうにしたがって基底石がゆるく上がっている。また、袖石部分の基底石は、溝状の施設の底面よりも約0.1m上方にある。構築方法は、玄室内と変わらないが、やや雑な感じを受ける。

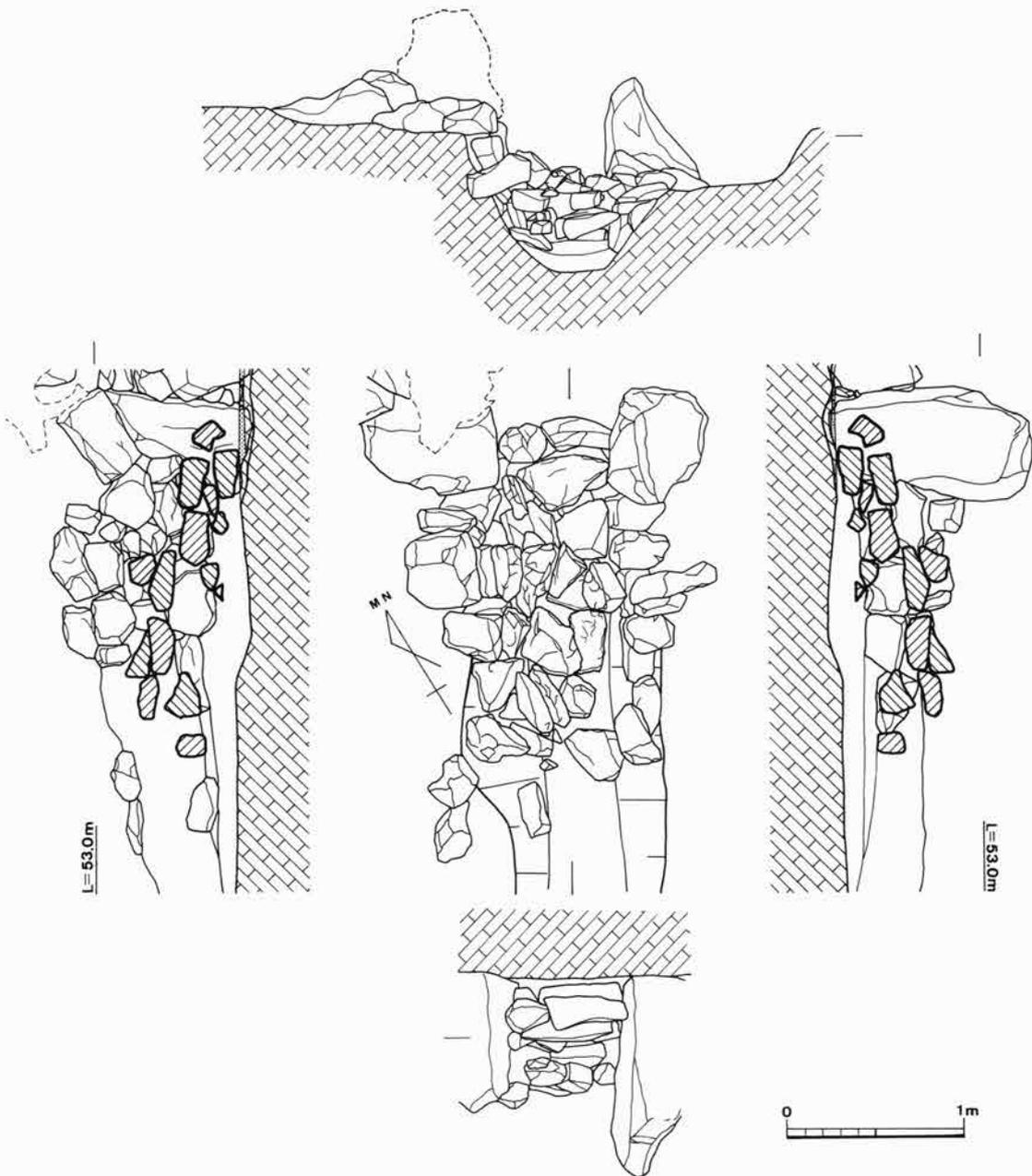
羨道部完成後、玄室内に玉礫(0.5～2cm)を敷き詰める。この玉礫は緑色(ハンレイ岩)・白色(石英岩)・青色(粘板岩)のホルンフェルスが使用されており、調査地下方の浦入湾や南側の大丹生川河口付近に多く存在するものが使用されているようである。その後、玄門部に偏平な石材2石を配して階段状の施設を設ける。階段状部分の高さは約0.15mである。階段状施設よりも先に玄室内に玉礫が敷かれていたことは、溝状施設の底面より玄室内の玉礫と同じものが出土していることからわかる。

追葬時には、さらにこの階段状施設の上に同じような偏平な石材2石を配して階段部分を高くしている。初期のものとあわすと約0.33mとなる。同様に溝状の施設もこの石材まで埋めているが、追葬時にも若干の玉礫が持ち込まれたようで、築造時よりも小さい玉礫が出土した。追葬時の石段の高さは、ほぼ玄室基底石の高さとなっている。

最終追葬時には、玄室内の玉礫上に奥壁側で約3m、玄門部側で約15cmの盛り土を行い、棺台

を設置する。また、階段部分玄室側には細長い石材(垂円礫)を2石配している。この階段状施設に使用されている石材は、石室と同様ハンレイ岩の転石である。

閉塞石は、初葬時のものは階段状施設まで溝状遺構を埋め戻し、羨道部側壁の前端を閉塞したようで、その残骸と考えられる石材が埋め戻した部分から2石検出された。追葬時の閉塞は、羨道部中央付近から側壁前端にかけて行ったようで、初期の閉塞の上に積まれた状態が観察された。石材は、基底部分に2石を置き一段ずつ小口積みされ、石室の壁面とそろえられていたと考えられるが、追葬時に破壊されているため、2段しか残存しない。最終追葬時は、閉塞は階段状施設のすぐ南側から羨道部側壁の前端まで石材が残存していたが、規則性がなく乱雑に置かれたような状態であった。閉塞石は、石室同様ハンレイ岩が用いられている。羨道部床面は、いずれの埋



第19図 閉塞石平・断面実測図

葬時期とも玄室に向かってゆるい傾斜を持っている。

墓道状の施設は、玄室完成後に羨道部構築のために掘削した溝状のものであるが、羨道部側壁は約1.8mしか設けられておらず、そこから前端までは素掘りのままである。溝幅は、羨道部前端で約0.5mあり、直線的に南西側にのびる。先端は、墳丘裾よりも約0.4m上方で終わる。底面は、玄室側が低く先端に向かってゆるい登り傾斜を持つ。

③遺物出土状況(第20図) 石室は破壊を受けていたが、埋葬面自体にまでは及んでおらず、また盗掘などの痕跡も確認されなかった。したがって、埋葬当時そのままの状態が良好に遺存していたが、木棺などの痕跡は検出できなかった。

遺物は、すべて玄室内から出土したもので、棺台と考えられる石材、須恵器・鉄器が出土した。これらの遺物の大半は、追葬面で出土した。埋葬回数としては3回確認できたが、埋葬面が存在するのは2面である。各面ごとに遺物の出土状況を見る。

最終追葬面(第20図) 追葬面に盛り土を施し、東側壁に平行して偏平な石材2石を配した棺台を設ける。棺台の長さは約1.85mである。遺物は、北側棺台石材周辺より鉄鏃・刀子が出土し、玄室中央付近で刀子が出土した。玄門部階段状石材の前面に置かれた石材付近で、須恵器杯身3点・杯蓋2点(第21図9～13)が正位でならべて置かれていた。

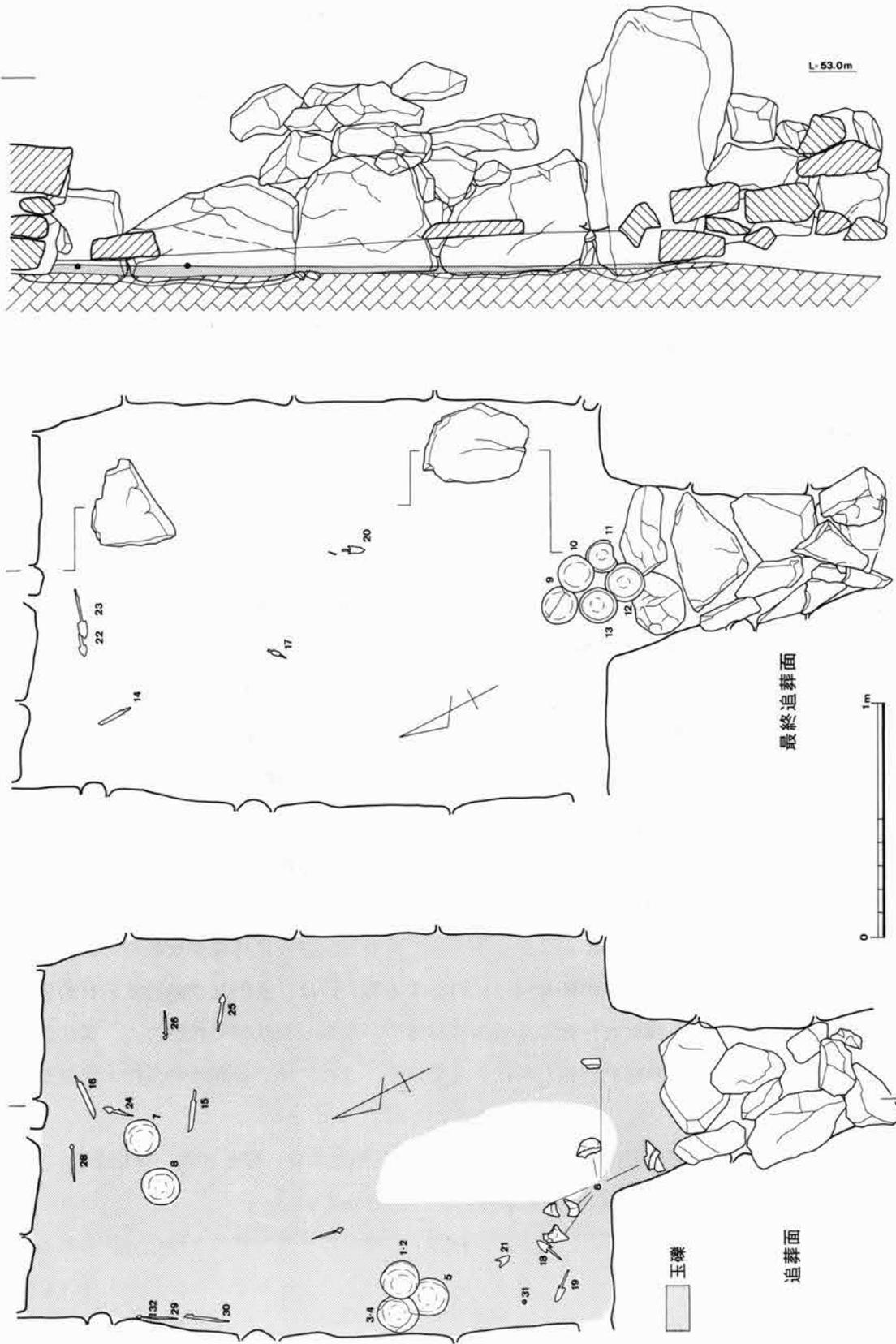
追葬面(第20図) 初葬面と追葬面が共存する。いずれも玉磔敷きであるが、追葬時に新たに敷きなおされたと考えられる磔は、初葬時よりもやや細かい。追葬面の玉磔は、玄室ほぼ中央部に敷かれているが、玄室長軸方向に平行せず南北方向に敷かれている。玉磔の範囲は約2m×約0.6mである。遺物は、玉磔の北端付近に須恵器杯身・杯蓋を伏せた転用枕(第21図7・8)があり、周辺から刀子(15)が出土した。棺外と考えられるものは、玉磔に平行して東側より刀子(16)・鉄鏃(24～28)が出土した。

初葬時の遺物で追葬時にかたづけられたと考えられるものは、西側壁・西袖石付近から出土した。西側壁では、やや奥壁寄り側壁に平行して並ぶ鉄鏃(29・30)・弓束金具(32)が出土した。また、西側壁中央付近では杯身・杯蓋が2セット正位で置かれ、さらに杯身が反転した状態でかたまって出土した(1～4・6)。この杯身(6)に対応する蓋(5)は、玄門及び階段状石材の周辺で散乱して出土している。西側袖石付近では規則性が無く、散乱した状態で鉄鏃3点・環状鉄器1点が出土した。いずれも西側壁側にかたづけられており、これに伴い初葬時の玉磔も西側壁側に動かされている。

④出土遺物 浦入西2号墳から出土した遺物は、須恵器(杯身8点・杯蓋6点・提瓶1点)、鉄製品(刀子4点・鉄鏃14点・弓束金具1点・環状鉄器1点)がある。

須恵器(第21図、図版第23) 蓋杯の形態から、初葬・追葬・最終追葬時の3種に分けられる。

初葬時は、西側壁・玄門付近で出土したものである。1・3・5は蓋で、口縁部と天井部を分ける稜は形骸化した沈線で表わす。口縁部内面には明瞭な段を有する。天井部はていねいにヘラ削りし、平らに仕上げる。2・4・6は、杯身である。直立気味にのびる立ち上がりを持つ。端部には明瞭な段を有する。1と2、3と4、5と6がセットになる。



第20図 女室内遺物出土状況図

追葬時の遺物は、転用枕として使用されていたもので、セット関係にある。7は杯蓋で、口径14.4cm・器高4.5cmを測り、器高がやや高く丸みを持つ。天井部外面はヘラ削りし、端部内面に段を有する。8は、底部が浅く平坦に近く、立ち上がりはかなり内傾し、口縁端部は丸い。底部外面をヘラ削りする。

最終追葬時の遺物は、玄門部で出土した。杯身3点、杯蓋2点が出土した焼成痕から9と11、10と12はセット関係にあると思われる。杯蓋は、口径14.8cmを測り、器高がやや高く丸みをもつ。口縁部は外下方を向く。ヘラ切り離し後未調整であるが、10のように一部ヘラ削りを施すものもある。杯身は、口径12.4~12.9cm・器高3.3~4.4cmを測り、底部が浅く、ほぼ平坦である。立ち上がりはかなり内傾し短く、口縁端部は丸い。11のように底部外面をヘラ削りするものもある。

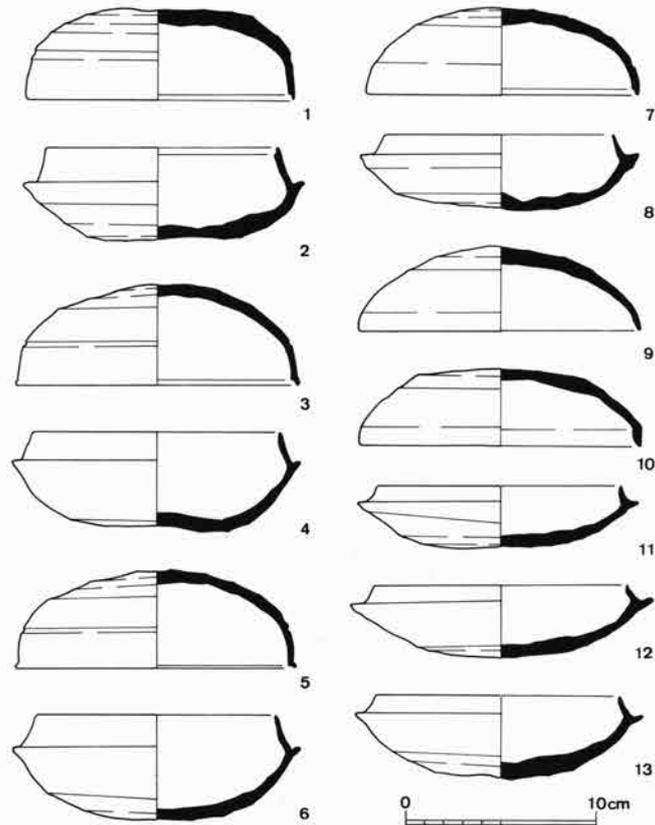
破壊に伴う墳丘盛り土中、石室内埋土中より杯蓋、提瓶が出土している。杯蓋は最終追葬時の杯蓋と同様のものであるが、13の杯身とは焼成痕からもセットとはならない。提瓶は図化できなかった。

時期的には、初葬時のものがTK10、追葬時がTK43、最終追葬時のものはTK209併行期と考えられる。

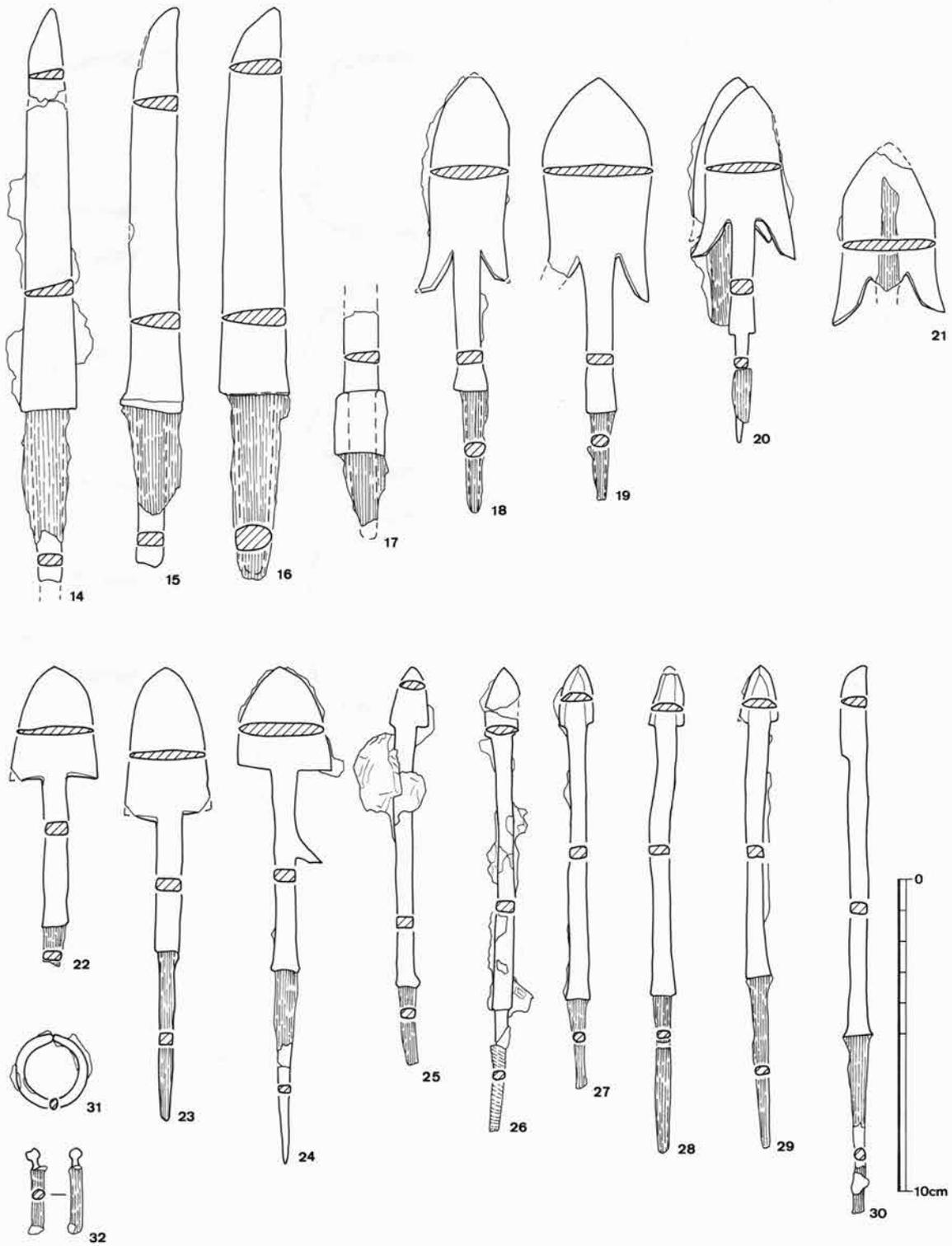
鉄製品(第22図、図版第24) 刀子(14~17)は、総数4点出土した。17は、最終追葬面棺台付近で出土したもので、最も小型品である。これ以外は、全長18cm前後の刀子である。15は、研ぎ減りが観察される。

鉄鏃 13本が出土し、平根鏃(18~20・22~24)、長頸鏃(25~30)、無頸鏃(21)の3者に分類される。平根鏃には、三角形式で腸袂をもつもの(18~20)と持たないもの(22~24)があり、いずれも関籠被であるが、18は台形関となつている。24は、籠被部中央に逆刺を有する。長頸鏃は、柳葉式(25~29)と片刃箭式(30)がある。30は、鏃身部に関を有し、籠被はやや幅広く終わり、茎部に続く。

環状鉄器(31) 直径2.7cm・厚さ0.6cmで、ほぼ正円をなす。刀装具とも考えられるが、厚さが



第21図 出土遺物実測図(1)



第22図 出土遺物実測図(2)

薄いことや、刀が出土していないことから用途は不明である。

弓束金具(32) 両端が有頭の棒に革を円形の鏝で止める。全長2.6cmを測り、1点のみの出土である。

2. まとめ

浦入西古墳群では、8か所の古墳状隆起と完全に破壊された浦入西1号墳、舞鶴市内では初の竪穴系横口式石室となった浦入西2号墳の調査を行った。古墳状隆起に関しては、いずれも古墳とは認められず、自然地形や旧軍隊により改変された地形であることが明らかとなった。

古墳は、舞鶴湾入り口部分に立地し、西側は遠くに丹後半島を望み、南側は舞鶴市内を望むことができる非常に眺望がきく場所にある。1・2号墳が立地する丘陵稜線上には、石材が露出する古墳と考えられるものが4基ほど存在しているが、規模的には2号墳と大差ないと考えられる。2号墳の南西方50mにはやや大型の石材が散乱するところがあり、石室墳があった可能性もある。また、眼下で調査を行っている浦入遺跡では、6世紀前半という古墳築造時期の集落は形成されておらず、最終追葬が行われた6世紀後半段階になってから集落が形成され始めることが明らかとなっており、2号墳の築造と浦入遺跡の集落は関係がないようである。

埋葬施設については、竪穴系横口式石室を検出した。石材、石材の積み方は、基本的には横穴式石室であるが、形態は竪穴系であり、本来の竪穴系横口式石室と呼ばれるものとは異なる。この種の石室については、京都府では、現在までのところ由良川流域以北で確認されており、丹後半島に多く分布する。丹後地域では、弥栄町新ヶ尾東古墳群(1基)、峰山町と弥栄町境に位置するスクモ塚古墳群(1基)、弥栄町遠所古墳群(4基)、網野町離湖古墳(1基)、加悦町入谷西古墳群(1基)、宮津市倉梯山古墳群(1基)、由良川流域では夜久野町流尾古墳(1基)、福知山市池の奥古墳群(1基)が知られている。

若狭地域では、石室墳の調査例自体が少ないことや石室の実態に不明な点が多く、現在までのところ、6世紀前半の獅子塚古墳が知られているが、本来の竪穴系と呼ばれる石室形態をなしており、浦入西2号墳とは形態的に異なる。中間地域である舞鶴市で調査されたことにより、周辺地域との関連を考えていかなければならない。

出土遺物については、盗掘を受けた形跡が認められないため、埋葬時の状態そのものを調査したと考えられるが、副葬されていた遺物は、土器、鉄器ともそれほど多くなく、また刀、馬具などの権力を象徴するものも出土していない。唯一、土器類については須恵器のみを副葬し、土師器がまったく出土しないという特徴がある。

浦入遺跡では奈良時代～平安時代にかけて大規模な製塩が行われており、これらの遺跡造営に伴い破壊されたと考えられる古墳も検出されており、今後増える可能性も残されている。この地区の古墳の全体像は浦入遺跡の発掘、整理の結果を待って考えていきたい。

(増田孝彦)

注1 田代 弘「舞鶴発電所関係遺跡(嶋遺跡)平成7年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第73冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注2 平成8年度中の浦入遺跡群にかかわる発掘調査については、以下の略報がある。

奈良康正「浦入西古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第61号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究セン

- ター) 1996
筒井崇史「浦入遺跡N地区」『京都府埋蔵文化財情報』第63号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
増田孝彦「浦入西2号墳」『京都府埋蔵文化財情報』第63号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注3 ただし、調査の終了した浦入遺跡B-N地点と浦入西古墳群D・E・F・G・H地点の合計調査面積は、約11,500㎡である。
- 注4 調査に参加された方は以下の通りである。
奥田栄吉・藤田龍太郎・渋谷 悟・妹尾活明・谷後恒美・上羽真弓・柏木大延・田中昌樹・楢本順子・福田和浩・見持浩一・小西偉之・青木志帆・植村 悟・岡根 稔・尾根史郎・加藤秀典・加納幸正・鹿野 豊・佐々木英二・谷口隆司・萩谷良太・長谷川健一・平井和彦・藤井 直・三好清超・村下尚司・吉谷智美・谷口成美・中村ひろみ・真下春美・松本綾子・山下令乃
- 注5 丘陵斜面の上位側を掘削し、下位側に盛り土を行って、テラス面を造り出すもののうち、丘陵斜面の傾斜方向に側壁を有するもの。
- 注6 竪穴式住居跡同様、テラス面を造り出すもののうち、丘陵斜面の傾斜方向に明瞭な側壁をもたないもの。
- 注7 N地点で出土した縄文土器については、奈良大学泉拓良教授・同大学院生岡田憲一氏よりさまざまなご教示を得た。記して謝したい。
- 注8 縄文時代遺物包含層の自然科学的な分析は、古環境株式会社に委託した。
- 注9 N地点検出の竪穴式住居跡SH01のカマドについては、別稿で簡単な報告を行っている。
筒井崇史・楢本順子「竪穴式住居内に煙道を有するカマドについて—浦入遺跡の調査事例から—」(『京都府埋蔵文化財情報』第65号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注10 飛鳥時代から奈良時代にかけての須恵器(特に杯)の器種名については、奈良国立文化財研究所が使用されているものを用いる。
- 注11 田辺昭三『陶器古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966
- 注12 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告書」II(『奈良国立文化財研究所学報』第31冊 奈良国立文化財研究所) 1978

2. 竹中遺跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、近畿自動車道敦賀線(舞鶴東～大飯)の建設に伴い、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。調査地は、舞鶴市字堂奥小字稲谷口・鍋森に所在する。前年度の舞鶴市教育委員会による試掘調査の結果を受けて、小さな谷をはさんで2か所のトレンチを設定した。高架道路の第3橋脚部と第4橋脚部にあたる部分である。調査は、平成9年8月20日に開始し、同年9月25日に終了した。調査面積は、計約360㎡である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員石井清司、同主査調査員竹下士郎が担当し、本調査概要は竹下が執筆した。

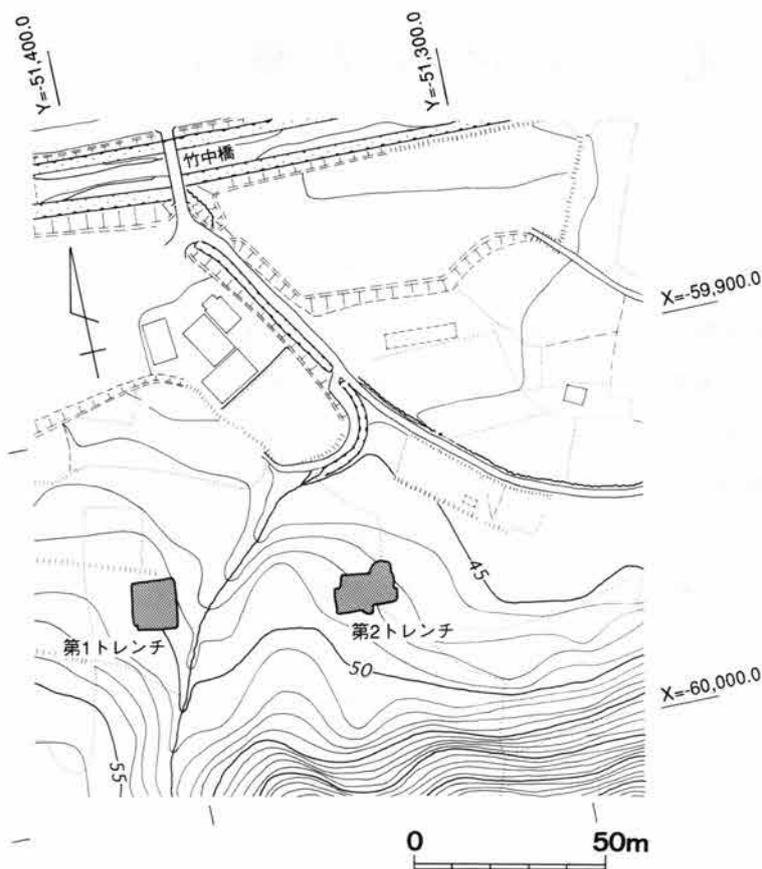
現地調査の実施、及び調査概要の作成にあたっては、地元有志の方々を始め、学生諸氏、また舞鶴市教育委員会を始めとする関係諸機関に、多大な援助、協力^(注1)をいただいた。感謝したい。

なお、本調査に関わる経費は、日本道路公団が全額負担した。



第23図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/50,000)

- | | | | | |
|--------------|-----------|------------|-----------|-----------|
| 1. 竹中遺跡(調査地) | 2. 村中遺跡 | 3. 堂奥遺跡 | 4. 矢野山城跡 | 5. 溝尻支城跡 |
| 6. 市場支場跡 | 7. 市場詰城跡 | 8. 市場城跡 | 9. 溝尻古墳群 | 10. 行永遺跡 |
| 11. 愛宕山古墳群 | 12. 白鳥古墳群 | 13. 妙見山古墳群 | 14. 大迫谷城跡 | 15. 但馬谷城跡 |
| 16. 小倉城跡 | 17. 荒倉遺跡 | 18. 多門院城跡 | 19. 小倉古墳群 | 20. 金剛院遺跡 |
| 21. 一ノ谷古墳 | 22. 堂奥古墳 | | | |



第24図 調査地周辺地形図(1/2,000)

中遺跡は、河口から約5kmの祖母谷川左岸の狭小な谷間の段丘上から山裾にかけて位置し、周辺の田畑に遺物の散布が見られるところとして、これまでも知られていた。祖母谷川流域には、古墳時代後期の溝尻古墳群や一ノ谷古墳、堂奥古墳のほか、市場城跡、矢野山城跡、小倉城跡などの中世山城跡が点在し、また竹中遺跡から山を隔てた北東には、平安時代に建立された金剛院が所在する。さらに、祖母谷川上流の多聞院地区には、縄文時代の石斧が出土した荒倉遺跡なども所在しており、古くから人々の営みがあったことが推定されるが、これまでにこの付近での発掘調査例などは少なく、具体的な資料は^(注2)乏しい。

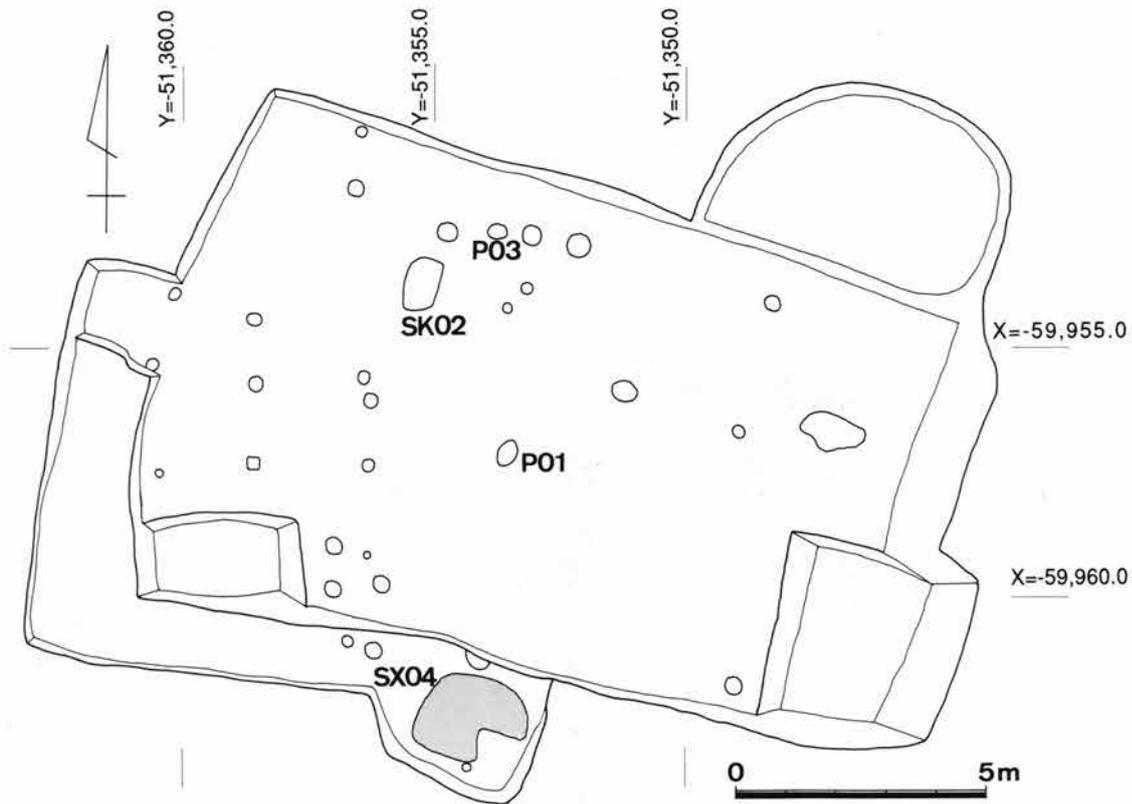
3. 調査概要

西側の第3橋脚部に関わる調査地を第1トレンチ、東側の第4橋脚に関わる調査地を第2トレンチとして調査を開始した。第1トレンチの調査前の標高は50.5～49.3mで、南西から北東に向けてわずかに下るが、ほぼ平坦面をなしていた。第2トレンチの標高は48.7～46.4mを測り、トレンチの南西端と北東端とでは約2.3mの比高差があった。調査前当地は竹藪となっていたが、竹の伐採後、調査地の中央部には西側と東側を区切るように高さ50cmほどの段差が確認されたところから、かつては畑として利用されていたと推定される。また、第2トレンチでは当初設定したトレンチの南壁中央部で集積遺構(SX04)を検出したことから、この遺構を中心とする部分と、トレンチの南西角を東側と北側に向けて長さ約5m・幅約2m拡張して調査を継続した。

2. 位置と環境

舞鶴市は、日本海に面する京都府北部の中心的都市である。市域は、舞鶴西湾に面する西舞鶴地域と、舞鶴東湾に面する東舞鶴地域、由良川流域の加佐地域とに分けられる。このうち舞鶴東湾には、京都府と福井県の県境の三国山から志楽川、祖母谷川、与保呂川の三河川が流入しており、これらの河川の流域の丘陵や、段丘上には数多くの遺跡が分布している。また、現在の東舞鶴市街地は、これらの河川によって形成された湾岸の平野部に立地している。

今回の調査対象となった竹



第25図 第2トレンチ平板測量図(1/150)

調査は、表土を重機により除去した後、人力により掘削・精査を繰り返し遺構の検出・記録につとめた。

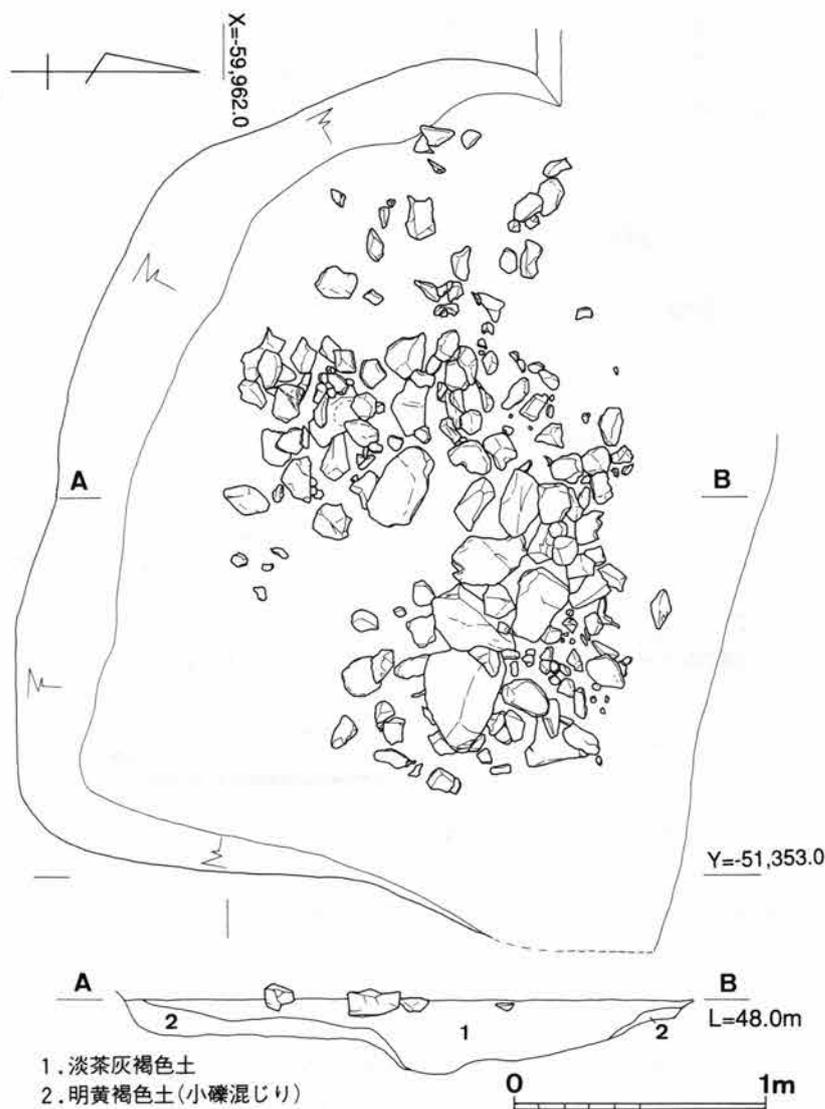
(1) 第1トレンチ

黒褐色の表土を除去すると、トレンチ内の大半が黄褐色の土層となった。この土層以下は無遺物であったが、トレンチの東側中央部では表土直下で灰褐色の土層を検出した。この土層は、鎌倉時代のもものと推定される土師器皿の小片をわずかに包含していた。遺構は、検出されなかった。

(2) 第2トレンチ

第1トレンチと同様に、表土直下に黄褐色の土層が広がるが、拡張したトレンチの西端部では、土師器皿・瓦器のほか、青磁の小片を包含する暗茶褐色の土層をわずかに検出した。また、このトレンチでは、黄褐色の土層に掘り込まれたピットや土坑を検出し、このうちのいくつか(P01・SK02・P03)からは、瓦器片・土師器皿片が出土した。しかし、これらは柵列や建物跡として復原することは現時点では不可能であり、その性格は不明である。ピットは、直径20~25cmの円形ないし楕円形を呈し、検出面からの深さは10~20cmを測る。SK02は、長辺約1m・短辺約0.5mの隅丸方形を呈し、深さ約0.1mを測る。

さらに、トレンチの南側中央部では、表土直下に拳大から人頭大の石が集積される遺構(SX04)を検出した。この集石遺構の南東角部は検出されなかったが、本来は一辺が約1.5mの正方形を呈するものであったと推定される。石の間からは瓦器・須恵器・陶器の小片のほか、銅製鍋の



第26図 SX04平面図及び断面図(1/30)

口縁部の一部と考えられる破片が出土した。石を取り除くと、わずかながら掘り込みが確認されるが、遺物は出土しなかった。SX04は、形状などから中世墳墓の可能性も推定されるが、その性格については現時点では不明である。

今回出土した遺物はいずれも細片ばかりであり、復原・図化しうるものは1点もなかったが、前年度の試掘調査の際に出土した土師器皿の特徴などから、第1トレンチと同様に鎌倉時代ものと推定される。

4. まとめ

調査地の南の山裾側は現在でも植林がなされており、また北の祖母谷川側には畑地が広がっている。これらによって、今回の調査地は、これまでに大部分が削平されてしまったようである。しかし、今回わずかながらも中世の遺物、遺構を検出したことから、この地において何らかの営みがあったことは間違いなく、調査地周辺における土地利用の一端を知りうる手がかりが得られたと考える。周辺での今後の調査成果の蓄積を待ちたい。

(竹下士郎)

注1 主な調査参加者(敬称略、順不同)

山田恵子、尾上 忍、西川真介、田中美恵子、高橋秀雄、高橋充雄、羽賀登喜雄、羽賀 博、石川恵美子、上野敏江、片山喜重、片山敏子

注2 「舞鶴市遺跡地図」(『舞鶴市文化財調査報告』第15集 舞鶴市教育委員会) 1990

3. 余部遺跡第3次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査地は、京都府亀岡市余部町和久成に所在する。余部遺跡は、大堰川西岸の河岸段丘上に東西約900m・南北約1kmにわたって広がる遺跡である。弥生時代から中世にかけての複合遺跡と考えられている。

この遺跡範囲の北側にあたるゲンゼ(株)の敷地内から、かつて建物建設中に多数の遺物が出土している。また、亀岡市教育委員会がゲンゼ付近で実施した第1次調査では、溝状遺構を検出している。今回の調査地では、京都府教育委員会の試掘調査で溝状の遺構が確認されており、その結果を受けて、発掘調査を実施することになった。

今回の調査は、京都府農業総合研究所の倉庫棟建設に伴うもので、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。調査経費は、同部に全額負担していただいた。

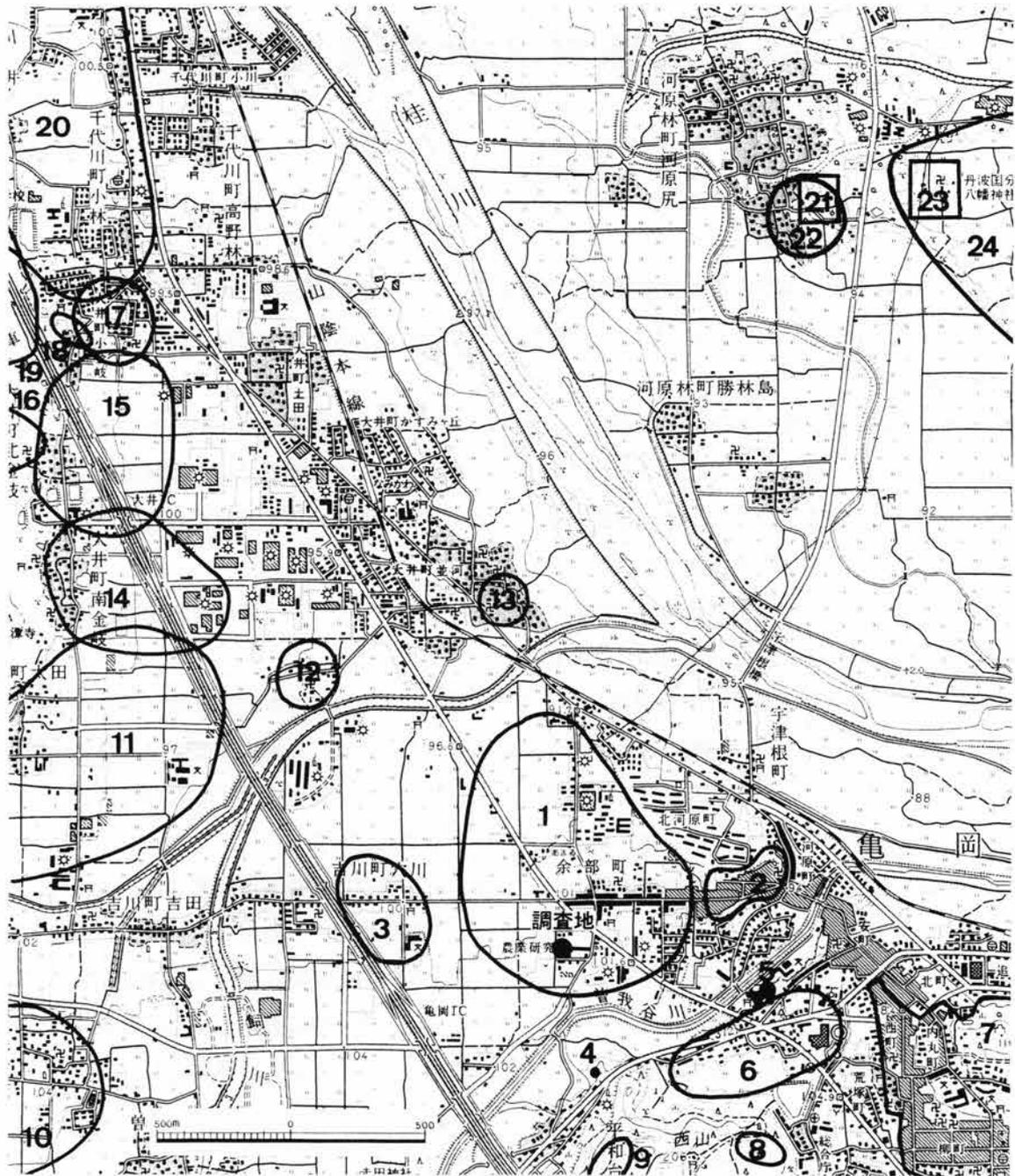
調査は、平成9年7月1日から開始した。調査面積は、約400㎡である。重機で後世の盛り土や耕作土などを除去し、その後、人手で精査・遺構掘削を行った。今回の調査では、弥生時代中期初頭の方形周溝墓の一部とみられる溝状遺構などを検出した。調査を終了したのは、8月12日である。この間、7月29日には、関係者を対象にした説明会を実施した。

現地調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎と同主任調査員引原茂治である。調査にあたっては、各関係機関から協力していただいたが、特に京都府農業総合研究所からは、格別のご協力・ご配慮をいただいた。特記して謝意を表したい。また、亀岡市教育委員会の樋口隆久氏・中澤 勝氏からは、多くのご教示を得た。調査の作業では、猛暑の時期にもかかわらず、地元有志の方々に参加していただいた^(注1)。感謝したい。

2. 位置と環境

上記の通り、余部遺跡は、大堰川西岸の河岸段丘上に位置する遺跡である。この河岸段丘上は標高約100m前後の安定した平地であり、多くの遺跡が分布する。犬飼川を挟んだ西側には、弥生時代前期から中期初頭にかけての環濠集落跡が確認された太田遺跡がある。太田遺跡では、中世の集落跡も確認されており、余部遺跡と同様、広範囲の複合遺跡である。このほか、弥生時代～中世の複合遺跡である北金岐遺跡・南金岐遺跡・天川遺跡などがあり、各時代を通じて生活に適した地であることがわかる。

また、大堰川西岸の河岸段丘縁辺部には、段丘の段差と大堰川の氾濫原を要害とした戦国時代の城跡が点在する。余部遺跡の東隣りには余部城跡があり、犬飼川を挟んで北側には並河城跡がある。近世城郭の亀山城跡も、同様の立地条件にある。さまざまな土地利用が可能な地でもある。

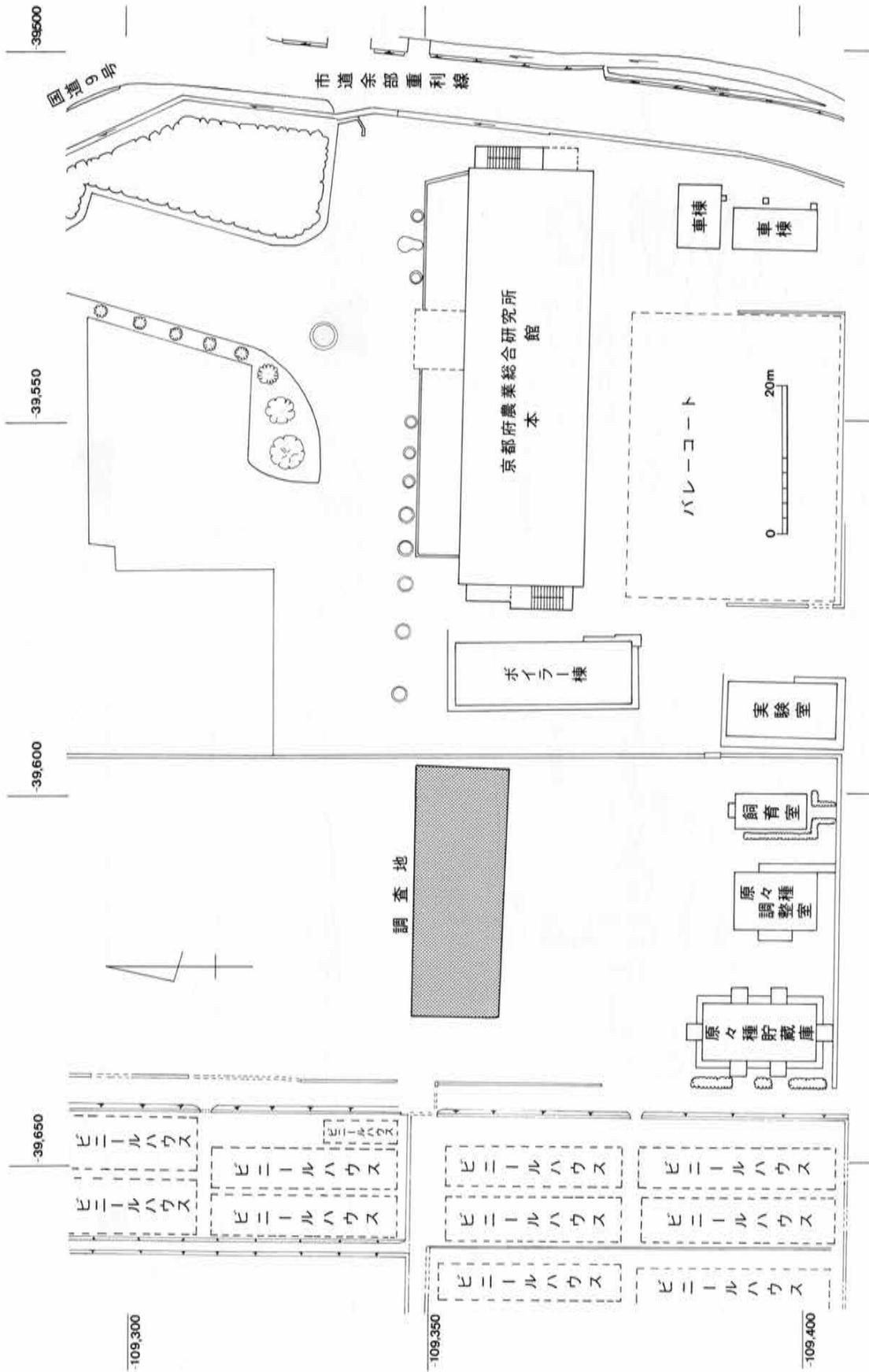


第27図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

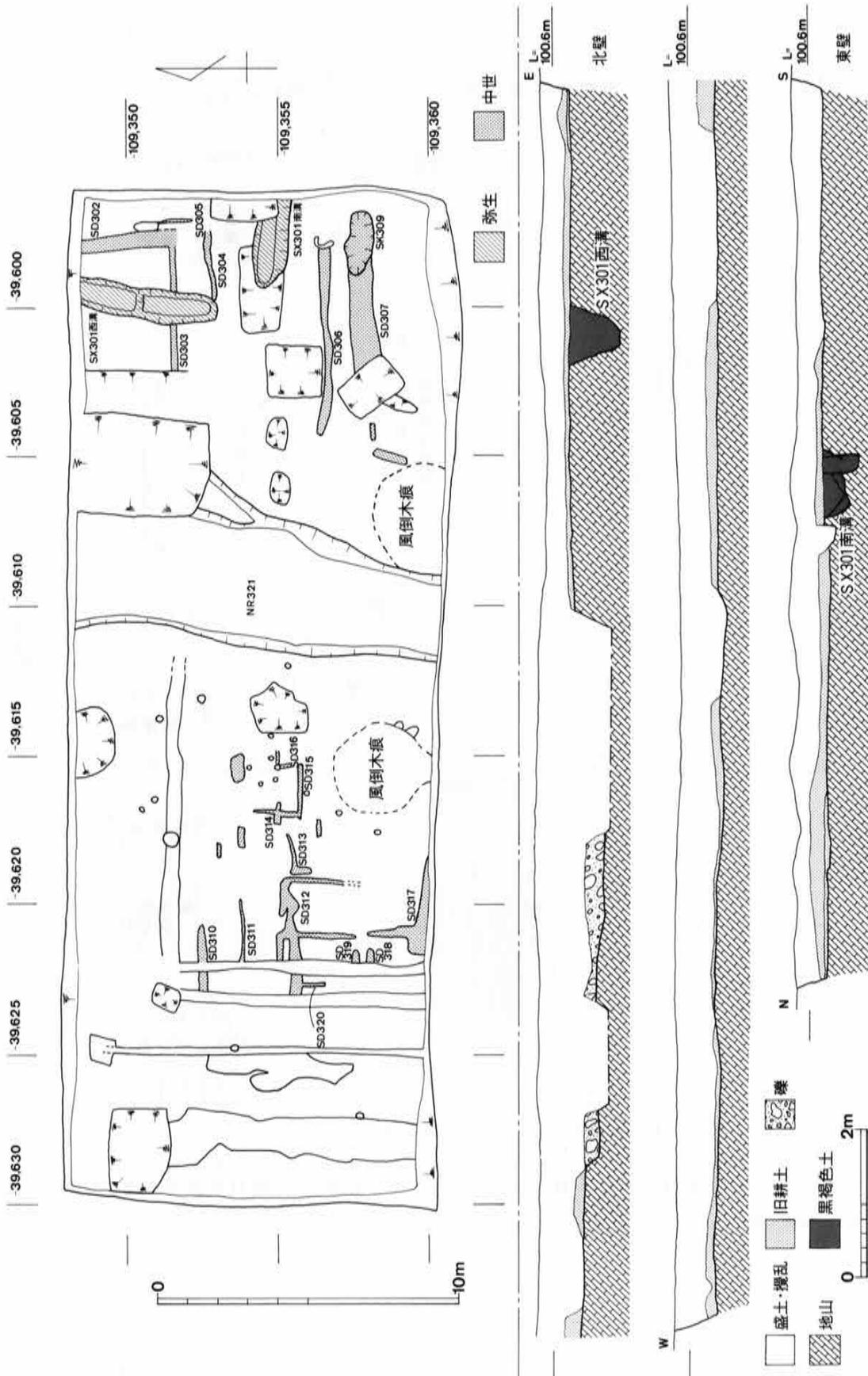
- | | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 余部遺跡 | 2. 余部城跡 | 3. 穴川遺跡 | 4. 狐塚古墳 | 5. 加塚古墳 |
| 6. 安加塚遺跡 | 7. 亀山城跡 | 8. 安行山古墳群 | 9. 風ノ口古墳群 | 10. 天川遺跡 |
| 11. 太田遺跡 | 12. 野寺廃寺 | 13. 並河城跡 | 14. 南金岐遺跡 | 15. 北金岐遺跡 |
| 16. 北金岐古墳群 | 17. 馬場ヶ崎遺跡 | 18. 馬場ヶ崎古墳群 | 19. 小金岐古墳群 | 20. 千代川遺跡 |
| 21. 御上人林廃寺 | 22. 河原尻遺跡 | 23. 丹波国分寺跡 | 24. 蔵垣内遺跡 | |

3. 検出遺構

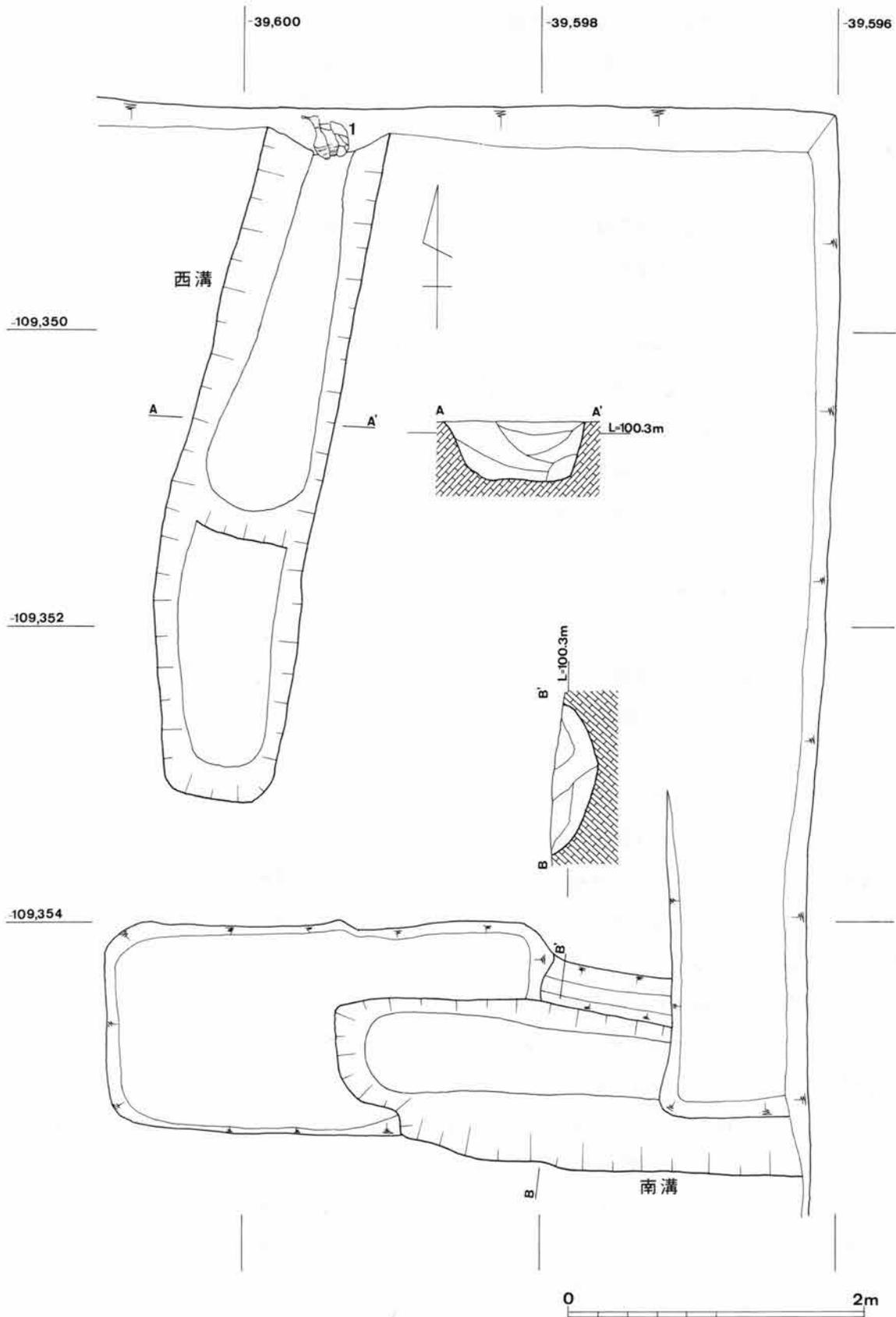
今回の調査では、弥生時代と中世の遺構を検出した。弥生時代の遺構は、調査地東半部に位置する。中世の遺構は、断片的ではあるが、調査地ほぼ全面にわたって分布する。調査地全体にわたってかなり削平を受けているためか、遺構の分布状況はかなり疎である。



第28図 調査地位置図



第29図 調査地平面図・断面図



溝埋土は黒褐色土系

第30図 方形周溝墓 S X 301 実測図

弥生時代の遺構で主要なものは、方形周溝墓S X 301である。調査地北東隅で検出した。今回は、方形周溝墓の南西隅にあたる部分を検出したのみで、その他の部分は調査地外となるため、全体の規模などは不明である。隅部は掘り残す。なお、主体部は、調査地内では検出できなかった。

S X 301の南溝は、検出長約3 m・幅約1 m・深さ約0.3 mである。西溝は、検出長約4.6 m・幅0.8~1 m・深さ0.4~0.65 mである。西溝は、南端から約1.8 mの部分で段差があり、北側に向かって深くなる。

溝内から、弥生時代畿内第Ⅱ様式併行期の壺や土器片、石鎌などが出土した。主に西溝からの出土である。土器は、溝底部からの出土はほとんどなく、墓域内から崩落して堆積したとみられる埋土中から出土している。

このほか、弥生時代の遺構としては、ピットなどを検出したが、その性格は不明である。

中世の遺構は、主に素掘り溝や土坑で、畑などの耕作に伴うものとみられる。瓦器片などが出土しており、ほぼ13世紀前後のものか。

また、出土遺物がないため時期のわからないものとして、自然流路NR 321がある。調査地中央東寄りに位置し、ほぼ南北方向である。大小の円礫や砂が堆積している。

4. 出土遺物

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。遺構の分布があまり密でないためか、量的には少ない。種類としては、土器と石器が主である。

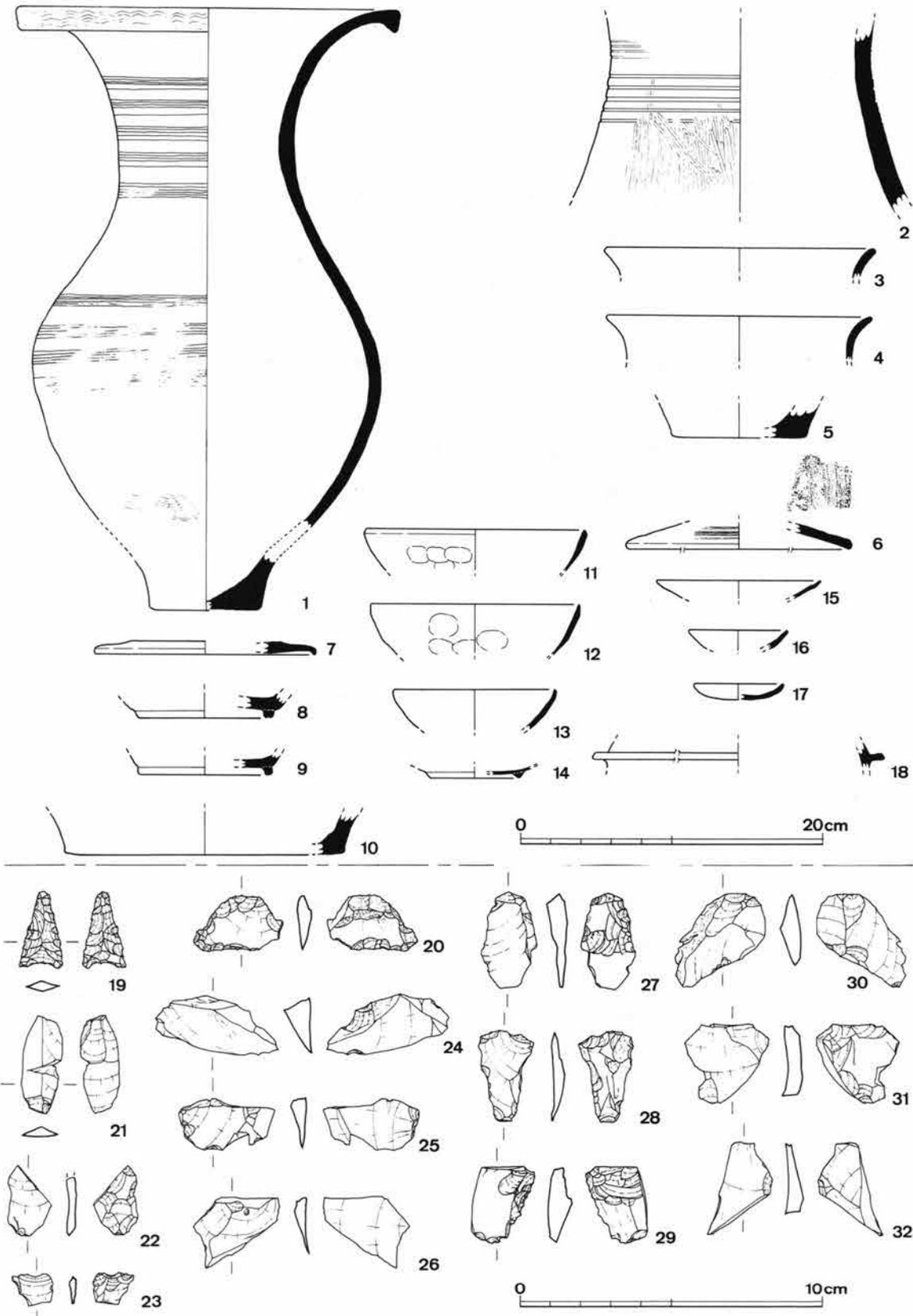
弥生土器1~6は、方形周溝墓S X 301周溝埋土中から出土した。1・2・4・6は西溝、3・5は南溝出土である。1は、広口・長胴の壺で、口径約25 cmである。胴部最大径は約23 cmで、口径の方が大きい。器高は、底部と胴部の接点がないので不確定ではあるが、約40 cm前後である。頸部に5帯、胴部に4帯の櫛描き直線文がめぐる。口縁端部に櫛描きの波状文を施す。2は、壺の頸部と考えられる。ヘラ描き直線文がめぐる。外面は、ミガキ調整される。3は、甕の口縁部とみられる。口径約27.6 cmである。4も、甕の口縁部である。口径約27.5 cmである。5は、底部片である。底径約9 cmである。6は、蓋形土器とみられる。櫛描き文を施す。これらの弥生土器は、その特徴から、畿内第Ⅱ様式併行期のものと考えられる。

須恵器7~10は、中世頃と考えられる旧耕土中から出土した。7は蓋、8・9は杯B底部で、8世紀後半頃のものか。10は、東播系の鉢底部とみられる。

瓦器碗11は、旧耕土出土で、口縁端部が肥厚する。瓦器碗12は、中世の耕作溝とみられるSD 303出土である。口縁端部が肥厚する。瓦器碗13・14は、中世の土坑S K 309出土で、14は、断面三角形の貼付高台をもつ。いずれも小片で磨滅が著しく、法量・調整の詳細は不明である。

土師器皿15は、土坑S K 309出土である。土師器皿16・17、土師器羽釜18は、旧耕土出土である。いずれも小片であり、法量・調整などは不明である。

石器は、ほとんどがS X 301周溝埋土からの出土であるが、図示したもののうち32は、土坑S K 309埋土中からの出土である。19は、石鎌で、先端部を欠失しているが、長さ約3.5 cm・基部の



第31図 出土遺物実測図

1~6・19~31. S X301 12. S D303 13~15・32. S K309 7~11・16~18. 旧耕土

幅約1.5cmを測る。凹基無茎で、石材はサヌカイトである。20は、剥片もしくは粗製のスクレイパーとみられる。石材はサヌカイトである。21～32は、剥片とみられる。石材は、サヌカイトである。

5. 小 結

今回の調査では、部分的ではあるが、畿内第Ⅱ様式併行期の方形周溝墓を検出した。南丹波地域で、弥生時代の方形周溝墓は各遺跡で検出されているが、ほとんどが畿内第Ⅳ様式併行期以降、弥生時代中期後半頃以降のものである。今回検出した方形周溝墓は、現状では南丹波地域最古のものといえよう。

亀岡盆地内で、畿内第Ⅱ様式併行期の土器が出土する遺跡としては、余部遺跡の西側に位置する太田遺跡・南金岐遺跡があげられる。その間に犬飼川を挟んではいるが、互いに近接した地域にあり、その関連等、興味深い遺跡である。この遺跡は、南丹波地域で畿内第Ⅱ様式併行期の土器が出土する数少ない遺跡の一例ではあるが、今回の調査結果は、あまりにも断片的である。今後の資料の増加を待ちたい。

(引原茂治)

注1 主な調査参加者

石田初美・石橋愛子・大西幸江・岡本志げ乃・黒田直弘・関口睦美・高田眞由美・東古昌樹・中島恵美子・中西貞子・西田芳子・野々村礼子・原田浩年・人見幸代・松本末野・松山晃子・村嶋みよ子・森川久子・山田キン子・山中道代・山本弥生・湯浅彰郎

参考文献

- 『亀岡市史』第1巻 亀岡市史編纂委員会 1994
- 『京都府弥生土器集成』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
- 『京都府遺跡調査報告書』第5冊・第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985・1986
- 『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982
- 『京都府埋蔵文化財情報』第13号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984
- 『弥生土器の様式と編年』—近畿編Ⅰ— 木耳社 1989

4. 平安京跡左京五条三坊十一町発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、京都府五条警察署庁舎の改築工事に伴う事前調査として、京都府警察本部の依頼を受けて実施した。本調査地は、京都市下京区烏丸通高辻上ル大政所町682番地に所在する。

発掘調査は、平成8年11月5日に開始し、平成9年3月11日に終了した。また、今回の調査によって得られた遺物や図面などの整理作業は、平成9年度に行った。調査面積は約360㎡であるが、調査予定地内には、五条警察署旧庁舎の地下室に伴うコンクリート基礎などが地下約3.5mにまで及ぶところも一部残されており、調査の便宜上、南側の約320㎡の調査地を第1調査地、北側の約40㎡を第2調査地として設定し、調査を開始した。しかし、第2調査地は調査面積も狭小な上、大半を旧庁舎の地下室設置で攪乱されており、顕著な遺構や遺物を見いだすことはできなかった。このことから、この概要報告では第1調査地での調査成果を中心に述べることにする。

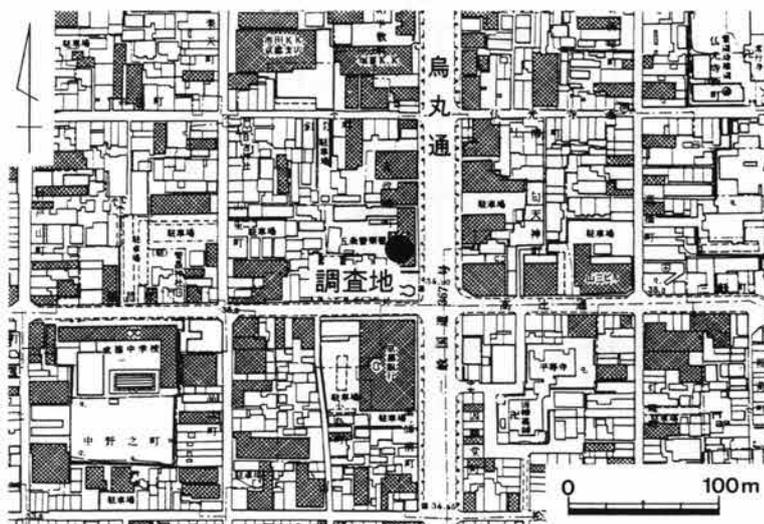
現地での発掘調査及び整理作業は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員石井清司、同調査員竹下士郎(当時)が担当し、遺物写真は、同調査第1課主任調査員田中 彰が撮影した。調査地の基準点測量は、(財)京都市埋蔵文化財研究所に、また空中写真撮影は、(株)日開調査設計コンサルタントに委託した。なお、調査に関わる費用は、全額、京都府警察本部が負担した。

この概要報告は、主に歴史的環境と検出遺構を竹下が、出土遺物については石井が執筆し、調整とまとめを竹下が行った。

なお、現地調査及び整理作業にあたっては、数多くの方々の協力をえたほか、さらに有益なご教示を多々いただいた。記して謝意を表したい。^(注1)

2. 歴史的環境

当該調査地は、現在では、京都市街地の中央部を南北に貫く烏丸通に面しており、まわりを大きなビルに囲まれたビジネス街の一角であるが、古くは弥生時代から平安時代、鎌倉時代以降、現代に至るまで連綿と人々の営みが続



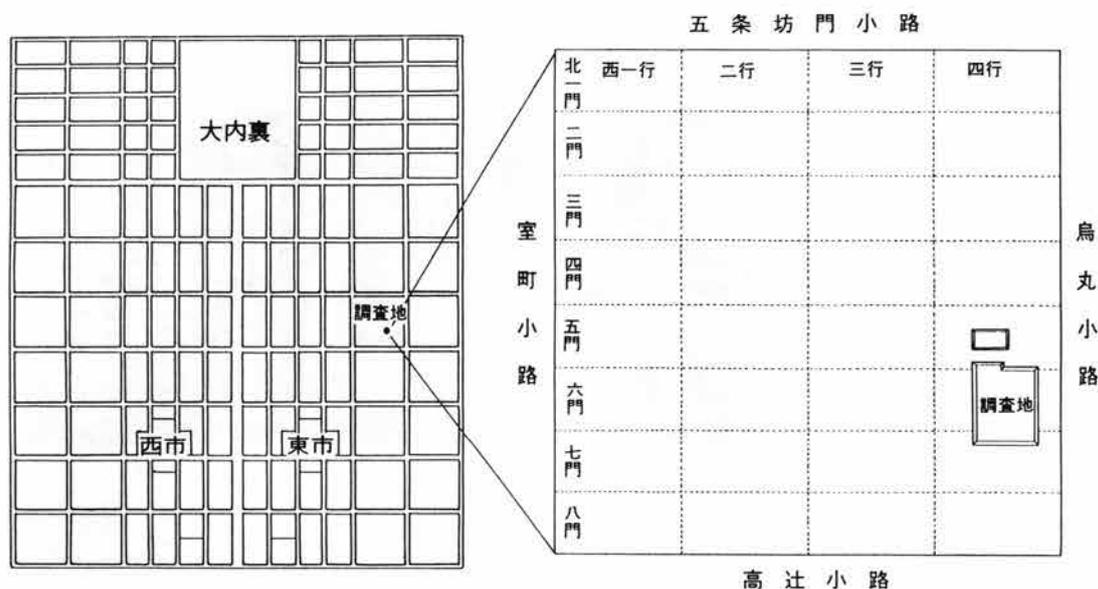
第32図 調査地位置図(1/5,000)

けられてきたところである。今回の調査でも、調査の最終局面では、現地表面から深さ約3mを測ることとなり、その土層の厚さと複雑さにこの地の歴史の厚みを感じるようになった。

ここでは調査地周辺の土地利用の変遷について、簡単に概観しておきたい。

この地周辺で人間の生活の痕跡が認められるのは、前述したように、弥生時代からである。当該調査地もその範囲に含まれる烏丸綾小路遺跡は、烏丸通を中心に、北は現在の錦小路から南は五条通付近までの、広さ約数十万㎡にも及ぶ、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての集落跡と推定されている。これまでの周辺の調査では、竪穴式住居跡や方形周溝墓、溝、流路などが確認されている^(注2)ほか、今回の調査でも、弥生時代末に比定される土器が出土した。

西暦794年に平安京が造営されるとともに、この地周辺でもさまざまな土地利用がなされている。調査地は、平安京の条坊復原図によると、北を五条坊門小路(現仏光寺通)、東を烏丸小路(現烏丸通)、南を高辻小路(現高辻通)、西を室町小路(現室町通)に囲まれた、左京五条三坊十一町の南東部にあたり、一町域を三十二等分した四行八門制では、西四行・北五門～七門に相当する。調査地の所在する十一町の東に隣接する十四町には、祇園感神院の御旅所である祇園大政所が存在し、現在の町名「大政所町」の由来ともなっている。南東の十三町には、因幡堂平等寺が創建され、古くから民衆の信仰を集めた。西の六町には繁昌社が所在していたとされており、これらは現在でも当該地にそれぞれその面影をとどめている。また、北東に隣接する十五町には発掘調査や文献史料などから、11世紀末から12世紀初頭にかけて、源国信邸が所在したことが推定されている^(注3)。また、いくつかの文献を見ると、平安時代後半以降、京域各地で火災が発生し、当地周辺でもたびたび広範囲に延焼していることが記されている。このことは、周辺に人家が密集していたことを示している。



第33図 平安京条坊図及び調査地位置図

鎌倉時代以降になると、この地周辺は下京の中でも特にその賑わいを極めたところで、当時の日本経済の中心地であったともいえる。『北野天満宮文書』、『祇園社記』、『大山崎離宮八幡宮文書』などを見ると、十一町域にも14世紀末から15世紀初めにかけて、綿売り神人、材木屋、酒屋などが多く所在していたことがわかる。特に、『北野天満宮文書』によると、「高辻西北類」には「越後」という酒屋があったことが記されている。中世に商業的繁栄を誇った下京の地に位置する酒屋であるということは、一定の広さを持つ屋敷地であった可能性がある。さらに、江戸時代に森幸安が、応仁の乱以降の京都を描いたといわれる『中昔京師地図』を見ると、調査地のあたりには「本覚寺」が所在すると記されている。また、『洛中洛外図屏風』左雙(町田家旧蔵本)を見ると、大政所の斜め向いにわりと大きな寺院が描かれており、この寺院が「本覚寺」と考えられる。本覚寺は、源実朝の夫人、内大臣坊門信清の女が尼となり本覚と号し、八条の地に本覚寺を建立したことに始まるといわれるが、文亀3(1503)年に当地に浄土宗寺院として再建されたものである。しかし、本覚寺がこの地にあるのはあまり長くなく、天正19(1591)年には、秀吉の命により、本覚寺は下京区本塩竈町に移され現在に至る。

当該調査地が所在するのは大政所町の西側であるが、その北には釘隠町がある。釘隠町の町名の由来について、『雍州府志』では「近世洛中有三町人、其一角倉、其二十四屋倉、其三醍醐倉是也、斯内十四屋倉在此町、云々」と述べ、「十四屋倉」の邸宅で釘隠を用いたことからであると記している。十四屋倉について詳しく知るすべがないが、江戸時代の有名な商人「角倉」と並び記されるほどであることから想像すると、釘隠町から大政所町にまたがる大邸宅を構えていたと考えることもできる。

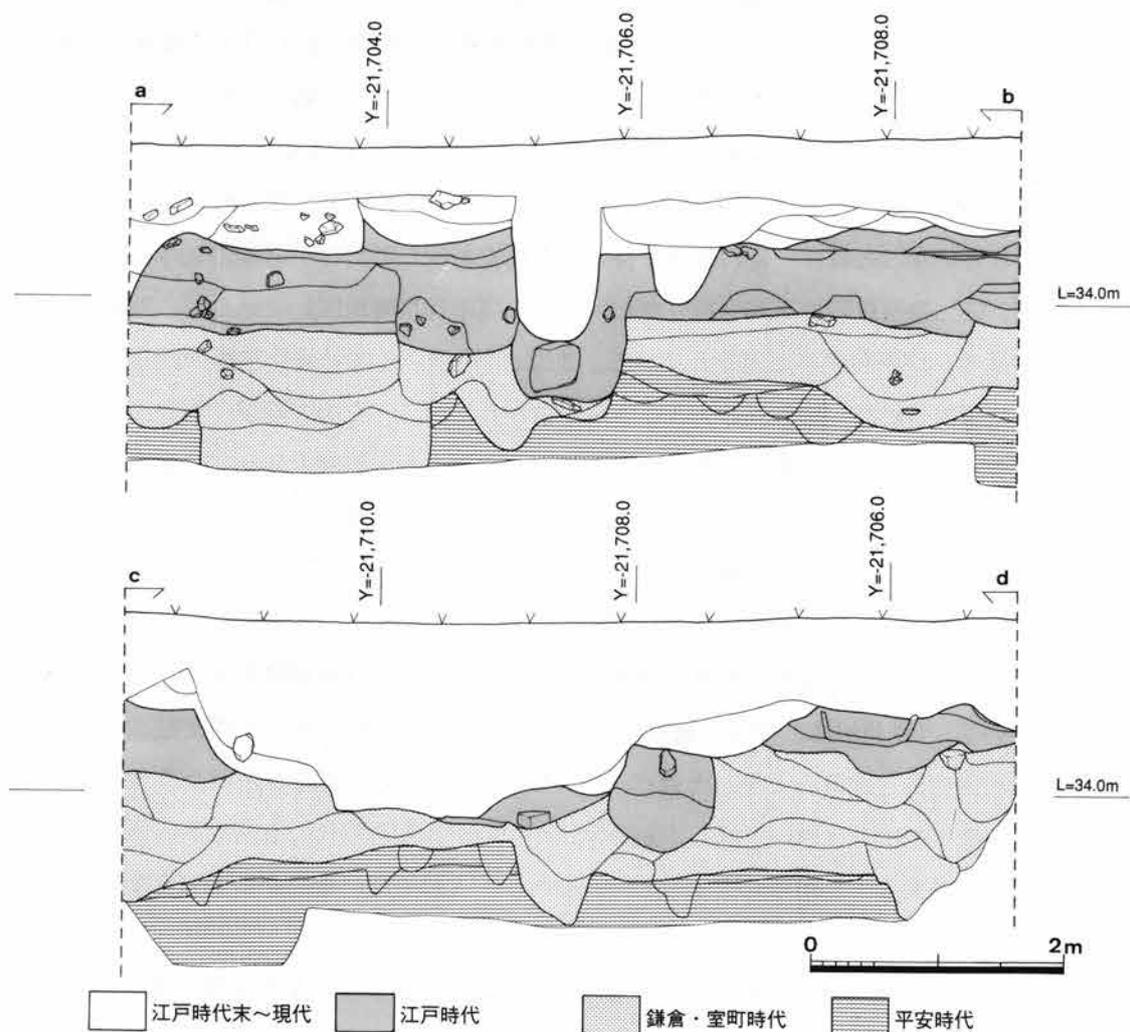
江戸時代後期から明治時代にかけては、烏丸通、高辻通に面して、キセル商、瀬戸物屋、仏師、染め呉服屋などが軒を連ねていたことが知られている。なお、この地に京都府五条警察署が建てられたのは1935年のことである。

3. 調査概要

(1)基本層序

トレンチ内の大半が標高34m付近まで攪乱されており、特にトレンチの東側では、警察署庁舎の基礎などによって、攪乱層が地山まで達しているところがあった。このような中で、第34図は比較的良好に土層堆積状況が確認できた部分である。

北壁面と南壁面とでは、若干様相が異なるが、現表土から約50cmは、江戸時代末から現代にかけての堆積層である。また、その下約50cmには、基本的に黒褐色を呈する土層がほぼ水平に堆積しており、江戸時代に堆積したと考えられる。この中には薄く炭の堆積するところや、漆喰による遺構などが確認された。さらに、その下の標高約33.5m付近までは暗茶褐色を中心とする土層で、およそ中世の堆積と考えられる。この中世の堆積層の下層は、大部分が黄緑色を呈しており、緑釉陶器片などを比較的多く包含するところもあった。平安時代の遺構の基盤となる層である。最下層は小礫、砂礫層となり、以下は無遺物層となるが、一部平安時代の堆積層の下層に茶褐色



第34図 調査地南壁及び北壁土層断面図(1/60)

から灰褐色の粘質土層が確認され、そこからは弥生土器片が出土した。

(2) 検出遺構

表土以下、近・現代の堆積層、及び攪乱層などをまず重機により掘削、排土した後、人力によって掘削、精査を繰り返し、遺構の検出に努めた。第35図は、重機掘削直後の平面図で、標高34m付近のものである。第36図は、およそ調査の最終局面での平面図である。調査にあたっては、国土座標に基づき、調査地内を4mごとのラインで区切り、西からA～E、北から1～5の記号を付し、地区割りをを行った。この概要報告でもこの地区割りをを用いて遺構の位置を示している。

以下、主な検出遺構について概略を述べておく。

① 平安時代以前

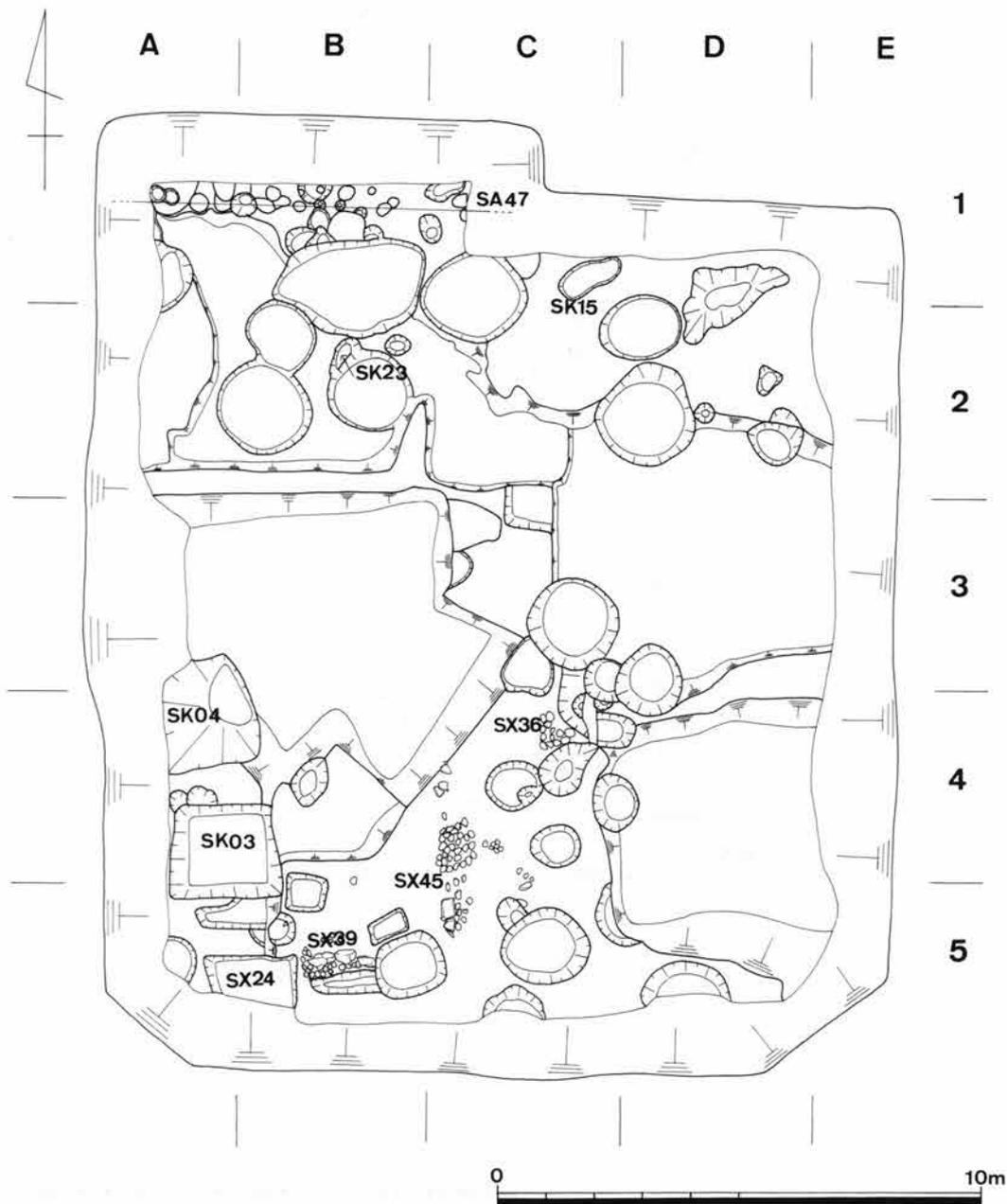
S K 152 C 2区のかなり深いところまで攪乱されていた部分の下層で検出した土坑である。遺構の残存状況はあまりよくなかったが、埋土は暗茶褐色の粘質土で、ほぼ直径2mの円形の土坑になると思われる。弥生土器が出土した。この調査地の北東部は、主に淡茶褐色の土層となっており、他の部分で多く見られた平安時代の遺構の基盤となる黄緑色の土層はあまり見られな

った。おそらく、平安時代の削平を免れて残存した遺構と考えられる。

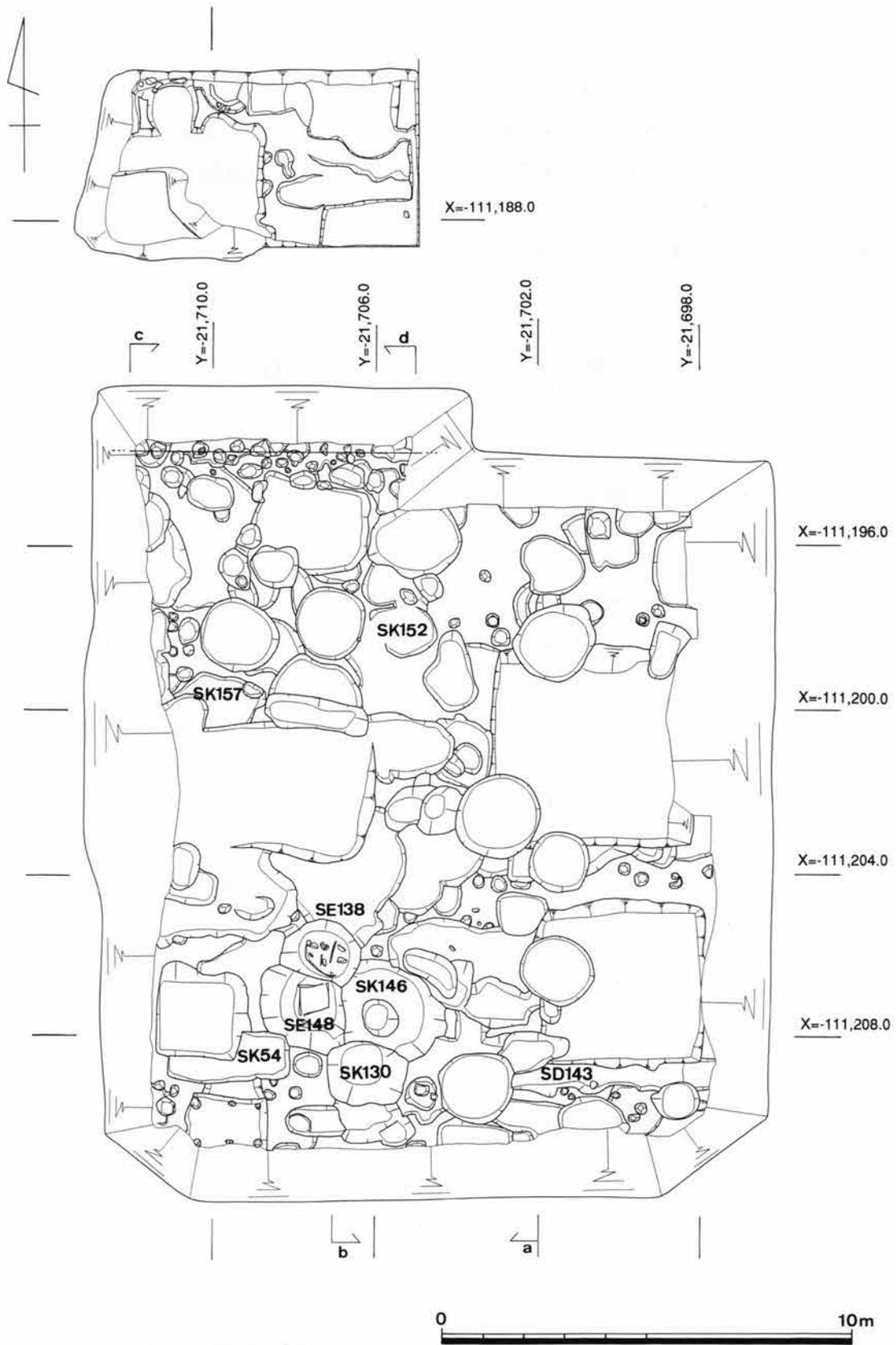
②平安時代

S K 130 B 5区で検出したもので、一辺が1.5~2.0mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さ約1.5mを測る土坑である。後述するS K 146を切っている。また、この土坑の中央部は、さらに直径約1.0m・深さ約0.3mの円形に深く掘り込まれており、このS K 130は井戸であった可能性も考えられる。S K 146と同時代か、わずかに新しいと考えられる須恵器・白磁・灰釉陶器・緑釉陶器・土師器皿などが出土した。

S D 143 調査地の南東部D 5区で東西方向に検出した溝跡である。検出全長は約5.0mで、推



第35図 調査地平面図(1) 1/150



第36図 調査地平面図(2) 1/150

定最大幅約0.8m・深さ約0.15mを測る。北側の肩部は攪乱によって失われているほか、この溝の西側についてはS K130などで切られていて検出できなかった。明灰黄褐色の埋土からは10世紀後半の土師器のほか、須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器などが出土した。また、この溝の中心と考えられるところの座標値は、およそ $X=-111,208.60$ となり、この地の北六門と七門を分ける境界の座標推定値、 $X=-111,208.40$ とほぼ一致する。このことから、この遺構は、北六門と七門を区画する溝と推定される。

S K146 B4区で検出した土坑である。S K130・S E148に南側と西側を切られているが、直径約3.0m・深さ約1.8mの円形になると推定される。およそ10世紀末から11世紀初頭にかけての白磁・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・土師器などが出土した。また、杵材などは認められなかったが、前述したS K130と同様に、この土坑の中央部は直径約1.0mほど深く掘り込まれており、井戸の可能性が考えられる。

S E148 B4区で検出したもので、掘形の直径は約1.5mと推定される。最底部に一辺約50cmのほぼ正方形を呈する木杵が残存していた。検出面から木杵までの深さは約2.0mである。木杵の残存状況は極めて悪く、接合部の観察も十分になしえなかったが、厚さ約1.0cm・幅約5.0cmの板材と、厚さ約5.0cm・幅約7.0cmの角材が組み合わせてあり、井戸杵の最下層部と考えられる。このS E148は、S K130とS K146を切っていた。緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・白磁・土師器などが出土した。

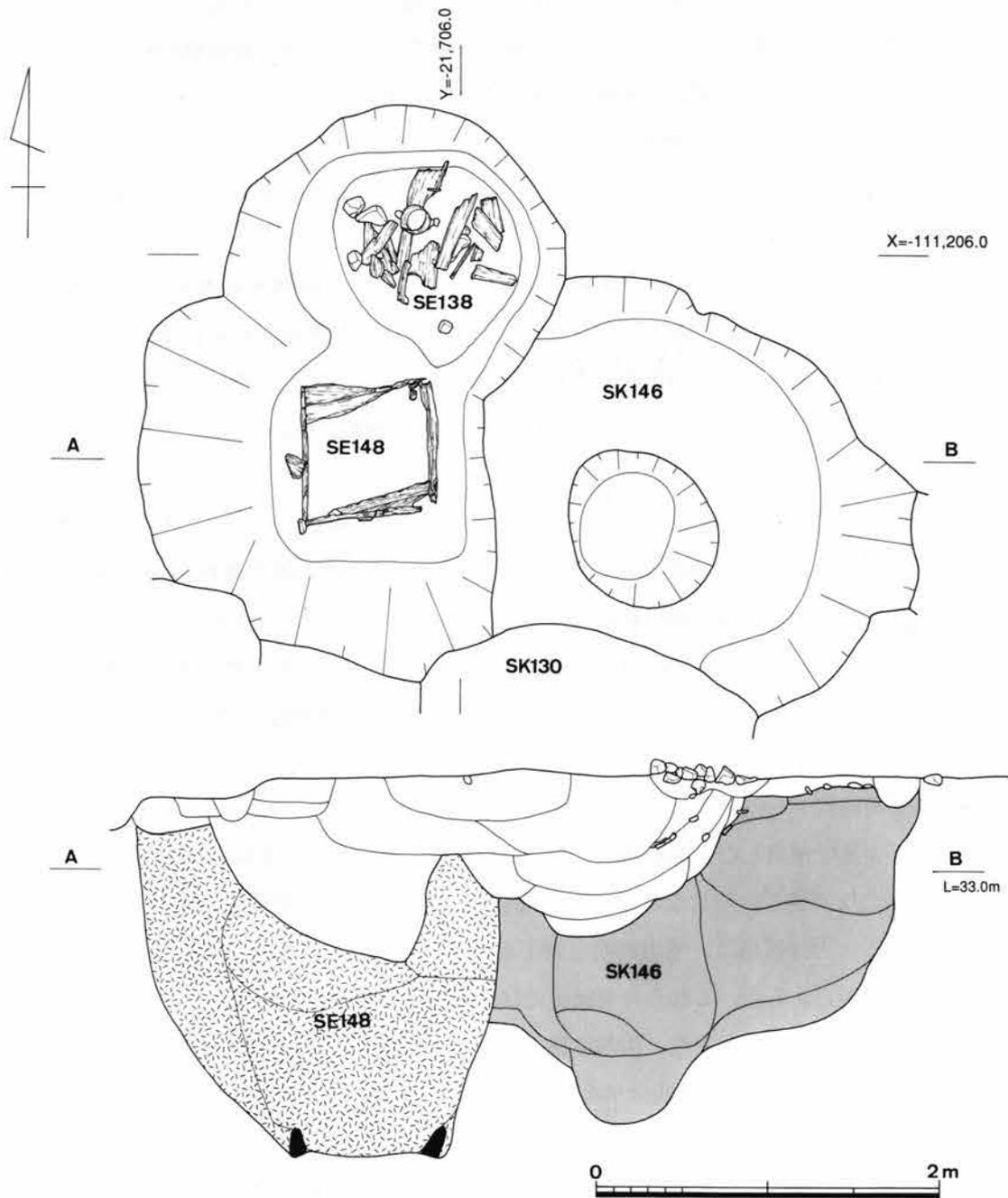
③鎌倉～室町時代

S K04 A4区で検出した土師器皿が大量に含まれる土坑である。北側と東側及び上面を攪乱されており、土坑の詳しい形状などについては不明であるが、一辺が約2.0mの方形を呈するものと推定される。土師器皿は、検出面から約0.4mの深さの中にほぼ均等に含まれていた。この土坑の性格は不明であるが、これらの土師器皿は使用後廃棄されたものであろう。

S K15 C1区で検出した北東・南西に長い楕円形の土坑である。一部北壁面にかかるが、長軸約1.5m・短軸約0.5m・深さ約0.4mを測る。黒灰色の埋土で、12世紀末頃の石鍋や瓦質羽釜などが出土した。

S K23 B2区で検出したもので、南北に長い楕円形の土坑と推定されるが、北端、南端が近世の遺構によって切られていることから、あるいは溝状の遺構になるかもしれない。長軸約0.8m・短軸約0.4m・深さ約0.5mを測る。淡茶褐色の埋土であった。12世紀後半から13世紀初めの土師器皿などが出土している。

S X24 南壁直下西寄りのB5区で検出した長方形の土坑である。短辺約1.0m・長辺約2.0m、検出面からの深さ約0.3mを測る。また、各辺に対応するように、直径約0.3mのピットを計6か所検出した。このことから、この土坑上には、1間×2間の覆い屋があったと推定される。なお、検出時には上面に薄く炭層の堆積が見られ、この覆い屋は何らかの理由で焼け落ちたと考えられる。埋土中からは人頭大の礫とともに、13世紀後半から14世紀前半のものと推定される土師器皿・白磁双耳壺・常滑甕などが出土した。規模・出土遺物ともに酷似した例が、近接した左京三



第37図 SE138・SK146・SE148遺構図(1/40)

坊十五町の調査でも検出されており、墓とされている^(注4)。今回の調査でも、人頭大の礫の中には五輪塔の一部と考えられるものもあり、この土坑は墓であった可能性がある。

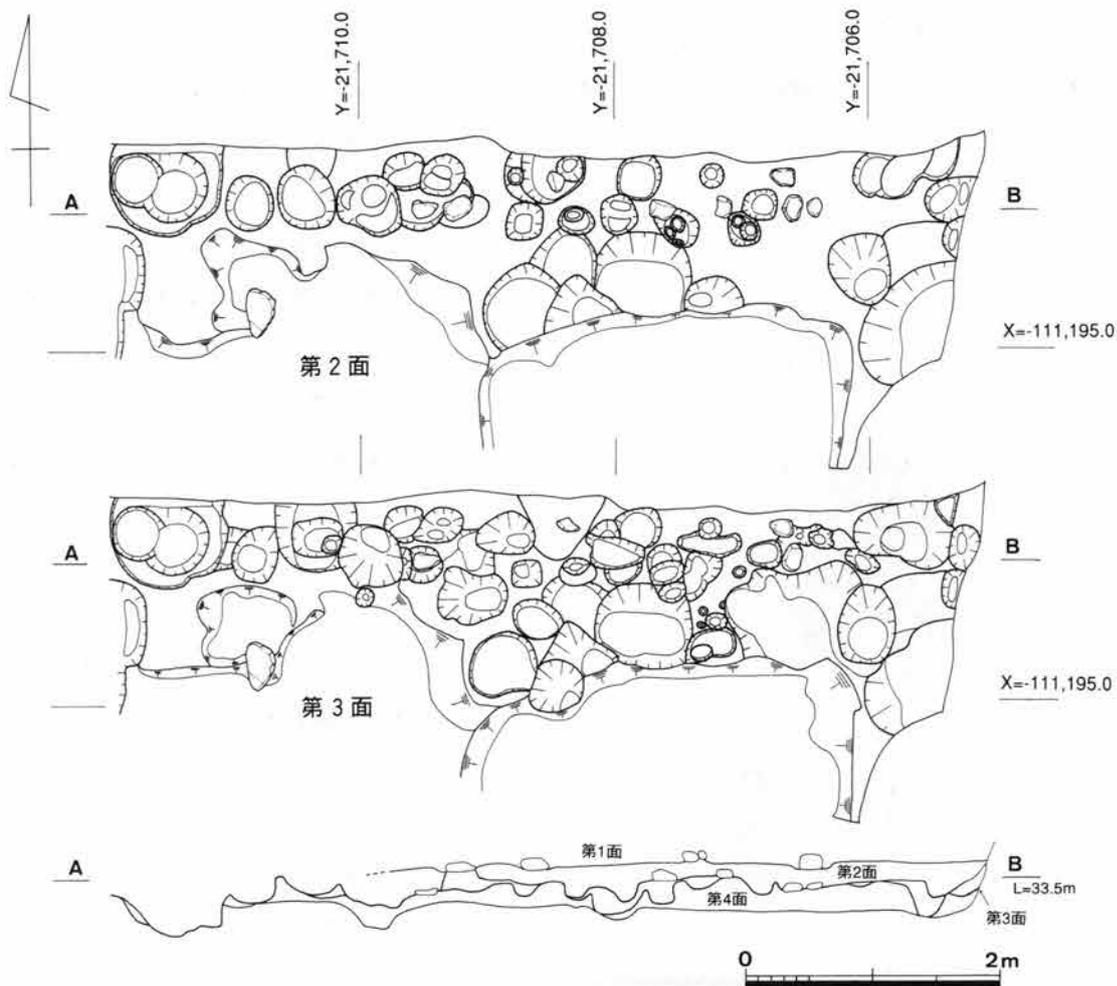
S X 36 調査地のほぼ中央部、C 4 区で検出したもので、幅0.5~0.6m・長さ約1.5mにわたって、円弧の一部のように拳大ほどの礫が集積されている遺構である。少量ではあるが被熱痕を持つ石もあり、後述するS K 74と一連の遺構である可能性がある。

S X 39 調査地の南側、B 5 区で検出した。長さ約0.4m・幅約0.3mの偏平な石数個と小礫が東西方向に敷かれていた。検出全長は約1.5m、幅は約0.5mである。

S X 45 調査地のほぼ中央部で南北方向に検出した。検出全長は約3.5mで、S X 39とほぼ同

様の状況であった。調査地南壁下でS X39と直交すると考えられ、S X39・S X45は方形になんらかの区画を形づくる、一連の遺構であろう。両遺構とも出土遺物は少なく、帰属する年代に確証がもてないが、調査の最終局面で、南壁の精査を行った際に、S X45の延長線上ではほぼ同レベルとなる場所から、一辺約30cm四方の正方形をした埴が出土しており、かつてこの地に所在したとされる「本覚寺」の遺構と推定される。

S A47 調査地の北端部で検出した、東西に並ぶピット群である。今回は、ほぼ四間分を検出した。各ピットは直径0.3~0.5m、その間隔は約1.2mを測る。ピット中に石を据えたものも数か所ある。最も最下層で検出したものは、黄緑色の土層の上面から掘り込まれていた。なお、この周辺には南北幅約1.5mの範囲に無数のピットが確認でき、この柵列については少しずつその位置を変えながら、平安時代末から室町時代にかけて数回の建て替えがなされたと考えられる。これらの柵列の座標値は、およそ $X=-111,194.0\text{m}$ となり、北五門と六門を区画する推定ライン($X=-111,193.48\text{m}$)と約50cmのズレがある。しかし、これらのピット群は前述したように、およそ1.5mの幅があることから、北五門と六門を区画する柵列の遺構と考えることが可能である。第38図は、S A47付近の第2面、第3面の平面図及びS A47と推定されるラインのレベルの変化



第38図 S A47遺構図(1/60)

を示したものである。

S K 54 S X 24の北隣り、B 5区で検出したもので、北西側をS K 03に切られているが、S X 24よりひとまわり大きく、短辺約2.0m・長辺約2.8mを測る長方形の土坑である。遺構の中央部やや東寄りで多数の土師器皿が出土した。ここで出土した土師器皿は、完形もしくはほぼ完形のものが非常に多かった。検出時の形状はS X 24とよく似ていたが、S X 24よりわずかに新しい遺構と考えられ、また規模の違い、遺物の出土状況の違いなどから、S X 24とはその性格を異にするものであろう。

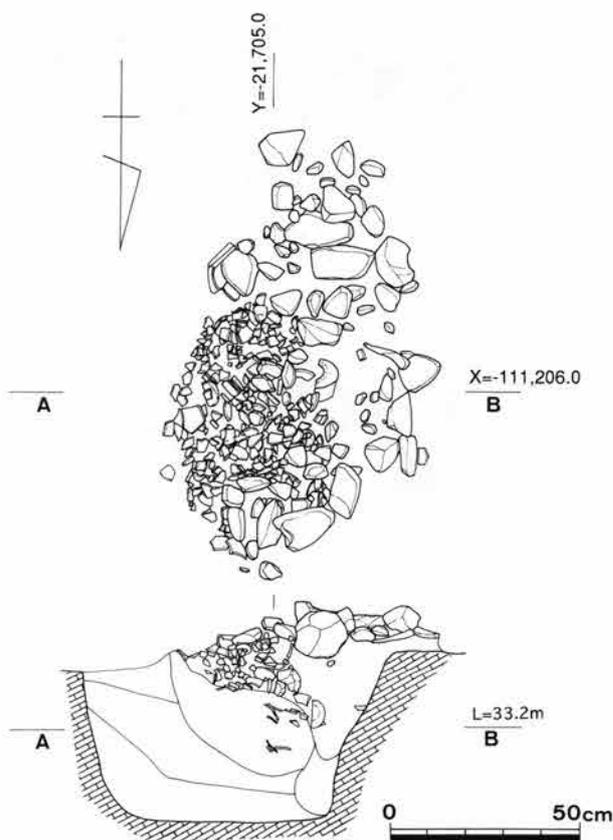
S K 74 調査地の中央部で検出したものである。他の遺構や、攪乱によって切られており、全容は不明であるが、直径約1.0mの円形の土坑状の遺構と推定される。西側の約三分の一を検出した。埋土は暗褐色であったが、壁面は橙褐色で固く締まっていたことから、かなりの熱を受けたと推定される。調査地内では、溶解した金属塊、鞆の羽口などもいくつか出土しており、この地に何らかの金属加工を行う作業場があったことが考えられる。

S K 75 C 4区、S K 74の西隣りで検出した土坑である。検出面から約0.3mの深さで、直径約1.5mほどの円形を呈するものと推定されるが、西側のおよそ半分を攪乱によって切られているために、全容は不明である。この土坑の南東側の底部では、破碎された土師器皿が大量に出土した(土器溜まり2)。

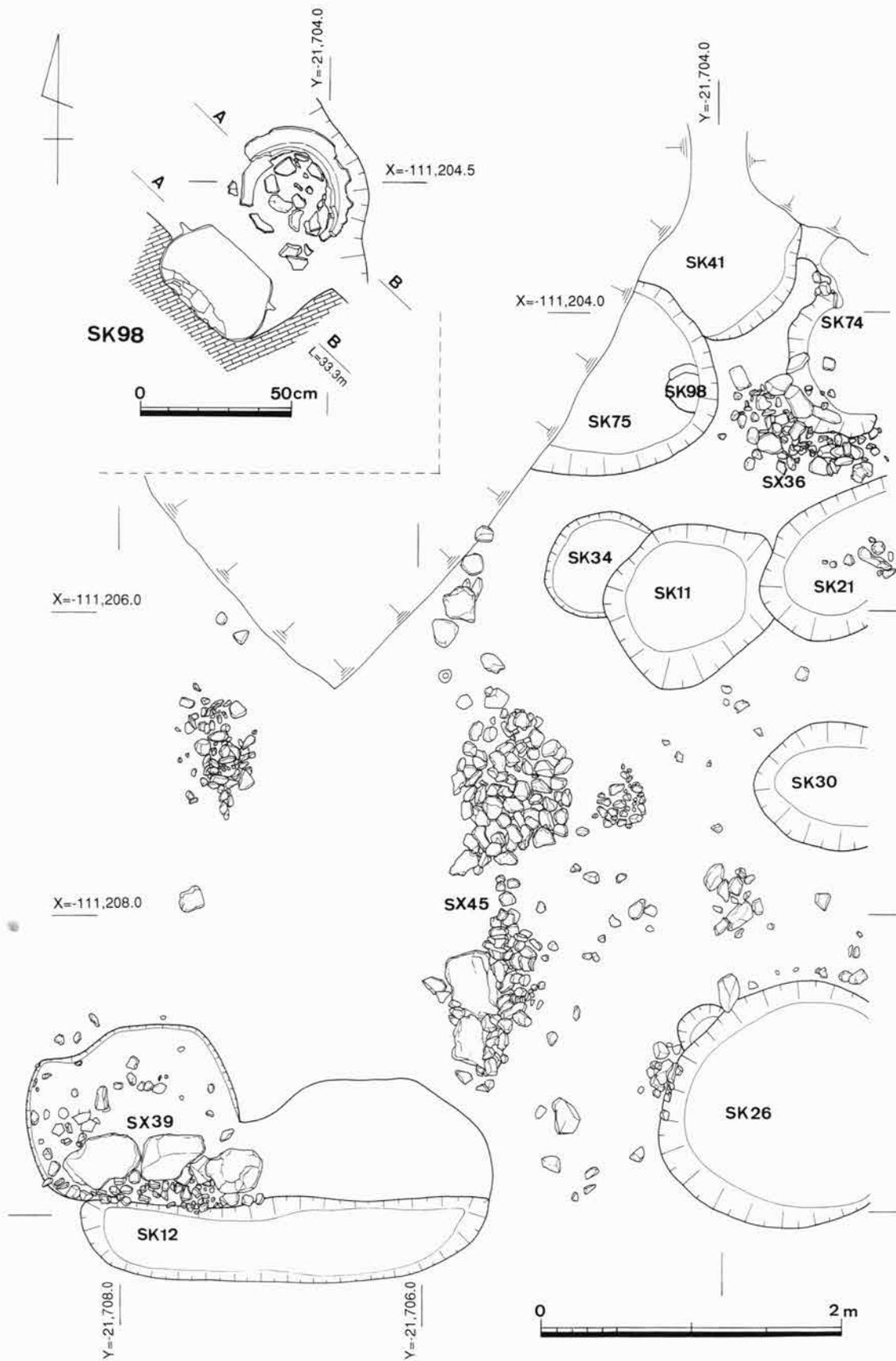
S K 98 S K 75の下層で検出したもので、直径約0.3mの土坑にはほぼ同等の直径の羽釜を据えたものである。

羽釜の北東側は良好に残存していたが、南東側の半分と底部は壊れていた。黒褐色の埋土で、埋土中には土師器皿や須恵器・青磁の破片が含まれていた。羽釜は下部を土中に埋め、正置した状態で据えられており、何らかの意図的な遺構と考えられるが、その性格については不明である。

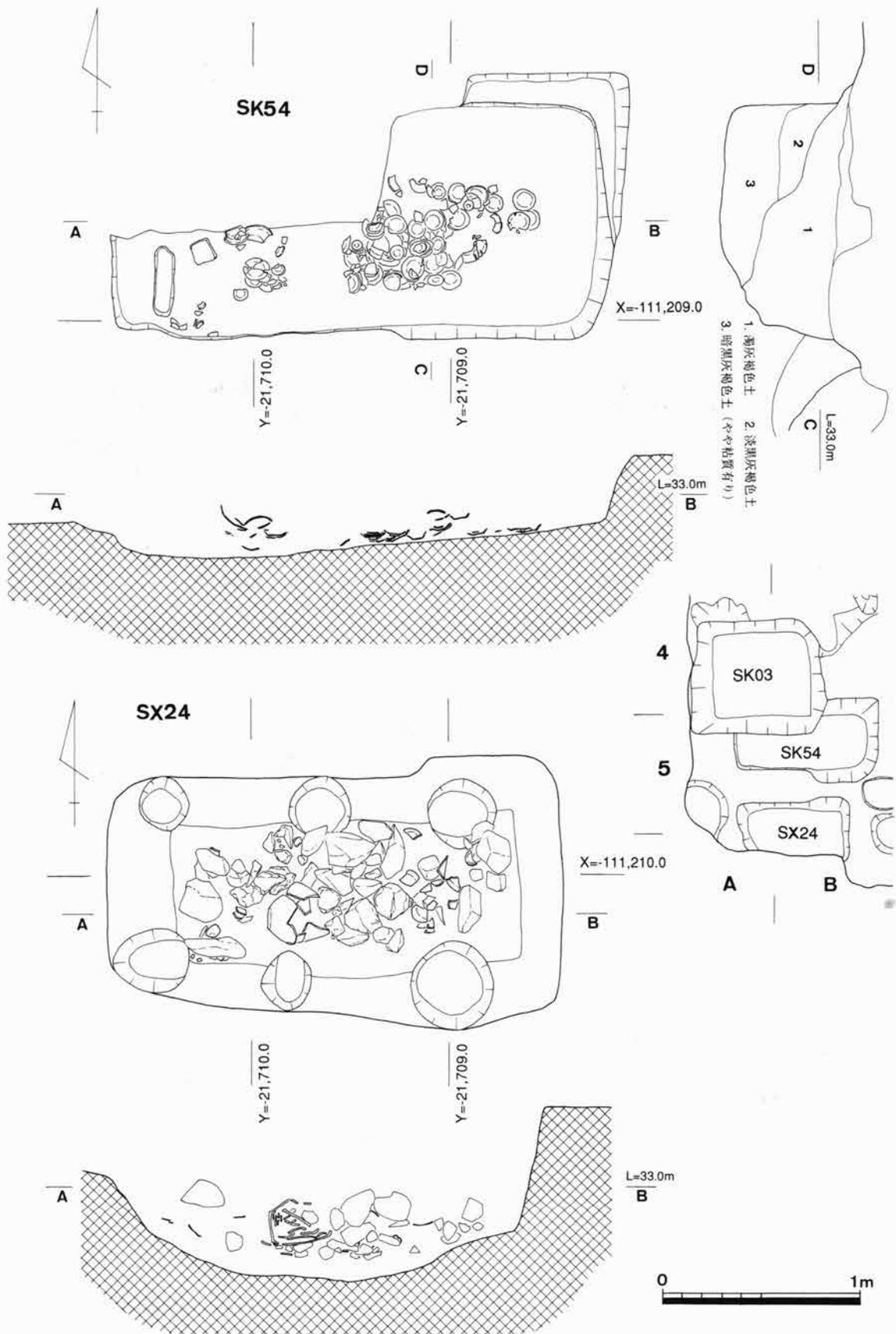
S K 102 C 4区、S K 75の南側で検出した、直径約0.5mほどの小さな土坑であるが、やや粘性のある土の壁面、及び底面に土師器皿の小片をびっしりと敷きつめてあった。また、検出時には、上面の東側半分にこの土坑を縁取るように、石が並べられていたことから、これらの石は当初は土坑の全周に並べられていたと推定される。検出時の状況から、この土坑はいわゆる塵芥坑とは考えにく



第39図 S K 102遺構図(1/20)



第40図 B4・B5・C4・C5区遺構図(1/40)



第41図 S X24・S K54遺構図(1/30)

いが、その性格については不明である。

S E 138 B 4区で検出したもので推定直径約4.0m、検出面からの深さ約1.8mを測る。底部では、幅約15～20cmの板材が検出されたことから、木枠を持つ井戸であった可能性も考えられるが、これらの板材は折り重なるように積み重なっており、井戸枠の痕跡は検出されなかった。また、これらの板材の上部では、直径約25cmの曲物が検出された。この曲物はやや小ぶりではあるものの、井戸の水汲み桶の一部と推定される。さらに、これらの板材と粘土の間にサンドウィッチ状に挟まれて、骨のほか、鱗、表皮まで残存した体長約10cmの「ギンプナ」の遺体^(注5)が出土した。鎌倉時代の遺構と考えられる。

S K 157 B 2区で検出したもので、短軸約1.5m・長軸約3.0mの東西に長い楕円形の土坑である。深さは約0.4mを測り、暗茶褐色の埋土からは、土師器皿のほか、白磁・須恵器鉢などが出土した。鎌倉時代初め頃の遺構であろう。

④安土・桃山～江戸時代

S K 03 一辺約2.0m、検出面からの深さ約0.7mを測る、ほぼ正方形となる土坑である。A 4区で検出した。前述したS K 54を切っており、埋土は径10～15cmの栗石と水分を多く含む暗茶褐色土が中心である。上層では一部薄く炭の堆積が確認されたことから、上部に何らかの構造物があったとも推定されるが、周辺では柱跡などの痕跡は検出していない。検出当初は、その形状、規模から石室なども想定したが、そのような痕跡も確認されなかった。中国製陶磁器類や16世紀末から17世紀初めにかけての織部焼・志野焼・唐津焼・備前焼・天目茶碗などの茶器・花器類が比較的まとまって出土した。また、残存状況は極めて悪かったが、漆器碗なども出土している。

(3)出土遺物

平安京、特に、左京では調査面積に対して出土遺物が膨大である。今回の左京五条三坊十一町でも調査面積360㎡に対して、整理箱にして270箱以上の遺物(主に土器)が出土した。そのうち、平安時代のものは少なく、鎌倉時代以降へと時代が新しくなるにつれ土器の量も増加する傾向にある。今回の報告では、出土遺物の中でも比較的一括性の高いものを中心に資料を提示する。

S D 143出土遺物(1～18) S D 143は、後述するS K 130に切られた溝状遺構で、土器は土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などがあり、10世紀後半を中心とした時期の資料である。ただ、土器は細片のものが大半であり、その一部には鎌倉時代以降の土器が混在している可能性もある。

土師器には、7面帯の高杯脚部(14)のほか、口径17.7cmの小型甕(15)・皿などの脚部(12)がある。土師器皿には、口縁部の断面形が「て」の字に似た「ての字状口縁」(伊野分類のBタイプ)^(注6)のもの(1～3)と、4・13のように手づくね成形で、底部と体部の境を屈曲させ、口縁部外面には二段にわたって強くヨコナデしたもの(伊野分類のAタイプ)がある。須恵器碗(5)は底部片で、底部は削り出しによる平高台である。鉢(18)は、口縁端部を玉縁状に肥厚させている。灰釉陶器は碗の底部片(6・7)のみで、いずれも輪高台である。緑釉陶器(8～11)は、皿(8)あるいは碗(9～11)の破片で、8・9は軟質、10・11は硬質の胎土である。16は、口径15.8cmを測る内黒の

黒色土器である。

S K 146出土遺物(19~32) S K 146はS K 130に切られた土坑で、土器は土坑の底部付近で出土した。土器はいずれも細片で、器種としては土師器・須恵器・緑釉陶器・白磁・瓦器などがあり、一部上面の遺構の遺物が混在している。

土師器鉢(20)は、口径8.0cm・器高4.1cmの小型品である。土師器(30)は、口縁部下端に短く太い鏝を貼り付けた土釜である。31は、口径17.0cmを測る単純「く」の字形に屈曲する甕である。須恵器(21・22)は、椀の底部片で、糸切りによって粘土塊から切り離した後、高台を貼り付けている。22は、外周部に粘土帯を貼り付けて平高台状に成形している。須恵器鉢(29)は、口縁部が玉縁状を呈した亀岡市篠産のものである。白磁椀の底部片(24・25)のうち、25は森田分類の椀IV類の底部片の可能性^(注7)がある。緑釉陶器(26)は、明緑色の釉調で、底部は貼り付けによる輪高台である。瓦器椀(27・28)は、同一個体の可能性が高く、口縁部を丸く納め、内面には一条の明瞭な沈線がめぐる。内底面の見込み部にはギザギザ状の、体部内・外面には隙間なく密な間隔で暗文を施している。陶器(32)は、鉢あるいは盤の底部片と思われ、内・外面に暗茶褐色の釉が施されており、輸入陶器と思われる。

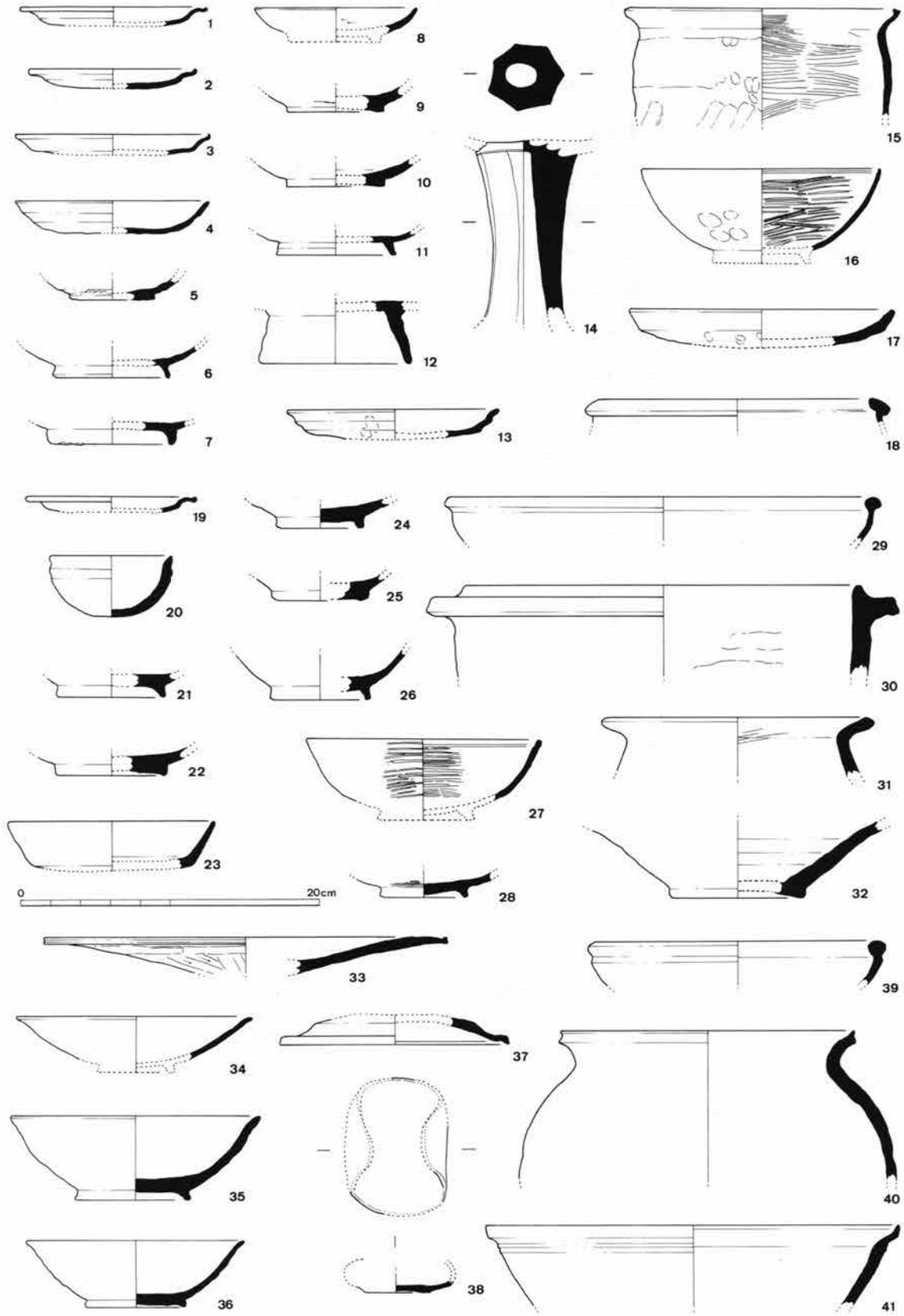
S K 146は、細片が多く時期決定の資料を欠くが、10世紀後半を中心とした時期のものである。

S K 130出土遺物(33~79) S K 130からは整理箱にして5箱程度の量の土器が出土しており、その多くが須恵器甕である。須恵器甕は、接合・復原作業を試みたが、いずれもが肩あるいは腹部の一部であり、図化しえる資料はなかった。大型品と思われる須恵器甕のほかには、土師器・土師器皿・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁・瓦器などの小型品があり、図化しえたのはいずれも小型品である。

土師器には、高杯杯部(33)がある。33は、水平方向にのびる杯部から口縁端部を上方にわずかに肥厚させ、面をつくっている。杯部外面にはヘラ削り調整が認められる。

土師器皿には、伊野分類のAタイプの中皿(42~44)と、Bタイプの「て」の字口縁の皿(56~60)、45のような口縁部が内側に大きく折り返してコースター状を呈した皿(伊野分類のCタイプ)がある。Aタイプの皿は、口径15.0cm前後の中皿で、口縁部外面には2段の強いヨコナデ調整を施している。Bタイプの皿は、前述のS D 143・S K 146のものが口径10.0cm以上であるのに対して、S K 130では口径10.0cm以下であり、器壁の厚さも前者が3mmに対してS K 130では4~5mmとやや厚くなる。Cタイプの皿(45)は、口径13.2cmとやや大型のものである。土師器皿(61)は、ロクロ成形による土師器で、口縁部は短く外反ぎみにおわり、底部はヘラ切りによって切り離しており、京都産のものとは異なっている。土師器皿(61)と同タイプのものは3点と少量である。

須恵器には、杯蓋(37)・椀(36)・小型甕(40)・鉢(39・41)がある。杯蓋(37)は、天井部が欠損しているため宝珠形ツマミの有無は不明である。椀(36)は、口径15.0cm・器高4.7cmを測るもので、底部は貼り付け高台である。小型甕(40)は、ナデ肩の体部で口縁部は「く」の字形に屈曲し、口縁端部はつまみあげている。鉢(39)は、体部上端でわずかに内湾して肩部を形成し、口縁部は



第42図 出土遺物実測図(1)

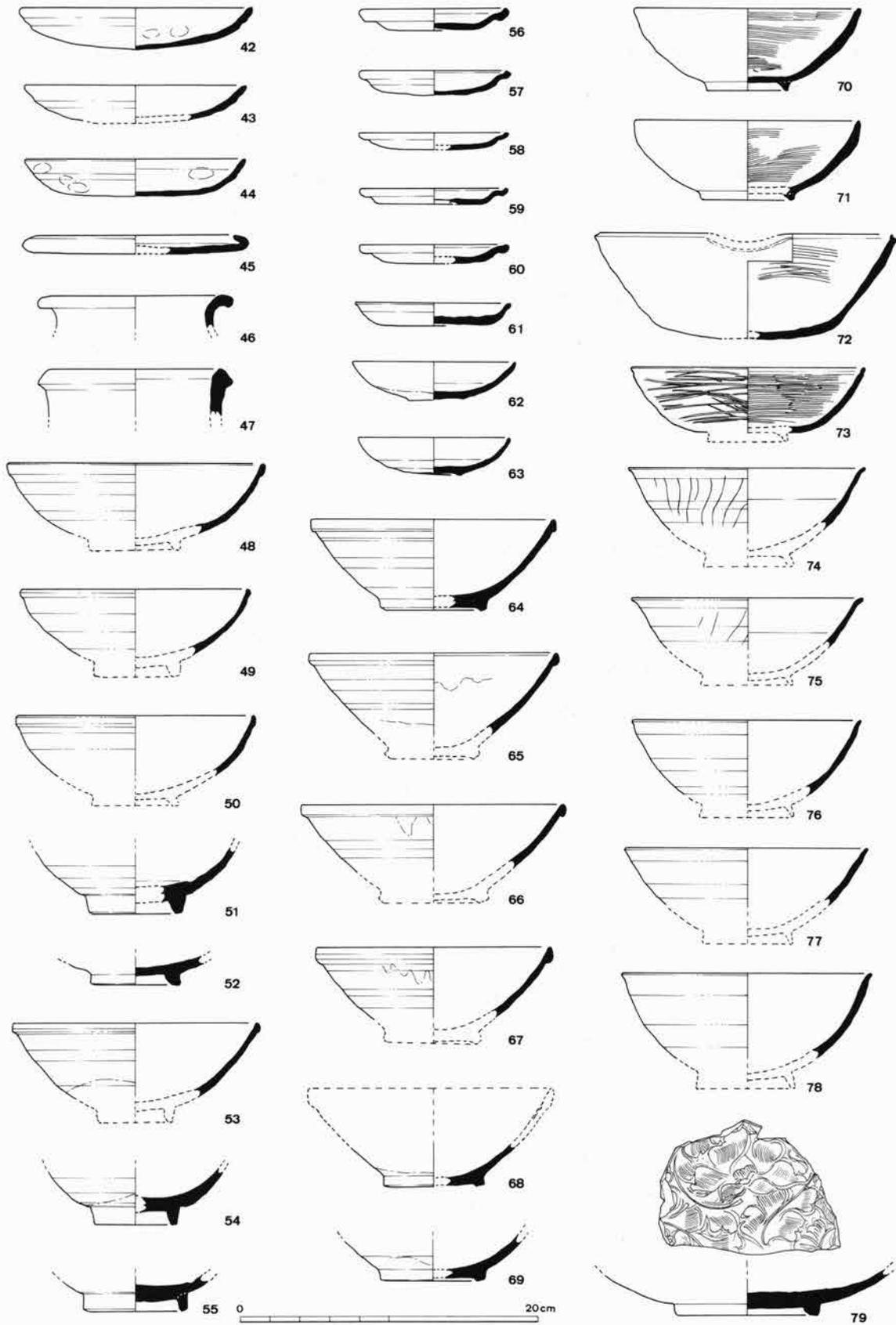
内・外方に肥厚して玉縁状を呈するもので亀岡市篠窯跡群の製品である。鉢(41)は、斜め上方に立ち上がる体部から口縁部はわずかに屈曲した後端部を直立ぎみにつまみ上げて面をつくっており、香川県十瓶山周辺窯の製品と思われる^(注8)。

灰釉陶器には皿(34・38)、椀(35)がある。皿(34)は、斜め上方に立ち上がる体部から口縁部をわずかに外反させたもので、端部は丸く納める。34と同一個体のものと思われる破片では口縁端部にヘラ状工具による圧痕があり、34の口縁部は輪花になると思われる。皿(38)は、口縁を二方向から内側に折り曲げた耳皿で、器壁は2mm前後と薄く仕上げている。底部は突出ぎみの平底で、底部外面には回転糸切り痕がある。椀(35)は、口径15.4cm・器高5.7cmを測り、器壁が厚く、粗い胎土を呈した南都系の山茶椀である。

瓦器(70~73)には、椀・鉢がある。73は、内湾ぎみに立ち上がる体部で、口縁端部は丸く納め、口縁端部の内側に明瞭な1条の沈線がめぐる。体部内・外面には隙間なく密に暗文を施している。70・71は、73に比べて体部の器壁が厚く、高台は三角形の低いものである。体部内面の暗文は密であるが、外面の暗文は口縁部のみが密となる。72は、鉢で口径19.5cm・器高7.1cmを測り、丸底ぎみの底部から斜め上方に直線的に立ち上がる体部へ続き、口縁端部は内・外方にわずかに肥厚させて面をつくっている。口縁部の外周にはわずかに屈折する部分があり、片口である。体部内面には暗文が認められる。瓦器(70~73)は、上面遺構からの混入の可能性はある。

白磁には、皿(62・63・79)と椀(48~55・64~69・74~78)がある。皿(62・63)は、体部が内湾ぎみに立ち上がり、体部から口縁部に向かって器壁が薄くなる傾向にある。体部中位の内面には沈線状の見込みが認められる。底部は、高台状にわずかに削り出し、断面三角形状を呈している。森田分類^(注9)の皿Ⅶ、あるいは皿Ⅷに属すると思われる。釉調は、やや青みを帯びた色調である。62は口径10.8cm・器高2.6cm、63は口径10.2cm・器高2.5cmを測る。皿(79)は、底部片のみであるが、底部高台径9.6cmを測る大皿で、内面には花文様を彫り描いている。椀には森田分類のⅡ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類と思われるものがある。48~50は、内湾ぎみに深く立ち上がる体部で、口縁部外面はわずかに肥厚して小さな玉縁状を呈している。体部と底部が接合するものがなく、推定の域をでないが、椀(48~50)の底部には51・52のような比較的高く外面が垂直ぎみに立ち上がる高台がつくと思われる。48~50は、灰白色の胎土で、釉調は黄色味を帯びた灰白色である。53は、48に比べて体部の立ち上がりが直線的であり、器高が高くなるとされる。口縁部外面には、48と同様の小さな玉縁がつく。釉調は、やや青みを帯びた灰白色である。54・55の底部片は高い輪高台で、53タイプの椀の高台と思われる。64~69は、直線的に立ち上がる体部で、口縁部は48・53のタイプに比べて玉縁が大きくなる。底部は、幅が広くわずかに削り出した低いものである。ほぼ完形に復原できる64は、口径16.2cm・器高6.2cmを測る。釉調は濁乳灰色で、やや青みを帯びた灰白色である。74~78は、体部下位が丸味をもち、口縁部は直線的に斜め方向に立ち上がり、口縁端部は外反ぎみに屈曲する。74・75は、外面に放射状の線刻文様がある。74~78では体部と底部がつながるものがないが、底部には細く高い直立ぎみの輪高台がつくと思われる。

施釉陶器(46・47)は、表面に鉄釉を施しており、他の土器と同様の時期と考えていいのか疑問



第43図 出土遺物実測図(2)

の残る資料である。63は、外反ぎみに立ち上がる頸部から口縁部は水平ぎみとなり、端部は丸味をもっておわる。64は、直立ぎみに立ち上がる頸部で、口縁端部は外方に肥厚して面をつくる。

S K 130は、土師器皿の特徴から11世紀後半の資料であるが、70・71のような12世紀初頭の楠葉形の瓦器椀なども含んでいる。磁器は白磁のみで、図示していないが白磁四耳壺の破片も含まれている。47・48の陶器は輸入陶器の可能性が高いが、時期を含めて検討を要する資料である。

S K 152出土遺物(80) 80は、平安京造営以前の烏丸綾小路遺跡に関わる遺物で、口径10.2cm・器高8.25cmの小形器台である。S K 152では図示していないが他に小形甕も出土している。

S E 148出土遺物(81~87) S E 148は前述のようにS K 146を切った井戸で、底部で井戸枠の一部を検出したのみであり、遺物も井戸枠内なのか掘形なのか、あるいは井戸の廃絶後に廃棄されたものなのか明らかではない。遺物はいずれもが細片で、土師器皿・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁などが出土した。

土師器皿には、伊野分類のBタイプのもの(81)と、Aタイプのもの(82)がある。82は、口径13.0cm・器高2.3cmで、口縁部外面にはナデ調整を行っており、12~13世紀初めのもので、81に比べて新しくなる可能性もある。灰釉陶器(83)は椀の底部片で、高台は貼り付け高台であり、山茶椀の範疇に含まれる。緑釉陶器(85)は須恵質で、釉調は濁緑色を呈し、底部の成形はケズリ出しによる平高台である。内底面には重ね焼きの痕跡があり、亀岡市篠前山窯産のものと思われる。白磁には、壺(84)と椀(86)がある。84は、ゆるく外反ぎみに立ち上がる頸部から口縁部が短く垂下し、四耳壺の口縁部片と思われる。釉調は、濁乳色で青磁に近い。86は、口縁部が大きく肥厚し、森田分類のIV類に属する。瓦器椀(87)は、口縁端部を丸く納め、口縁部内面に浅い沈線状の凹みが1条めぐる。体部内・外面には細かい暗文が施されている。

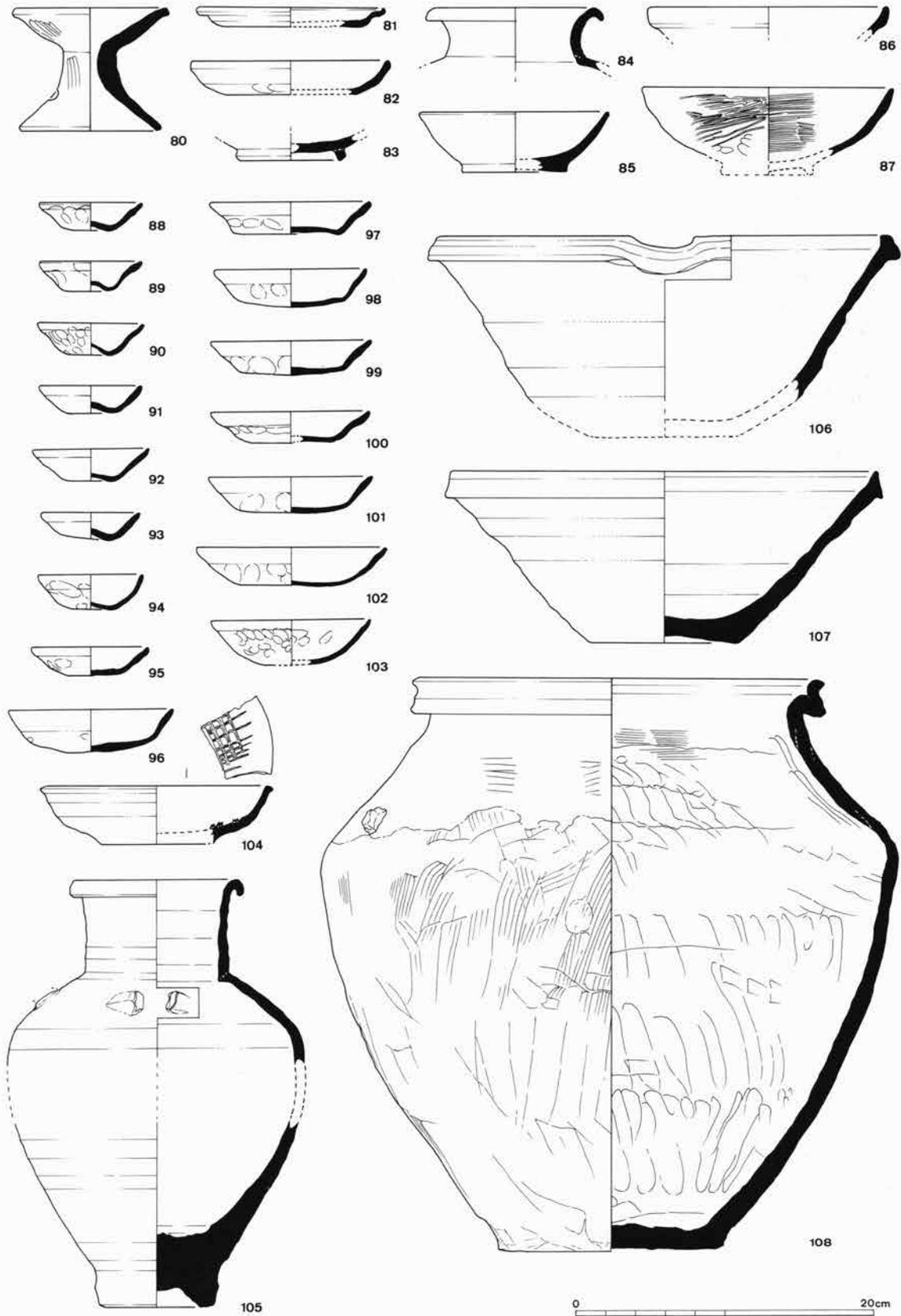
S E 148は、土師器皿(82)を除いて、11世紀から12世紀初めのもものが主体である。

S X 24出土遺物(88~108) S X 24からは、土師器皿・須恵器鉢・瀬戸卸目皿・常滑焼甕・白磁壺などが出土した。

土師器皿は、手づくねによるAタイプ(97~102)と深みで内型つくりと思われるGaタイプ(96・103)、底部が突出したいわゆるヘソ皿タイプのGbタイプのもの(88~95)がある。土師器皿Aタイプの口縁部外面はいずれも一段ナデ調整である。須恵器鉢(106・107)は、斜め上方に立ち上がる体部で、口縁端部は上・下方にとがりぎみに拡張しており、東播系片口鉢(森田 稔編年の第Ⅲ期・13世紀)^(注10)である。常滑焼甕(108)は、口径26.5cm・胴部最大径38.6cmを測る。口縁部は断面「N」字形を呈し、口縁部帯は幅2.6cmである。104は、古瀬戸の卸目皿である。白磁壺(105)は四耳壺で底部は重く、高台端部外面に幅広の面取りをもった白磁壺Ⅲ-3類に属する。

S X 24は、108の常滑焼甕が13世紀後半にさかのぼる可能性もあるが、土師器皿をみると14世紀の前半を中心とした時期が考えられる。

S K 15出土遺物(109~119) S K 15からは、土師器皿・緑釉陶器・瓦質羽釜・石鍋が出土した。土師器皿(109~113)は、口径8.4~9.2cm・器高1.0~1.85cmの小皿で、口縁部外面はいずれも一段ナデ調整である。緑釉陶器(114)は皿の底部片で、古い時期の遺物が混入したものである。瓦



第44図 出土遺物実測図(3)

質羽釜(115・116・118)は、口縁部が内湾ぎみとなり、口縁端部がわずかに内側に肥厚し、口径15cm以上のもの(115・118)と、11cm前後のもの(116)がある。117は、瓦質土器の底部片である。石鍋(119)は、口縁部直下に断面三角形に近い鏝をケズリ出している。なお、119には口縁部のほか、体部にも貫通する円穴があげられている。

S K 15は、土師器皿、瓦質土器の特徴から、12世紀末～13世紀前半の資料と考えられる。

S K 23出土遺物(120～125) S K 23からは土師器皿のみが出土している。土師器皿には、口径8cm前後・器高1.0～1.6cmの小型のものと、口径13.5cm前後・器高2.1～2.5cmの中型のものがある。いずれも口縁部は一段ナデ調整であり、S K 15に近接した時期の資料である。

S K 157出土遺物(126～137) S K 157からは、土師器皿・須恵器鉢・瓦質鍋・白磁などが出土している。土師器皿には、口径7.0～8.5cm・器高1.0～1.5cmのもの、口径11.0cm前後・器高2.8cm前後のもの、口径13cm以上のものがある。口縁部は、いずれも一段ナデ調整である。129は、口径4.2cmのコースター型の小皿である。須恵器鉢(137)は、東播系のこね鉢である。137は細片のため、口径は不明確であるが、口縁端部は直立ぎみに立ち上がる。須恵器碗(136)は口径18.0cmを測り、底部から斜め上方にやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや丸みをもって終わる。135は瓦質の鍋で、口径24.6cmを測る。130は、白磁壺Ⅲ-3類の底部片である。

S K 157は土師器皿、瓦質土器などから14世紀前半の資料と考えられる。

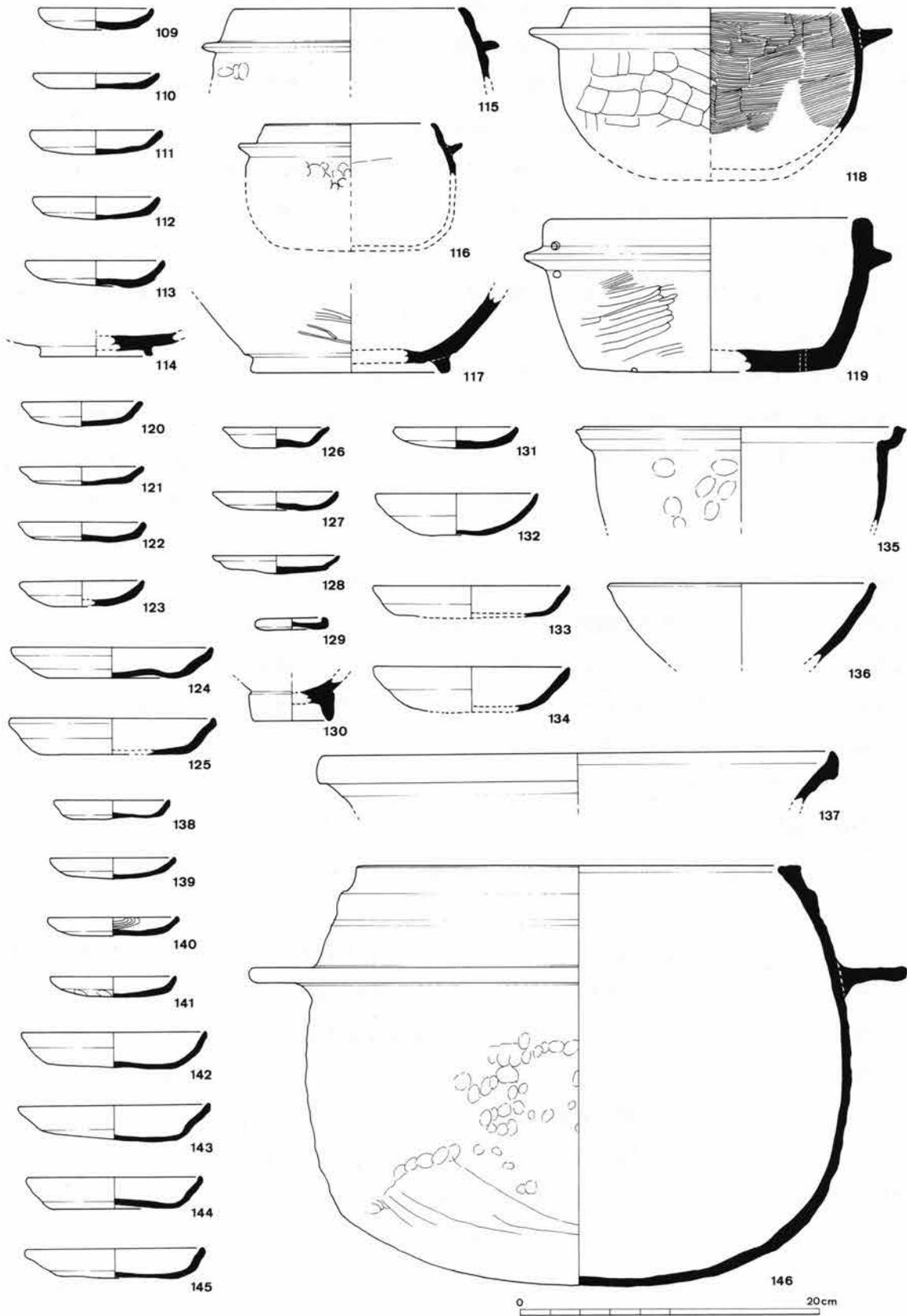
S K 75出土遺物(138～145) S K 75は、土師器皿のみを多量に廃棄した小土坑である。土師器皿には、口径8.0cm前後・器高1.5cm前後を測る小型のものと、口径12cm前後・器高2cm以上を測る中型のものがある。口縁端部はいずれも一段ナデ調整である。

S K 75は土師器皿の特徴から、13世紀前半のものと思われる。

S K 98出土遺物(146) S K 98では口径29.4cm・器高28.5cmを測る大型の瓦質釜(146)が出土した。146の口縁部は内傾ぎみに直線的に立ち上がり、外面には強いナデ調整による二段の窪みがある。口縁端部は内面にやや水平ぎみに肥厚する。鏝は4.5cmと幅広のものがめぐる。体部外面のヘラケズリの範囲が胴部下半にまで及んでいる。河内・和泉型のものと思われる。

土器溜まり2出土遺物(147～157) 土器溜まり2からは、土師器皿が多量に出土した。土師器皿には、口径11.0～13.0cmの中皿のものと、口径8.0～9.5cmの小皿がある。中皿には、手づくね成形のもの(147・148・151・152)と、やや深みで内型成形の可能性のあるもの(149・150)がある。小皿・中皿とも口縁部外面は一段ナデ調整である。157は、瓦質の鍋の口縁部片であり、口径32.0cmを測る。

S K 54出土遺物(159～187) 遺構内からは完形に近い土師器皿が多量に出土し、ほかには古瀬戸の皿が1点出土したのみである。土師器皿には、口径11cm前後・器高2～3cm前後の中皿と、口径7～8cm・器高1～2cm前後の小皿があり、中皿には手づくね成形によるAタイプのもの(165～167・171～176)と、内型成形のGタイプのもの(159～164・168～170)がある。小皿には手づくね成形で底部が突出しないもの(182～186)と、底部が突出するいわゆるヘソ皿(177～181)がある。古瀬戸皿(187)は、平底の底部から斜め上方に直線的にのびる体部へ続き、口縁端部は水



第45図 出土遺物実測図(4)

平方向にわずかに肥厚するもので、折縁深皿である。釉調は淡い緑色である。

S K 54は、土師器皿の特徴から、14世紀中頃から後半の資料と思われる。

S K 04出土遺物(188~210) S K 04では、土師器皿が細片も含めて多量に出土しており、何らかの祭祀の後に一括廃棄されような状態で土器が出土した。土師器皿のほかには、須恵器鉢1点・壺1点・古瀬戸の仏花具3点がある。土師器皿には、口径7.0~8.5cm・器高1.0~2.0cm前後のもの、口径9.0~10.0cm・器高2.0cm前後のもの、口径12.0cm前後・器高2.5~3.0cm前後のものがある。小皿には、底部が突出するヘソ皿と、突出しないものがある。須恵器鉢(196)は、口径26.0cm・推定器高11.3cmを測る東播産のこね鉢で、口縁端部は上・下方にわずかに肥厚する。壺(201)は、体部最大径が9.0cmを測る小型の瓶子である。古瀬戸には小型の花瓶(207)・香炉(208)・小皿(209)がある。

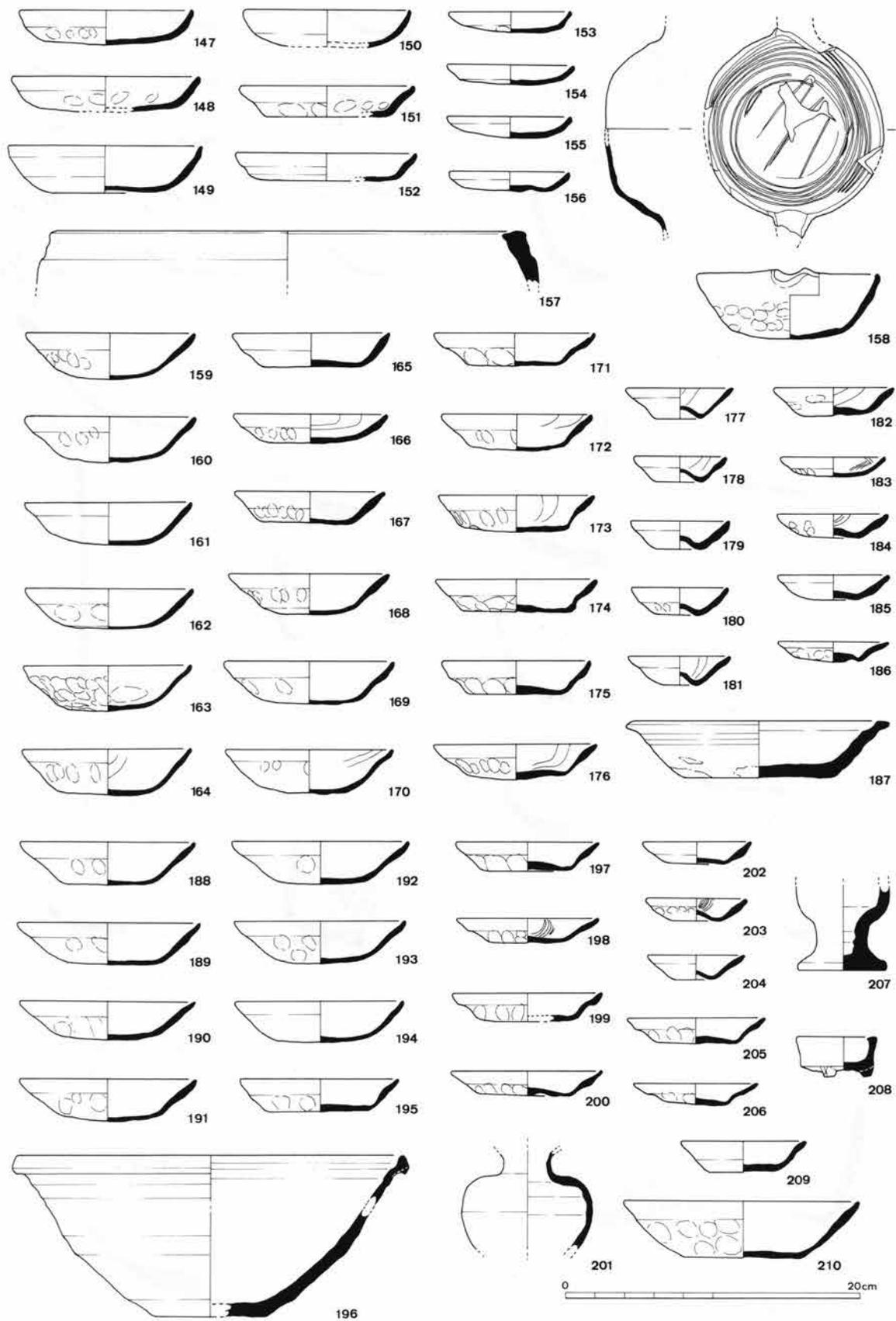
S K 04は、土師器皿の特徴から14世紀後半のものと思われる。

S K 03出土遺物(211~240) S K 03では、土器のほか漆器椀なども出土したが、漆製品はいずれも表面の皮膜のみであり、図示することはできなかった。土器には、土師器・陶器・磁器がある。土師器皿には、底部がそのまま内湾気味に立ち上がり、口径5.5cm前後・器高1.2cmを測るもの(231~233)、口縁部の立ち上がりが高く、口径7cm前後・器高1.6~1.8cmのもの(226~228)、口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口径10~11cm前後になるもの(222~225・230)がある。口縁端部は、いずれも一段ナデ調整である。口縁端部には一部煤が付着しているものがあり、燈明皿として使用されていたものもある。国産陶器には美濃の天目茶椀(217)、志野の向付(221)、黒織部の椀(239)、伊賀焼の椀(238)、備前焼の花入(240)、唐津の皿(237)などがあり、また中国産陶磁器には、椀(211・212)、皿(213~216)がある。S K 03出土の陶磁器の中には、茶器・花器などが比較的多く含まれていた。

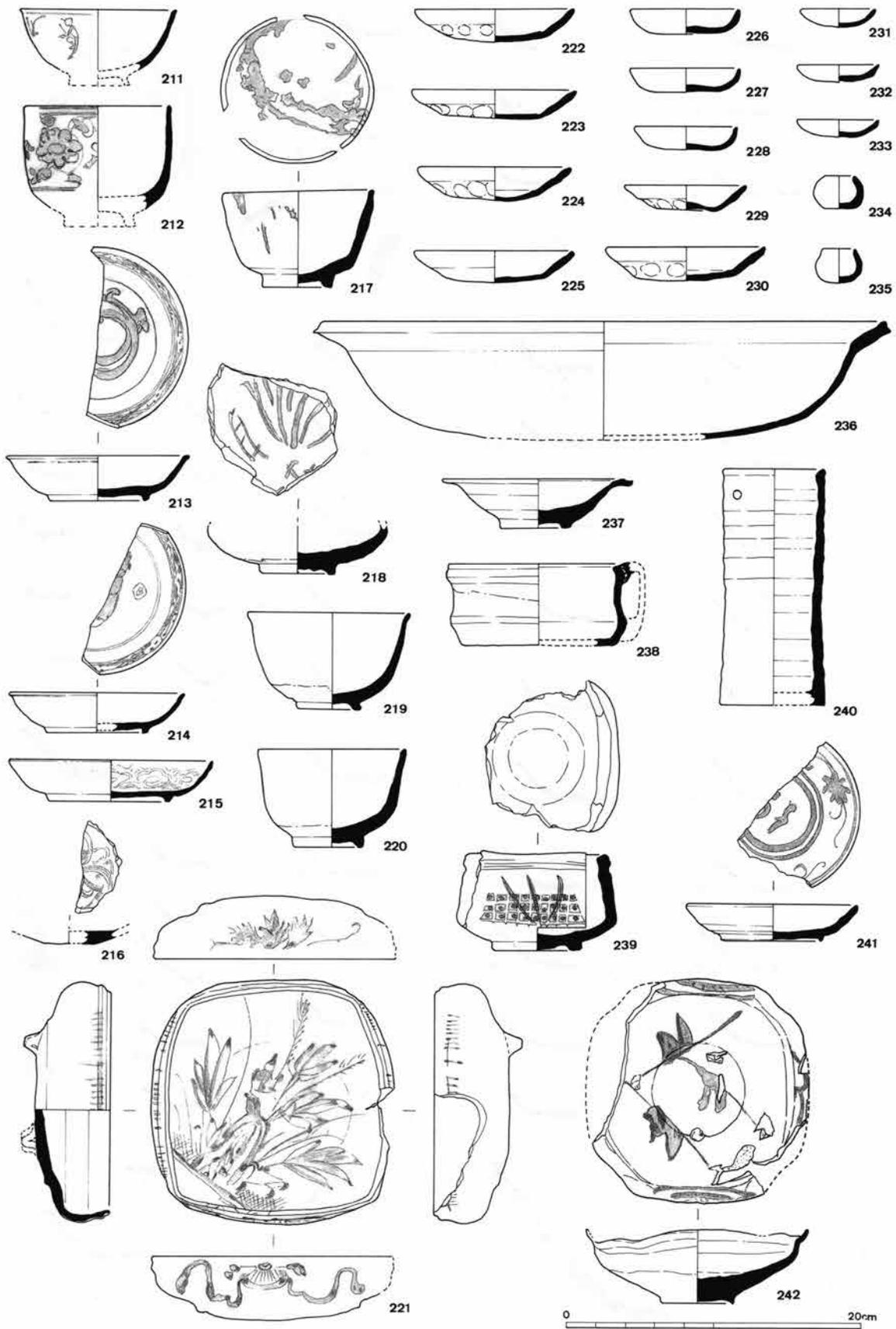
その他の遺物(241・242) 241は精査中に出土した美濃焼の絵皿、242は備前焼の向付けである。また、今回の概要報告では図示していないが、一部瓦や鉄あるいは青銅製の鍋の柄・燭台なども出土している。

以上のように、平安京跡左京五条三坊十一町の調査では整理箱にして270箱以上の遺物が出土し、その大半が土器であった。今回の報告では比較的一括性があると考えられる資料を提示した。

平安時代の遺物には、北あるいは東壁の一部で10世紀後半の遺物が含まれているが、明瞭な検出遺構から出土するものとしてはS D 143・S K 146・S K 130などから出土する11世紀の遺物であり、11世紀の中でも後半以降の資料である。S D 143・S K 146・S K 130は検出遺構で記述したように、S K 130に切られるかたちでS D 143・S K 146があり、S D 143とS K 146の切り合い関係は明らかではない。この三者の遺構の検出状況を表わすかのように、土器、特に土師器皿にその特徴がある。土師器皿では、「て」の字口縁の皿(伊野分類のBタイプ)でみると、S D 143・S K 146では口径10.0cm以上、器壁の厚さは0.3cmと薄い傾向にある。一方、S K 130では口径10.0cm以下で、器壁の厚さも0.4~0.5cmとやや厚くなり、口縁部の屈曲程度もやや鈍くなる傾向にある。S K 130からは土師器皿のほか、須恵器・白磁・中国製陶器などが比較的まとまって出



第46図 出土遺物実測図(5)



第47図 出土遺物実測図(6)

土しており、11世紀後半それも末葉に近い時期の一括資料と思われる。白磁碗は、前述したように、森田分類のⅡ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類が白磁小皿とともに一括出土しており、この時期の白磁の資料としては良好なものと思われる。また、中国製陶器(46・47)は細片資料であるが、この時期の平安京の交易の広さをうかがわせる資料である。12・13世紀の土器資料には、土師器皿の一括廃棄(S K 75など)があるが、土師器皿以外の良好な資料は比較的少なくなる。一方、14世紀それも後半以降から15世紀のものではS K 24・S K 54・S K 04などから一括資料が出土しており、資料は豊富である。特に、S K 24では土師器皿のほか、白磁四耳壺・東播系須恵器こね鉢・古瀬戸の卸目皿、S K 54・S K 04の古瀬戸の仏花器などが良好な資料と思われる。16世紀の資料については、今回一括資料は提示できなかった。17世紀、特に前半の資料としてはS K 03の一括資料がある。S K 03では中国製陶磁器のほか、織部焼・志野焼・備前焼などの国産陶器があり、器種も茶器・花器など豊富な趣味のもので、この地の住人を考える上での良好な資料である。

4. ま と め

今回の調査では、この地における土地利用の変遷について、わずかながらもその一端を知りうる資料が得られたと考える。ここでは前述した調査の概要から推定されること、考えられることを簡単に整理しておきたい。

まず、少量とはいえ弥生土器が出土したことや、S K 152を検出したことから、これまでに周辺の調査でも明らかにされているように、人間の生活の痕跡が確認できるのは弥生時代からである。今回は、古墳時代、飛鳥・奈良時代の遺物や遺構は検出されなかったが、周辺の調査例などから弥生時代以降、平安時代にかけても連綿とした営みが続いていたものと推定される。

次に、平安時代の四行八門制の区画であるが、S D 143は、10世紀後半頃の遺構と推定される。前述したように、この溝の中心座標と北六門と七門を区画する推定ラインとは約0.2mのズレがあるが、ほぼ区画推定ラインと平行すると思われる。ところが、今回の調査では、同時代に比定される北五門と六門を画する遺構を見いだしていないことから、仮にこの溝が北六門と七門の宅地を区画する溝であったとするなら、平安時代中頃には北五門と六門にまたがる三十二分の二以上の区画を持った宅地がこの地にあったことになる。このような変則的な宅地区画を想定することが妥当であるのか、この後さらに検討を要することであるが、その後S K 146及びS K 130がこの溝を切るかたちで掘り込まれていたことから、この溝は11世紀前半には機能していないようである。このことから、この地では11世紀にはさらに広い範囲(三十二等分の三以上)の区画を持った宅地があったと考えることができる。S K 130は、11世紀後半から12世紀初頭にかけての遺構であるが、比較的多くの白磁などが出土していることから、この宅地に関わる遺構かもしれない。

さて今、平安時代には北五門と六門を区画する施設はなかったと述べたが、鎌倉時代にはいるとS A 47が造られる。この柵列は、その座標値から、北五門と六門を区画すると推定されているライン上にあり、さらにこの施設はその後、室町時代にかけて何度か建て替えられていると思わ

れる。この柵列がどのような意図で造られたのかは不明であるが、このことは、平安時代の四行八門による区画の意識が、鎌倉時代以降にまで引き継がれていたことを示すといえよう。

歴史的環境の項でも述べたように、室町時代の「酒屋名簿」を記載した『北野天満宮文書』によれば、15世紀初め頃のこの地付近には、「越後」という酒屋があったことが記されている。多くの土器が出土したS K54やS K04は、この酒屋に関わる遺構であると考えられる。また、S X24はこれらの遺構よりも若干古い、屋敷内の墓であると考えており、同様に酒屋の遺構かもしれない。

S X39とS X45は、一辺が3 m以上と推定される方形に連なる一連の遺構と考えている。一般の家屋に付随する遺構とは考えにくく、またS X45の延長線上の南壁からは塙が出土したことから、16世紀の「本覚寺」の遺構と推定される。

以上、文献史料などとの関連で、大雑把ではあるが意義づけられること、考えられることをまとめてみた。これらの他にもS K74・S K98・S K102・S K03など、この地における生活の痕跡として興味深い遺構も多いが、それらの性格や意味あいなどは現時点では不明である。今後の平安京、当地周辺での調査成果の蓄積により解明されることを待ちたい。

(竹下士郎・石井清司)

注1 主な調査・整理作業参加補助員、整理員(順不同・敬称略)

上田 勉・白河豊基・尾田洋子・伊達優子・小島浩之・山田恵子・矢野正隆・中村美也・荻野富紗子・高橋文子・関野雅子・西村美智子・安田裕貴子

注2 例えば、本調査地の北150mの烏丸通綾小路下ル西側の「No.80トレンチ」(『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981)では、弥生時代末期の竪穴式住居跡や古墳時代の溝が検出されている。

注3 「平安京左京五条三坊十五町の発掘調査」(『平安京跡調査報告』第5輯 (財)古代学協会) 1981

注4 前掲注3に同じ。

注5 滋賀県立琵琶湖博物館理学博士 中島経夫氏の鑑定により、「ギンプナ」と判明した。

注6 伊野近富「土師器皿」(『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会) 1995、228頁

注7 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978

注8 片桐孝浩「中小河川大東川改修工事(浄ノ郷橋～弘光橋間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(『川津元結木遺跡』 香川県教育委員会) 1992、この報告書の編年案によると、11世紀中頃が想定できる。

注9 前掲注7に同じ。

注10 森田 稔「中世須恵器」(『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会) 1995

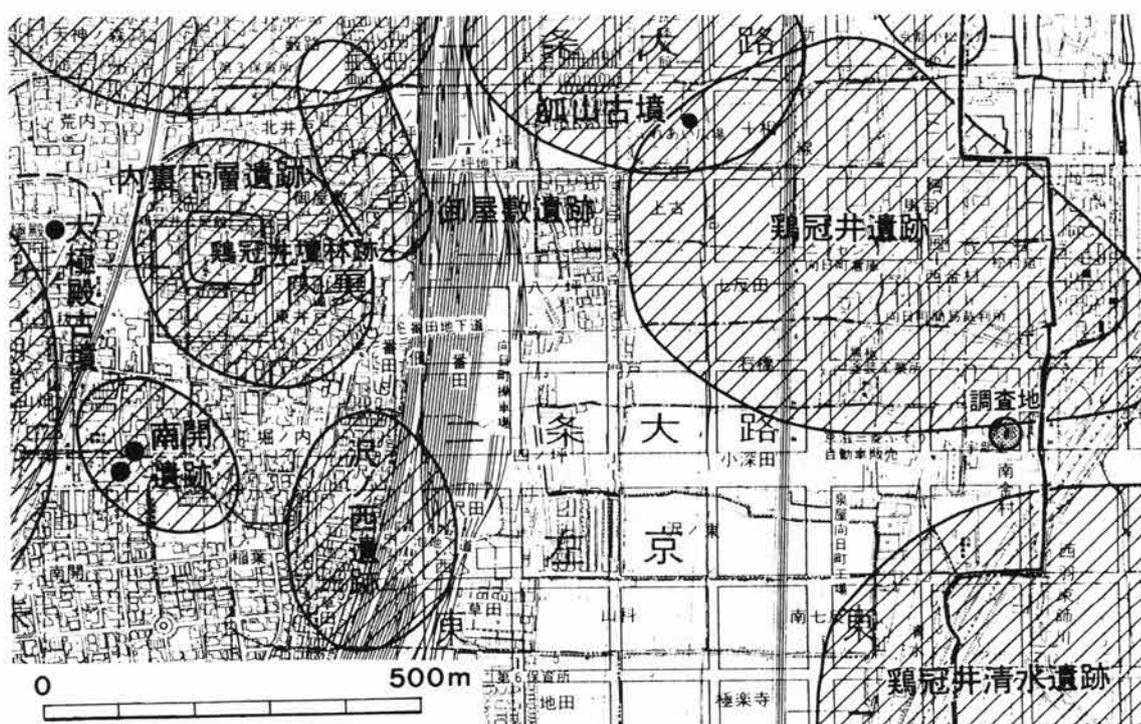
5. 長岡京跡左京第400次(7ANEMR-4地区)・ 鶏冠井清水遺跡発掘調査概要

1. はじめに

長岡京跡左京第400次調査地は、向日市鶏冠井町南金村11の5に所在し、新条坊で長岡京跡左京二条三坊五町(旧条坊では長岡京跡左京二条三坊七町)に相当する。長岡京の造営以前の遺跡としては、弥生時代の集落遺跡である鶏冠井清水遺跡にあたる。

長岡京跡左京二条三坊五町域周辺での発掘調査成果を概略すると、同三・四町域では二条条間小路の南北両側溝、東二坊大路の東側溝と宅地内区画溝・柵列、及び一部掘立柱建物跡を検出しており、三町域が一町全域を利用した車持氏の邸宅跡と推定されている^(注1)。また、四町域では宅地内の区画溝を検出している^(注2)。今回の調査地の五町域でも、一町を四分割した場合の南西区で、2間×5間で東側に1間分の廂をもった南北棟の建物跡(左京第172次)を検出している。この地では、この建物跡を中心に一町全域を利用した邸宅跡も考えられており、今回はその関連の建物跡が検出される可能性も考えられた。また、今回の調査地は、新条坊復原では左京東三坊坊間小路にあたり、これまで未検出である東三坊坊間小路の路面跡を検出する目的で発掘調査を実施した。

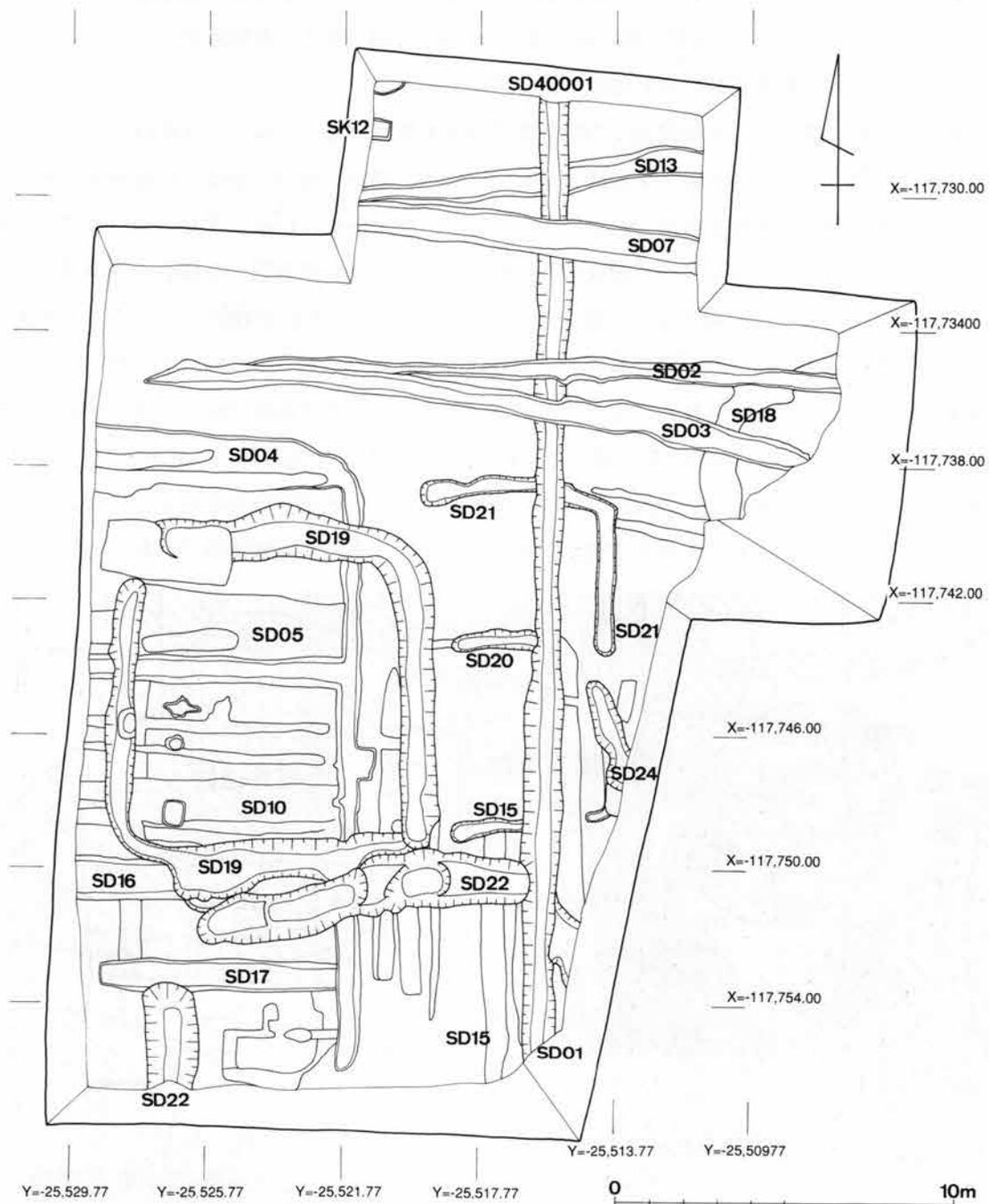
長岡京造営以前の遺跡では、当該地は鶏冠井遺跡と鶏冠井清水遺跡の中間地点に位置している。鶏冠井清水遺跡は、弥生時代の集落遺跡が主体であるが^(注4)、一方の鶏冠井遺跡では新幹線建設に伴



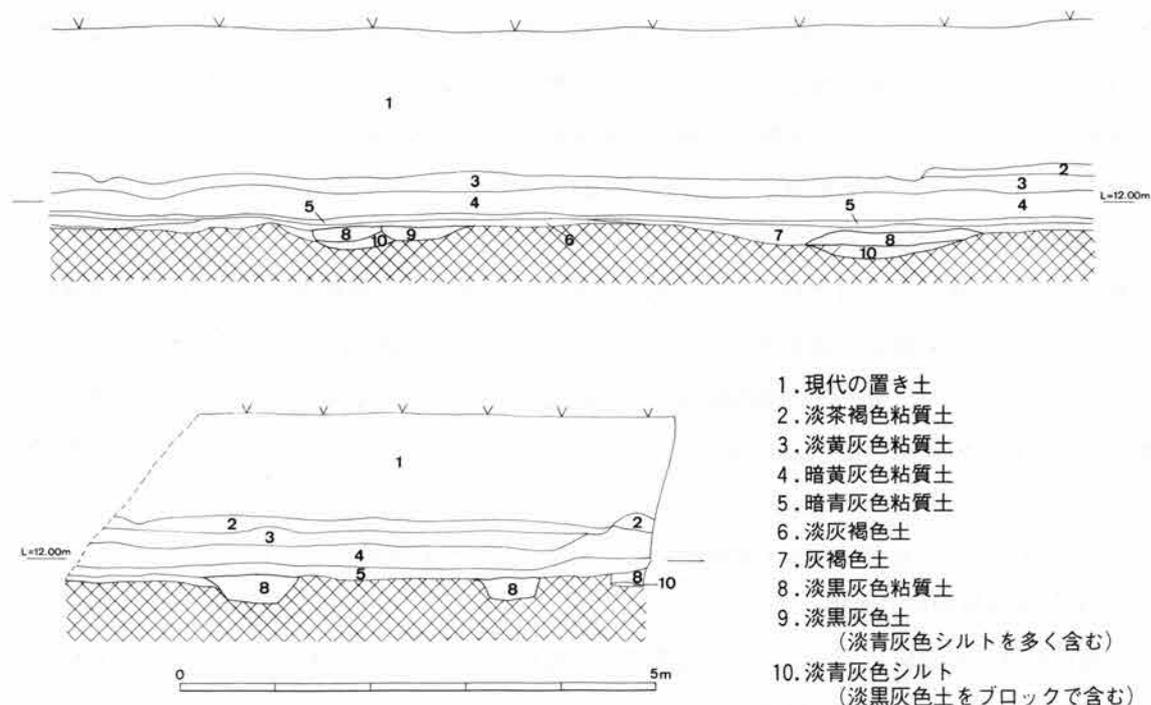
第48図 調査地位置図(『向日市遺跡地図』より)

う第1次調査以降、弥生時代中期初頭の銅鐸鑄型とともに、この周辺で方形周溝墓も検出されて^(注5)いる。そのため、今回の報告では鶏冠井清水遺跡として報告するが、今後の調査成果によっては鶏冠井遺跡の南端に位置付けられる遺跡でもある。

なお、今回の調査は、京都府土木建築部の依頼を受け、桂川右岸流域水道乙訓ポンプ場の建設工事に先だって実施した。調査面積は約630㎡で、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美・同主任調査員石井清司が担当し、多くの調査補助員・整理員の協力^(注6)をえた。写真は遺構を石井が、遺物を調査第1課主任調査員田中 彰が担当し、本概要の執筆は石井が行った。



第49図 遺構配置図



第50図 北壁・東壁土層断面図

なお、調査に係わる経費は、京都府土木建築部が負担した。

2. 調査の経過

調査対象地はポンプ施設部分で、ここにトレンチを設定した。調査前には鉄筋を含むコンクリートが厚さ30cm以上にわたって敷き詰められており、検出遺構面まで厚さ1mにわたって現代の置き土が堆積していることから、表土下約1mを重機掘削し、中世の包含層である淡灰褐色土から人力によって掘削した。推定東三坊坊間小路の検出のため、重機掘削ではトレンチの東側部分を中心に作業を進めたが、調査前の施設であるコンクリートサイロによって地表下約2mまで掘削されていたため、小路の東側溝を含む東半部については調査を断念した。しかし、一方の小路の西側溝は、調査が進むにつれて明瞭に検出できたため、トレンチを北側に一部拡張して西側溝の検出に努めた。そこで、小路に伴う側溝を検出したが、左京二条三坊五町域では一部の土坑を検出したのみで、明瞭な宅地利用の様相は明らかとはならなかった。中世及び長岡京期の遺構図化の後、下層の鶏冠井清水遺跡に関連した遺構の検出に努めたところ、竪穴式住居跡などの集落に関連した遺構は検出できなかったが、溝で区画された方形周溝墓4基を検出した。

調査は、平成9年5月1日から同年8月1日までの約3か月を要した。

3. 検出遺構

(1) 中世

今回の調査では表土下約1mで、中世の溝群を検出しており、それ以降の新しい時期の遺構・遺物は現代の造成によって削られていた。中世の溝群は東西方向のものが多く、ほぼ磁北にのる

もの(S D02・05・10・16・17)と、磁北とはやや方向を異にするもの(S D03・07)がある。また、S D05・10・17などと取り囲むように「コ」の字形にめぐるS D04があり、S D04が中世における畑地の区画の一部であった可能性が高い。各溝からは土師器皿の細片が出土したほか、S D02の埋土内から図示した12世紀前半の瓦器椀(第52図11)が出土している。

(2)長岡京期

長岡京期の遺構としては当初の予想どおり、東三坊坊間小路の西側溝(S D40001)と路面跡を検出した。ただ、東側溝は調査地の東側で大きな攪乱によって削られている可能性が高く、検出にはいたらなかった。東三坊坊間西側溝は、上面幅約1.0m・深さ約0.3m以上を測り、調査地全域の約28.4m分を検出した(北端の座標：X=-117,727.000・Y=-25,515.651、南端の座標：X=-117,755.400・Y=-25,515.970)。

なお、五町域の宅地利用を示す建物跡などの遺構は、今回の調査地では検出できなかった。

(3)長岡京造営以前の遺構

長岡京期以前の遺構としては、方形周溝墓を4基検出した。ただ、各方形周溝墓の埋葬施設は、長岡京期以降に削られており検出できなかった。

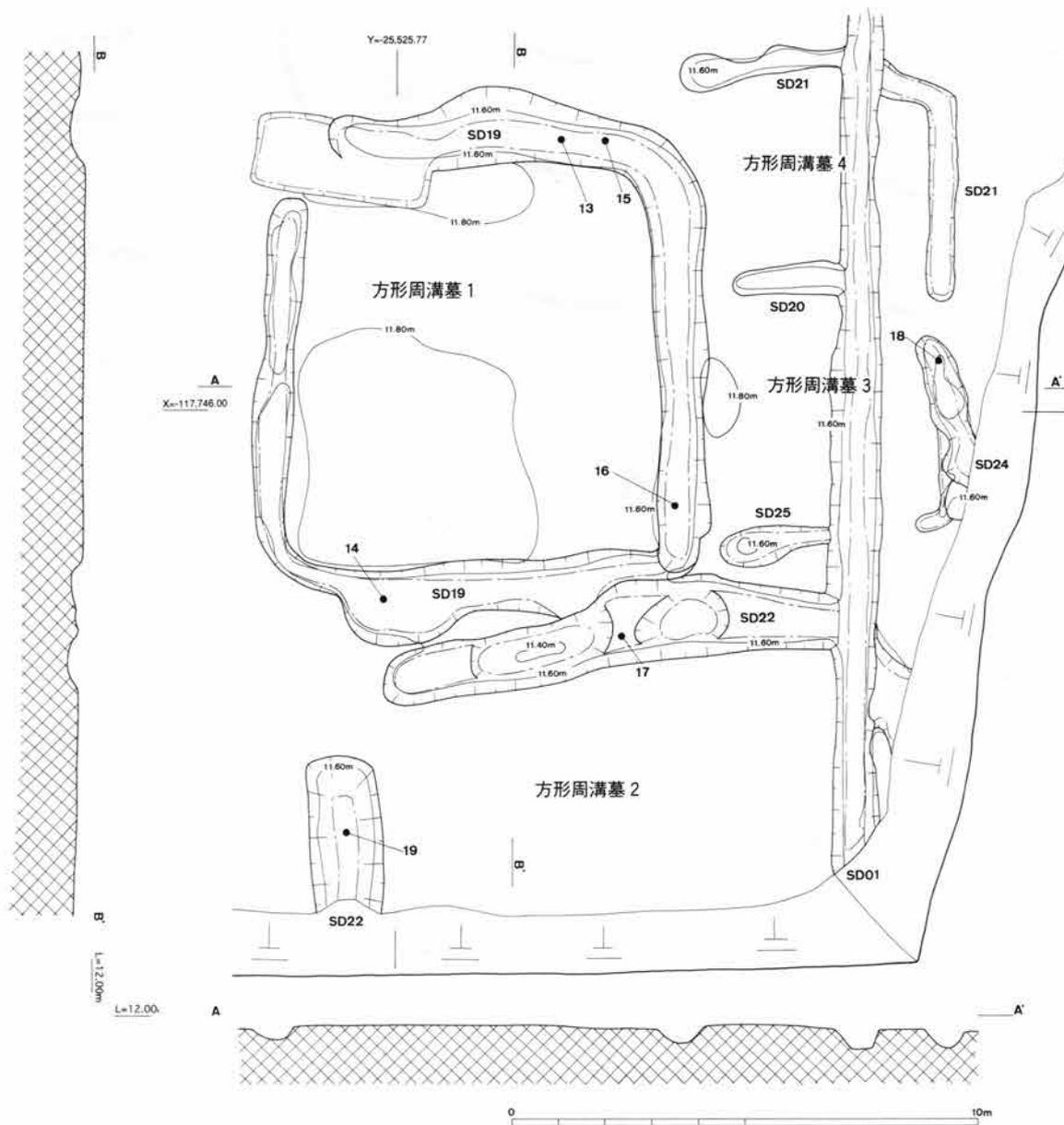
方形周溝墓1(S D19)は、東西約8.5m・南北約10.0m(いずれも溝の心々距離で測る)を測り、方形周溝墓に伴う溝(S D19)は、上面幅0.6~1.6m・深さ0.1~0.3mを測る。溝の各辺、特にコーナーに近い部分から第Ⅱ様式の壺が6個体以上出土しており、その多くが完形近くに復原できた。なお、S D19の南西コーナー付近から出土した壺14は、その出土状況(図版第45-(2))から、溝内埋葬の可能性も考えられる。溝の北西コーナー部分は掘り残されている。

方形周溝墓2は、トレンチの南端で一部を検出した。方形周溝墓2に伴う溝(S D22)は、西辺溝の遺存状況がよく、上面幅約1.6m・深さ約0.7mを測り、その埋土は3層に分かれている。方形周溝墓1と方形周溝墓2は、S D19の北辺溝とS D22の南辺溝で重複関係があり、その断面観察から方形周溝墓2を切って方形周溝墓1が造られていることが明らかとなった。なお、方形周溝墓2の東辺溝はS D40001によって削られていること、南辺溝が調査範囲外であるため、その規模は推定の域をでないが12.5m程度と思われる。方形周溝墓2も北西コーナー部分が掘り残されている。

方形周溝墓3は、西辺溝が方形周溝墓1の東辺溝と共有する形であり、その規模は一辺約5.5mを測る。方形周溝墓3に伴う溝(S D20・24・25)は上面幅0.35~0.85m・深さ0.2~0.4mを測り、各コーナー部分は掘り残されている。

方形周溝墓4は、方形周溝墓3と同様、方形周溝墓1の東辺溝と共有し、南辺溝は方形周溝墓3の北辺溝と共有しており、その規模は一辺約4m前後を測る。

各方形周溝墓からは、弥生時代第Ⅱ様式の時期の土器(器種は主に壺)が出土している。造営の前後関係については、推定の域をでないが、方形周溝墓2の北辺溝が方形周溝墓1の南辺溝に切られていること、方形周溝墓1の東溝を利用して方形周溝墓3があること、方形周溝墓4も方形周溝墓1の東溝を利用し、さらに方形周溝墓3の北溝を利用していることから、方形周溝墓2→



第51図 方形周溝墓遺構図

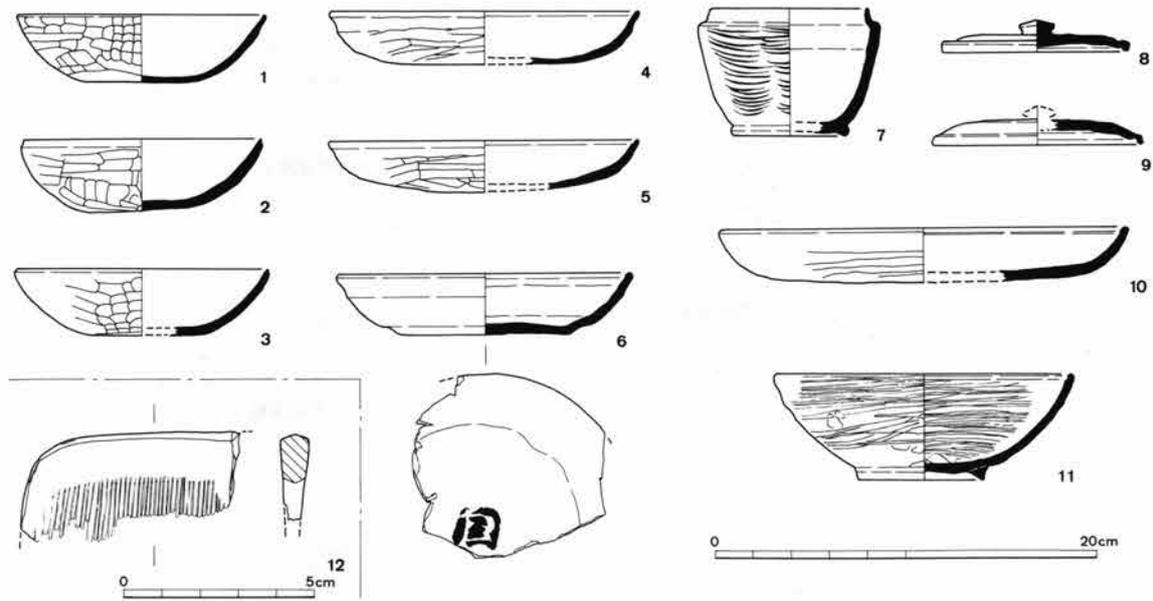
方形周溝墓 1 → 方形周溝墓 3 → 方形周溝墓 4 へと造営されたと思われる。

4. 出土遺物

今回の調査では整理箱にして10箱程度の遺物が出土した。その大半は細片化しており、主として中世及び長岡京期の土器が多い。

(1) 中世

遺構で記したように、各溝群からは土師器皿の細片が出土したが、その大半が図示できないほどの資料であり、唯一図示しえたのはSD02出土の瓦器椀(11)である。11は、口径15.5cm・器高5.7cmを測り、断面三角形の明瞭な高台を貼り付けている。口縁部は外反することなく、丸く納め内面には1条の沈線がめぐり、体部内面は圏線のヘラミガキを隙間なく施し、外面には分割へ



第52図 出土遺物実測図(1)

ラミガキを比較的密に施している。12世紀前半のものと思われる。

(2)長岡京期

長岡京期の遺物は、その一部が中世の包含層から出土したものを含むが、大半は東三坊坊間小路西側溝(S D40001)から出土した。S D40001出土遺物には、土師器碗・皿・壺、須恵器杯蓋などの土器類のほか、横櫛・銅銭(万年通寶・神功開寶)・獣骨(馬か?)なども点数は少ないが出土した。

土師器碗(1～3)は、口径12.4～15.2cm・器高3.4～3.9cmを測り、口縁端部は丸みをもって終わる。外面にははいねいな横方向のヘラ削り調整を施す。

土師器皿(4～6・10)は、口径16cm前後を測るもの(4～6)と口径20cm以上を測るもの(10)がある。口縁部は丸みをもっておわり、端部がやや外反ぎみとなるもの(4・5)と、やや内湾ぎみとなるもの(6・10)があり、後者の口縁部内面には沈線がめぐる。4・5・10は、外面にヘラ削り調整を残すが、6はヘラ削りの後ナデ調整を加えている。なお、6の外底面には「国」が墨書されている。

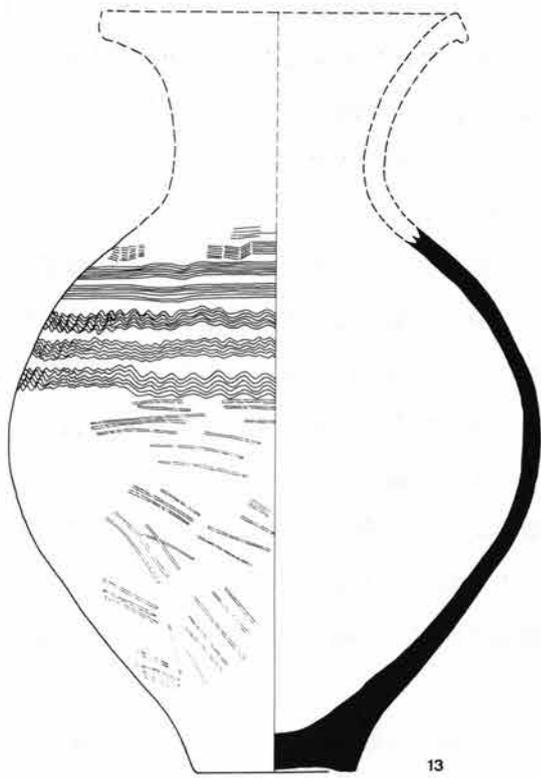
土師器壺(7)は、肩部を形成した体部で、口縁部は内湾したのち直立ぎみに短く立ち上がる口縁部へ続く壺Eである。体部外面には、分割ヘラミガキ調整が施されている。

須恵器杯蓋(8・9)は、口径10cm前後の小型のもので、口縁端部は内側に折り込むように丸みをもっておわる。天井部はヘラ削り調整で、偏平な宝珠形ツマミを貼り付けている。

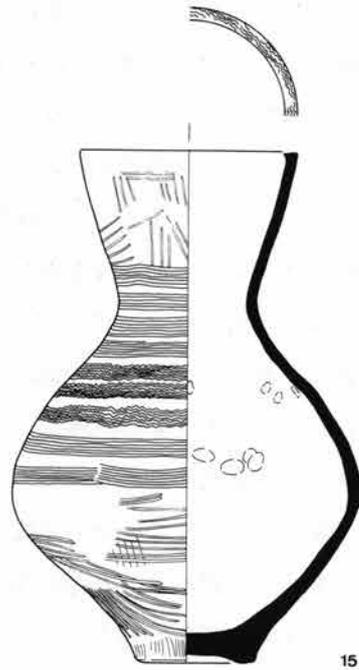
横櫛(12)は、現存長3.0cm・幅6.1cm・厚さ0.8cmを測り、挽き出し線は櫛の上縁に平行し、肩部もその丸みに沿って平行している。

(3)長岡京造営以前の遺物

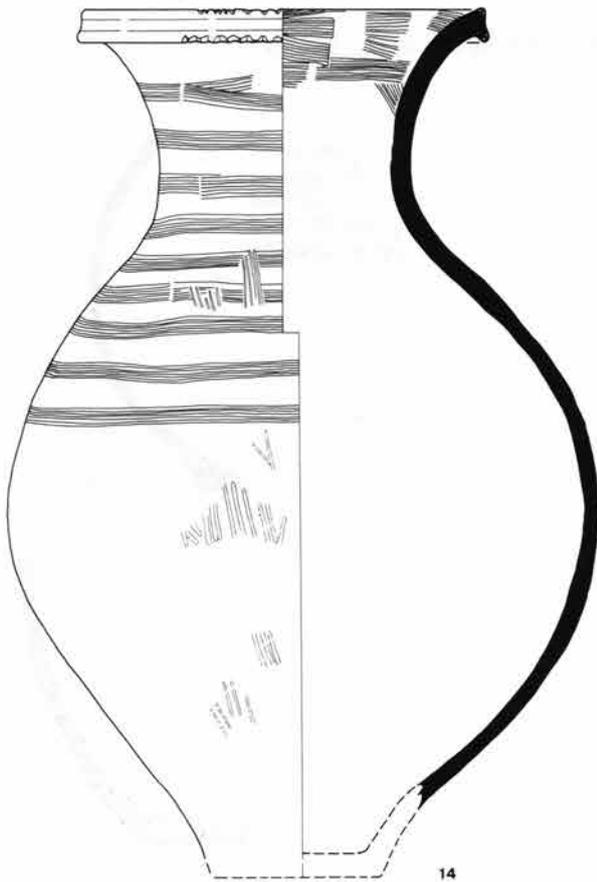
各方形周溝墓の溝内から、比較的完形に復原できる状況で土器が出土した。13～16は方形周溝墓1の、17・19は方形周溝墓2の、18は方形周溝墓3の各周溝内からそれぞれ出土した。



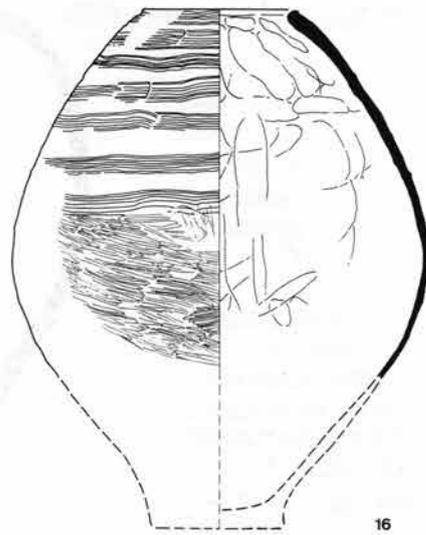
13



15



14



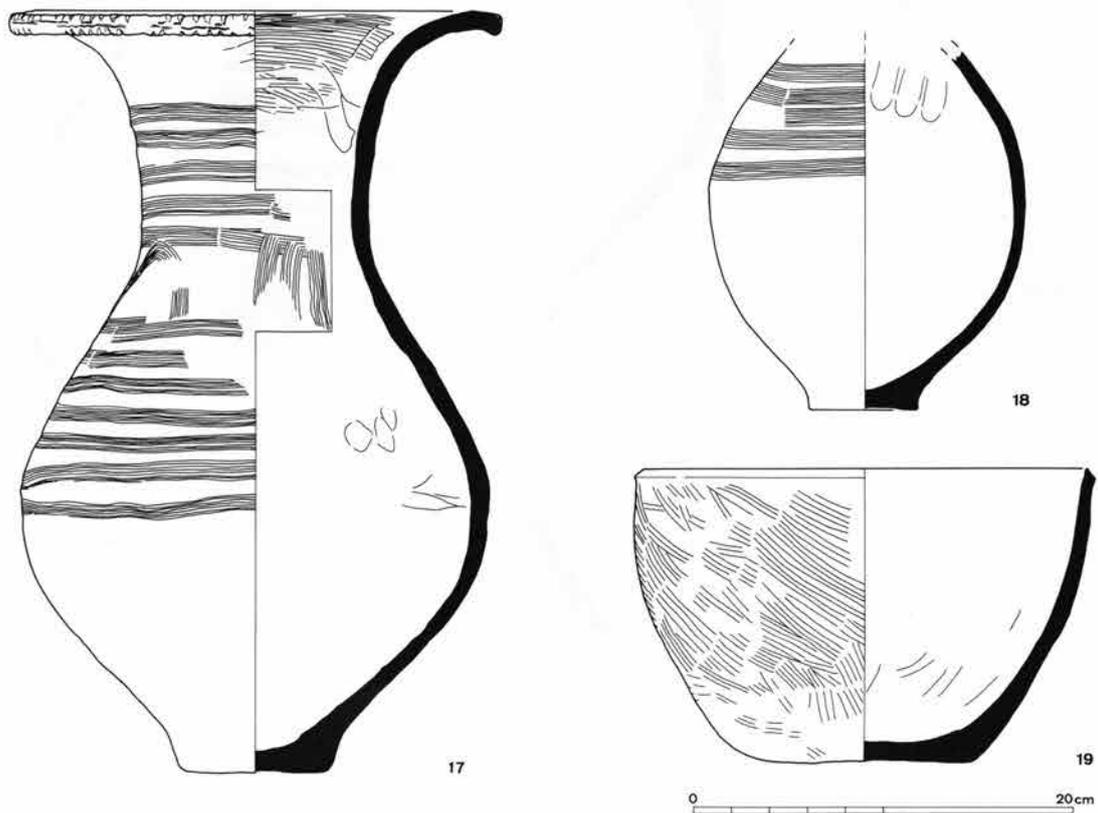
16

0 20cm

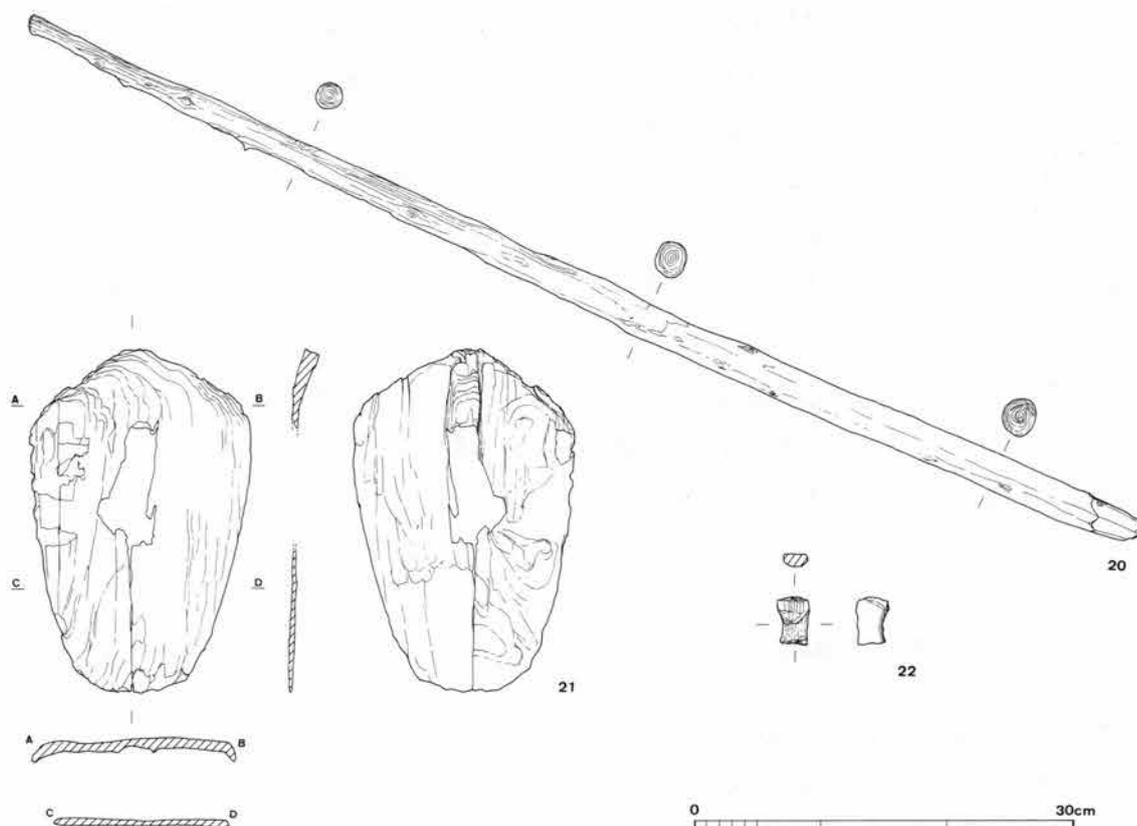
第53図 出土遺物実測図(2)

方形周溝墓1出土の土器 壺13は、15と近接した位置で北辺溝から出土した広口壺である。頸部及び口縁部は欠損しており、体部のみが遺存している。体部最大径は中位にあり、27.8cmを測る。体部外面には3条の櫛描き波状文と3条の櫛描き直線文を加飾している。体部外面には一部ヘラミガキ調整が認められる。壺14は、南西コーナー付近で溝内埋葬であるかのような状態で出土した広口壺である。体部は卵形を呈し、体部最大径が中位にあり、30.8cmを測る。口頸部は、外反ぎみに立ち上がる頸部から口縁部へ続き、口縁端部は下方にわずかに肥厚する。口縁端部にはヘラ状工具によって刻み目を施している。体部及び頸部外面には9条の櫛描き直線文を加飾している。体部外面には、一部ヘラミガキ調整が認められる。壺15は、壺13に近接した位置で出土した細頸壺である。体部はやや偏球形を呈し、口頸部は外反ぎみに細く立ち上がる。体部及び頸部外面には、下から2条の直線文・3条の波状文・4条の直線文を櫛描きしている。また、口唇部にも櫛描き波状文を加飾している。16は、東辺溝で出土した無頸壺である。体部下半は欠損しており、推定の域をでないが、平底の底部がつくと思われる。体部は内湾ぎみに立ち上がり、端部は丸みをもって終わる。体部対面には、7条の櫛描き直線文を施している。体部外面には、いねいなヘラミガキ調整が施されている。

方形周溝墓2出土の土器 17は、北辺溝の中央で木製楯に近接して出土した広口壺である。体部は卵形を呈し、体部最大径が中央にあり、24.7cmを測る。口頸部は、やや長く立ち上がる頸部から強く外反ぎみに立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部はわずかに下方に肥厚して面をつくる。口縁端部には、上下2条のヘラ状工具による刻み目を施している。頸部及び体部外面には、下か



第54図 出土遺物実測図(3)



第55図 出土遺物実測図(4)

ら7条の直線文・おおぶりの波状文・5条の直線文を櫛描きしている。19は、底部が広く体部が直線的に立ち上がる深い形態の鉢で、口縁端部を内側にわずかにつまみあげている。体部外面には、粗い櫛状工具によって斜め方向にハケ調整されている。

方形周溝墓3出土の土器 18は、東辺溝(S D24)の北端で出土した。口頸部が欠損しているが、広口壺と思われる。体部はやや長胴ぎみで、外面には5条の櫛描き直線文を施す。

方形周溝墓2出土の木器 方形周溝墓2の北辺溝中央からは、鋏が1点出土した。鋏は、柄の部分と本体部分に分かれ、柄は長さ0.97mで、自然の丸木を一部加工している。鋏本体は腐植して楕円形に遺存しており、その厚みも125mmとわずかに残す程度であった。柄と本体の接合に使用したと思われる厚さ2.6cm・長さ3.6cmで中央に抉りを入れた木片が本体と柄の接合部分から出土した。

5. ま と め

今回の調査では左京二条三坊五町域での宅地利用を検討する上での明瞭な遺構は検出できなかったが、これまで検出例がなかった東三坊坊間小路の西側溝(検出長約28.4m)を検出したことは、長岡京の条坊復原の定点となると考えられる。東三坊坊間小路の西側溝からはわずかながらも土器が出土している。また、長岡京の廃絶以後の明確な遺構・遺物は検出できなかったが、溝群の検出とそこに含まれていた瓦器碗の特徴から、12世紀まではこの地が畑地として利用されていたことがうかがえる。

長岡京造営以前の鶏冠井清水遺跡の関連遺構としては、方形周溝墓4基を検出した。各方形周溝墓は、長岡京期の検出面とほぼ同じレベルにあり、弥生時代の遺構の大半は長岡京期に削られ、深く掘り込まれた溝のみが遺存するにすぎなかった。そのため、その埋葬施設については検出することはできなかった。方形周溝墓は、一辺約12.5mの方形周溝墓2から一辺約4.0mの方形周溝墓4まであり、その造営順序は方形周溝墓2→方形周溝墓1→方形周溝墓3→方形周溝墓4へと築かれたことが想像できる。ただ、各溝から出土した土器をみるかぎり大きな特徴変化がないため、弥生時代第Ⅱ様式の中の短い期間に墓域として利用されたことがうかがえる。また、調査の経過で記したように、今回は鶏冠井清水遺跡として調査したが、調査地が鶏冠井清水遺跡と鶏冠井遺跡の中間点にあたり、弥生時代中期前半の方形周溝墓の検出と周辺の調査成果から、鶏冠井遺跡の南端と位置づけた方がより理解しやすいと思われる。^(注7)

(石井清司)

- 注1 清水みき「墨書土器の機能について」(『向日市文化資料館研究紀要』第2号 向日市文化資料館) 1987
- 注2 國下多美樹「長岡京跡左京第248次(7ANEIS-3地区)～左京二条三坊三・四町(二条三坊一・二町)・東二坊大路・二条条間南小路(二条第一小路)交差点、鶏冠井遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化調査報告書』第37集 向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター) 1993
- 注3 秋山浩三「長岡京跡左京第172次(7ANEKD-2地区)～左京二条三坊七町、鶏冠井遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集 向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター) 1989
- 注4 鶏冠井清水遺跡での既往の調査成果については、秋山浩三「長岡京跡左京第221次(7ANFSK-2地区)～左京三条三坊四町(三条三坊二町)・東二坊大路、鶏冠井清水遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第41集 向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター 1997)で詳述されている。
- 注5 國下多美樹・山中 章ほか「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第2次～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集 向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター) 1983、ほか。
- 注6 主な調査参加者
中村美也・山田恵子・山本法崇・吉田桂子・尾上 忍・西川真介・高橋文子・関野雅子・陸田初代・田中美恵子
- 注7 (財)向日市埋蔵文化財センター國下多美樹氏の御指摘・御教示に負うところが多い。

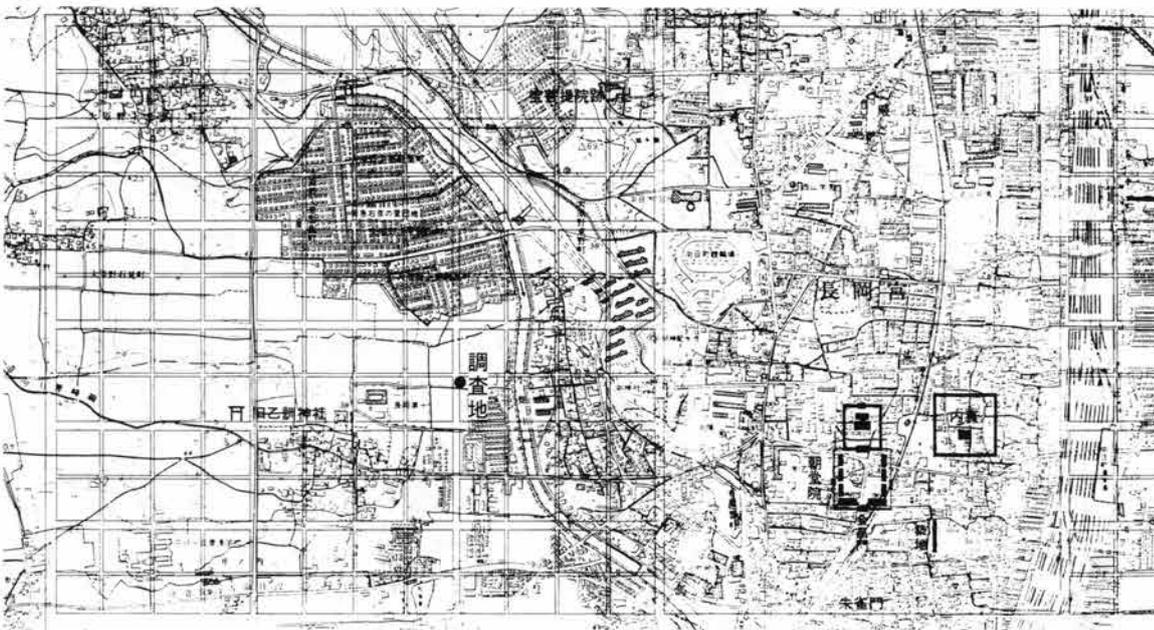
6. 長岡京跡右京第584次発掘調査概要(7ANGND-1地区)

1. はじめに

今回の調査は、外環状線広域幹線アクセス街路整備事業に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。今回の調査地は、長岡京市井ノ内的田21に所在し、長岡京跡の条坊推定地では、西二坊大路と二条条間第一小路(新呼称：二条条間北小路)の交差点南方の、西二坊大路部分に当たる。過去における周辺地域の調査では、南方で西二坊大路東側溝や路面の轍などが検出され、また今回の調査地と同じ段丘上(現在の長岡第十小学校グラウンド)では、長岡京期の大規模な掘立柱建物跡が検出されている。また、縄文～中世に集落が営まれていた上里遺跡でもある。周辺の遺跡には、旧石器時代のナイフ型石器が見つかった頭本遺跡、前方後円墳の下東ノ口古墳、親王御塚古墳、鎌倉～室町時代の堀跡・土塁跡が見つかった井ノ内館跡などがある。調査は、平成9年12月1日に開始し、平成10年1月27日に現地調査を終了し、同29日に埋め戻し作業を終了した。調査面積は、約350m²である。現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第4係長平良泰久と同調査員八木厚之、野島 永が担当した。調査にかかる経費は、京都府乙訓土木事務所が負担した。調査に当たっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会をはじめとして、乙訓管内の埋蔵文化財関係機関から、指導・助言を得た。記して感謝したい。

2. 調査概要

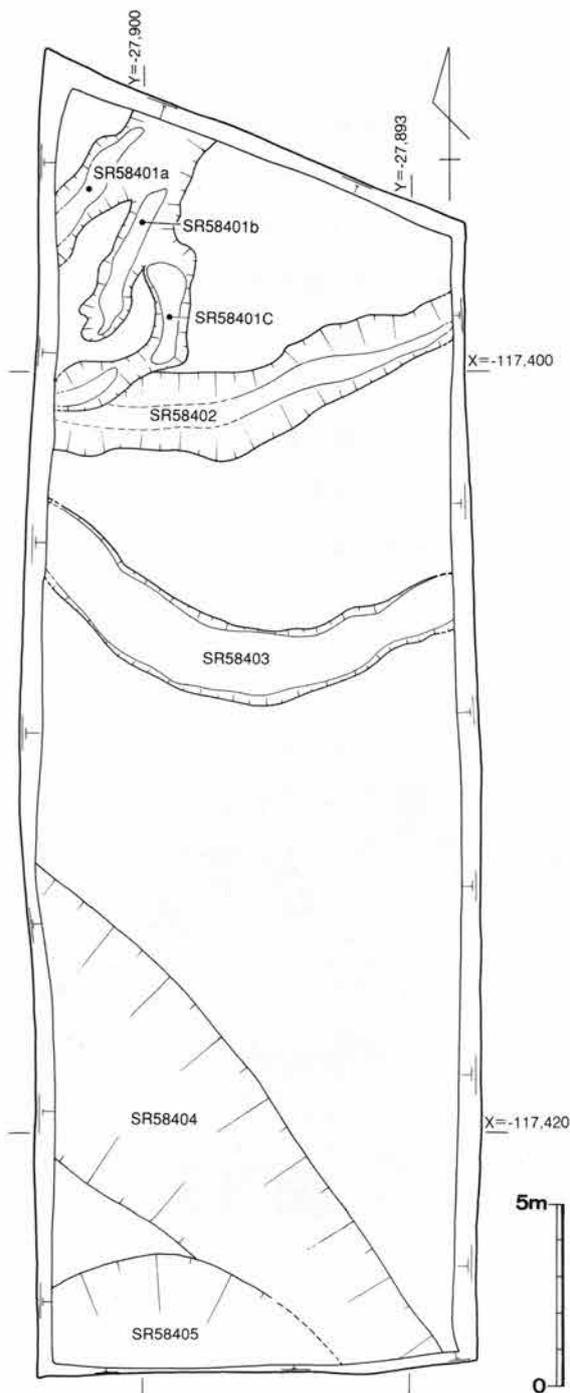
調査では、まず外環状線道路の建設予定地内に、東西約11m・南北の東辺約30m・西辺約34m



第56図 調査地位置図(平城京型復原による) 1/20,000

の調査地を設定した。

表土掘削は、重機によって行った。地表下約5～15cmまで盛り土があり、調査地北端部には、その下に旧耕作土が5～15cmの厚さで存在したが、それ以外のところでは認められなかった。さらにその下には、黒灰色粘質砂礫層、暗黒灰褐色粘土層、明黄灰白色粘質土層、明黄灰色粘質土層が認められたが、遺構・遺物の存在は確認できなかった。調査地北半部では上記の土層に続く暗茶灰色砂礫層(第8層)上面で、重機による掘削を一旦止めた。また、南半部ではこの暗茶灰色砂礫層が消え、変わって現れた明黄茶色砂礫層(第26層)上面で、重機による掘削を一旦止めた。

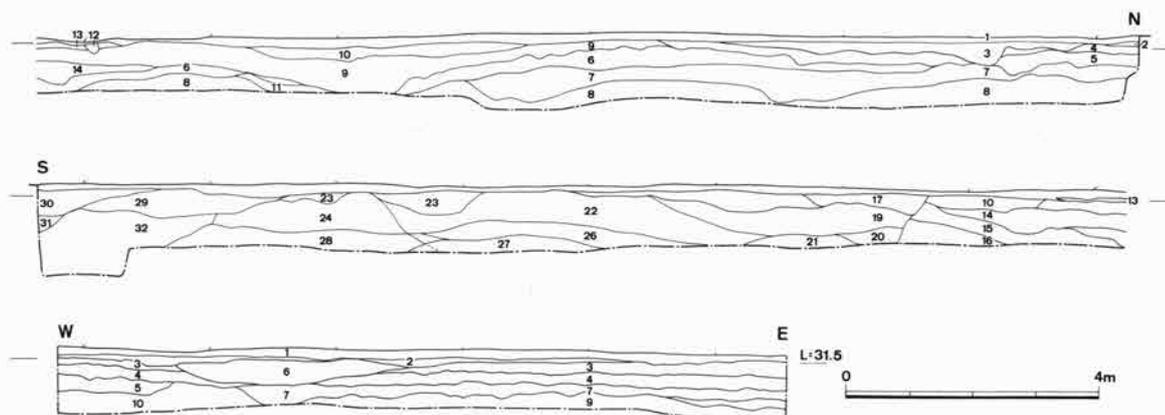


第57図 調査地遺構配置図(1/200)

そして、人力にてその面でそろえた後、遺構の有無を確認するために精査を行った。

その結果、調査地北端部付近を中心に、溝状に灰色に変色する部分が3条認められた。また、その南側でも、調査地を、東-西方向に横断する形で溝状に灰色に変色する部分と、それと同様な溝状の黒色に変色する部分を確認した。そのため、これらが遺構ではないかと考え精査を行った。調査地北端部の溝状遺構から土器の小片が2点、その南の灰色の溝状遺構からも土器の小片が1点出土した。断面観察、出土遺物、掘削し終えたその形状から、自然流路跡と認識した。

また、その南の黒色の溝状の凹みについては、ここからも土器の小片が2点出土したが、この断面と調査地の東西両壁面の断面を観察することによって、溝ではなく黒色粘土の堆積であると認識した(暗黒褐色粘土層、第9層)。さらに、調査地の南半部では、礫が広がり流路状に見えている部分を2条検出し、それぞれに断ち割りを行い底面を確認した。いずれも遺物は確認できず、また断面観察によってこれらの2条も自然流路と認識した。最終的には、調査地中央やや南東よりの部分に、断ち割りを行い、これ以下の土層堆積状況を確認したが、礫層の堆積が続くのみで、ここでも遺構・遺物の存在は認められなかった。



第58図 調査地土層断面図

- | | | |
|-----------------------|----------------------------|-------------------------|
| 1. 盛り土 | 2. 旧耕作土 | 3. 黒灰色粘質砂礫(3~4cmの礫) |
| 4. 暗黒灰褐色粘土 | 5. 明黄灰白色粘質土 | 6. 明茶灰色粘質土 |
| 7. 明黄灰色粘質土(約1cmの礫混じり) | 8. 暗茶灰色砂礫(砂粒多い、1~2cmの礫混じり) | |
| 9. 暗黒褐色粘土 | 10. 暗黒褐色粘質土 | 11. 暗灰白色粘質砂土 |
| 12. 明黄茶色砂質土 | 13. 暗黄茶色粘質土 | 14. 暗灰褐色粘質土(黄斑混じり、砂粒多い) |
| 15. 暗黒灰褐色粘質土(黄斑混じり) | 16. 明黒灰褐色粘質土(黄斑混じり) | |
| 17. 暗黒褐色粘質土(砂混じり) | 18. 明黄茶色粘質土 | 19. 暗黒灰褐色砂礫(拳大の石多い) |
| 20. 明黄茶色粘質土(灰色粘土混じり) | 21. 暗黒褐色砂礫(拳大の石混じり) | |
| 22. 暗黒茶色砂礫(約3cmの礫混じり) | 23. 濃黒褐色粘質土(礫混じり) | 24. 濃茶灰色粘質土(砂混じり) |
| 25. 暗黄灰色砂 | 26. 明黄茶色砂礫(約3cmの礫混じり) | |
| 27. 明黄赤茶色砂(砂粒大きい) | 28. 淡茶灰色粘土(少し砂混じり) | |
| 29. 濃黒黄灰色砂礫(礫非常に多い) | 30. 濃黒灰褐色粘質砂礫 | 31. 濃黒褐色砂質土 |
| 32. 濃黒灰色砂礫(礫非常に多い) | | |

3. 検出遺構

自然流路 S R58401 a 調査地北辺部で検出した。流路方向は、南西-北東方向を示し、幅約1.1m・深さ約0.3mを測る。約4mにわたって検出した。

自然流路 S R58401 b S R58401 a に合流する流路で、幅約0.9m・深さ約0.2mを測る。長さ約6mにわたって検出し、弥生土器の小片 d・e (図版第50-(2)) がここから出土した。

自然流路 S R58401 c この流路も S R58401 a に合流する流路で、幅約0.6m・深さ約0.2mを測る。長さ約8mにわたって検出した。以上の自然流路 S R58401 a・b・c の埋土はいずれも暗灰白色砂質土であった。これらの前後関係が明確に判断できないため、同時期に水が流れていたと考えられる。

自然流路 S R58402 調査地北部で検出した。流路方向は、西-東方向を示し、ゆるやかに南に湾曲し、調査地西端部で S R58401 c に切られていた。最大幅約1.9m・深さ約0.3mを測り、長さ約12mにわたって検出した。埋土は、濃黄灰色粘質砂土・明黄灰色粘質砂土などの割合が多く、弥生土器の小片 b (図版第50-(2)) が出土した。

自然流路 S R58403 自然流路 S R58402 の南側で検出した。流路方向は、西-東方向を示し、大きく南に湾曲していた。最大幅約2m・深さ約0.2mを測る。長さ約12mにわたって検出した。埋土は、暗黒褐色粘土で、弥生土器の小片 a・c (図版第50-(2)) が出土した。

自然流路 S R58404 調査地南部で検出した。流路方向は北西-南東を示し、幅約5.5m・深さ

約1.6mを測る。長さ約11mにわたって検出した。検出面から最深部まで、拳大～人頭大の礫によって埋まっていた。

自然流路S R58405 調査地南部で検出した。流路方向は西－南東を示す。この自然流路の北肩は確認できたが、調査地内では南肩は検出できなかった。そのため、この流路の幅の正確な数値は測定できなかったが、3.5m以上と考えられる。深さは最深部で約0.7mを測り、長さ約10.5mにわたって検出した。自然流路S R58404と同様に拳大～人頭大の礫で埋まっていた。

4. ま と め

外環状線広域幹線アクセス街路整備事業(以下、外環状線とする)に伴う発掘調査は、長岡京跡右京第285次、第310次、第335次、^(注2)第511次、^(注3)第547次^(注4)と行われてきた。そして、今回の長岡京跡右京第584次調査である。この外環状線の計画道路が、西二坊大路に重なっているために、検出される長岡京跡の遺構は、西二坊大路の路面と東側溝、またそれに交差する大路・小路である。

長岡京跡右京第285次調査では、西二坊大路東側溝が、幅0.7～1.0m・深さ0.1～0.3m・長さ約98mにわたって検出されている。また、二条条間大路(新呼称：二条大路)南側溝が、幅約1.0m・長さ約20mにわたって検出されている。右京第310次調査では、西二坊大路の路面とその路面上の轍が検出された。また、段丘面と自然流路の段差の大きいところに丸太を敷き、路盤を改良した遺構が検出された。右京第335次調査では、西二坊大路東側溝が、幅1.6～2.0m・深さ0.2～0.4mで検出された。

右京第511次調査、右京第547次調査、及び今回の右京第584次調査では、明確に長岡京期の遺構と考えられるものは、検出できなかった。加えて、今回の調査では、長岡京期以外の遺構も検出できなかった。過去の開田化の際に大きく削平された結果とみられる。自然流路跡から出土した弥生土器は、当該地が上里遺跡の縁辺部であることを示している。

(八木厚之)

注1 主な調査参加者：大庭弘継・川口和也・高田良太・福島尚子

注2 石尾政信・小山雅人・土橋 誠・戸原和人「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第45冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注3 石尾政信「長岡京跡右京第511次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注4 柴 暁彦「長岡京跡右京第547次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

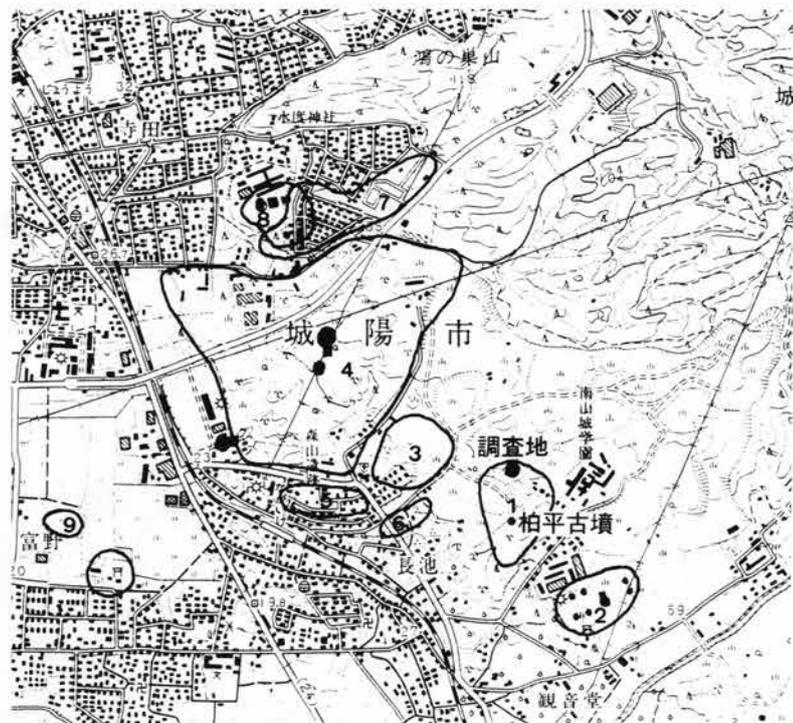
7. 柏平遺跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、木津川右岸運動公園(仮称)整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、城陽市富野柏平に所在し、山城盆地南部を西に望む、木津川東岸の低い丘陵部に位置する。付近の丘陵部には、梅ノ子塚古墳をはじめとする芝山古墳群・芝山遺跡、鷺坂山遺跡、宮ノ平遺跡・宮ノ平古墳群、兜山古墳群、長池古墳などのほか、縄文～弥生時代の複合遺跡で、史跡指定されている森山遺跡など、各時期の遺跡がまとまって分布する。

柏平遺跡は、すでに遺物散布地として知られ、森山遺跡の東約500mに位置する標高70m前後の丘陵一帯を範囲とする。丘陵頂部には、本来数ヘクタール規模の平坦面があったようであるが、現状は砂利採取によって、北端部の城陽市浄水施設付近が残る程度である。昭和61年には、この遺跡内の砂利採取地から古墳時代後期中葉の古墳が1基発見され、柏平古墳と命名された。そのおりに、付近には群集墳の存在の可能性が言及されているが、不明のままである^(注1)。今回の調査地は、柏平古墳の北約150mの丘陵頂端部に1か所(Bトレンチ)、同約230mの丘陵裾部に1か所(Aトレンチ)の計2か所にトレンチを設定した。

調査期間は、平成9年8月25日から同年9月4日、調査面積は約200m²である。現地での調査は、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎と同調査員有井広幸が担当し、本概要の執筆は有井が担当した。調査費用は、京都府土木建築部が全額負担した。調査に当たっては、城陽市教育委員会を始め諸機関・関係者の方々にご協力いただいた^(注2)。



第59図 調査地位置図(1/25,000)

2. 調査概要

Aトレンチ このトレンチは、丘陵北斜面の裾付近(標

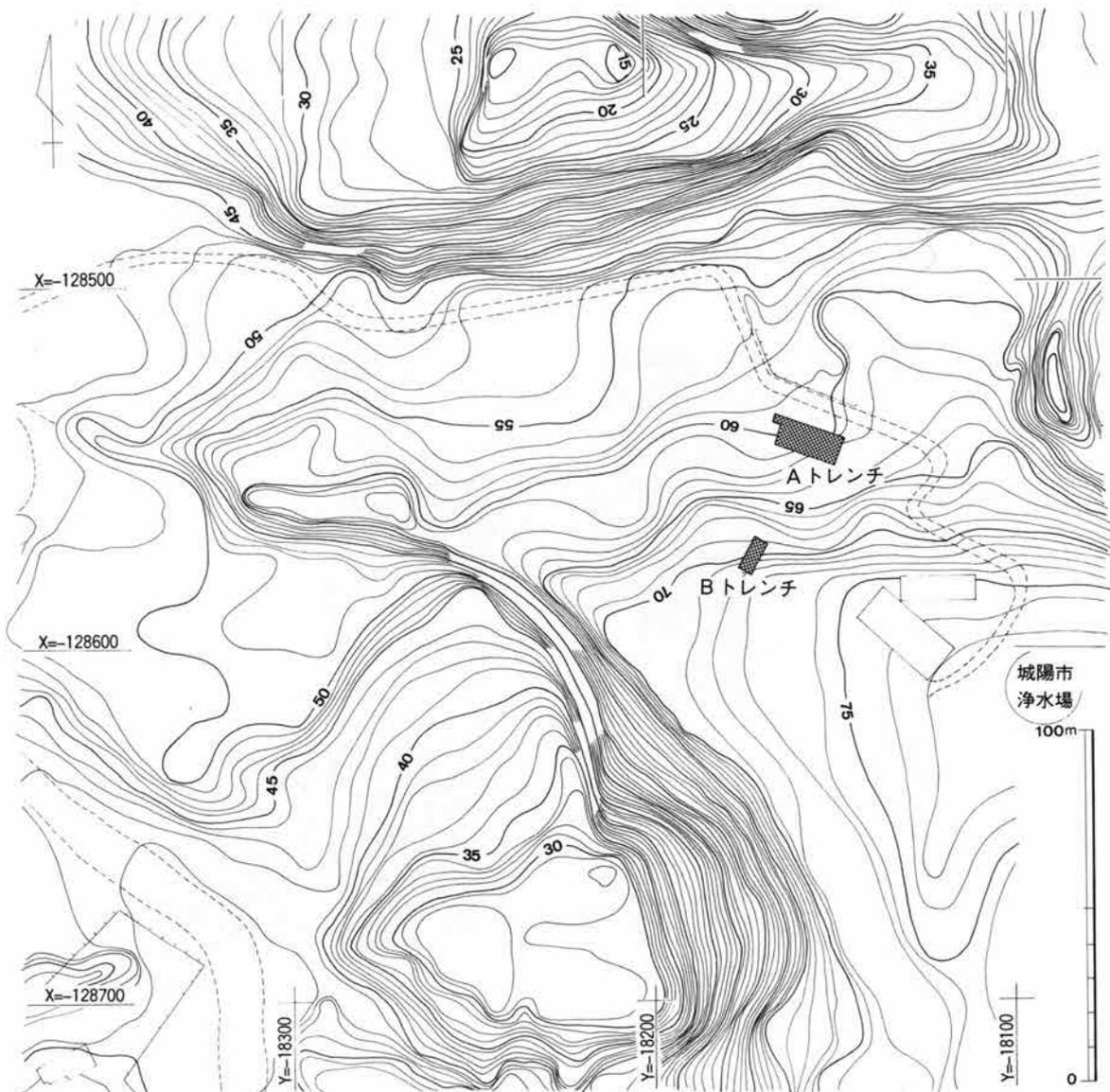
- | | | |
|----------|-----------|----------|
| 1. 柏平遺跡 | 2. 冑山古墳群 | 3. 鷺坂山遺跡 |
| 4. 芝山遺跡 | 5. 森山遺跡 | 6. 河原遺跡 |
| 7. 宮ノ平遺跡 | 8. 宮ノ平古墳群 | 9. 東田部遺跡 |

高60m前後)に面積約140m²で設置した。現況は竹林で、南から北にゆるやかな傾斜をもつ平坦地である。

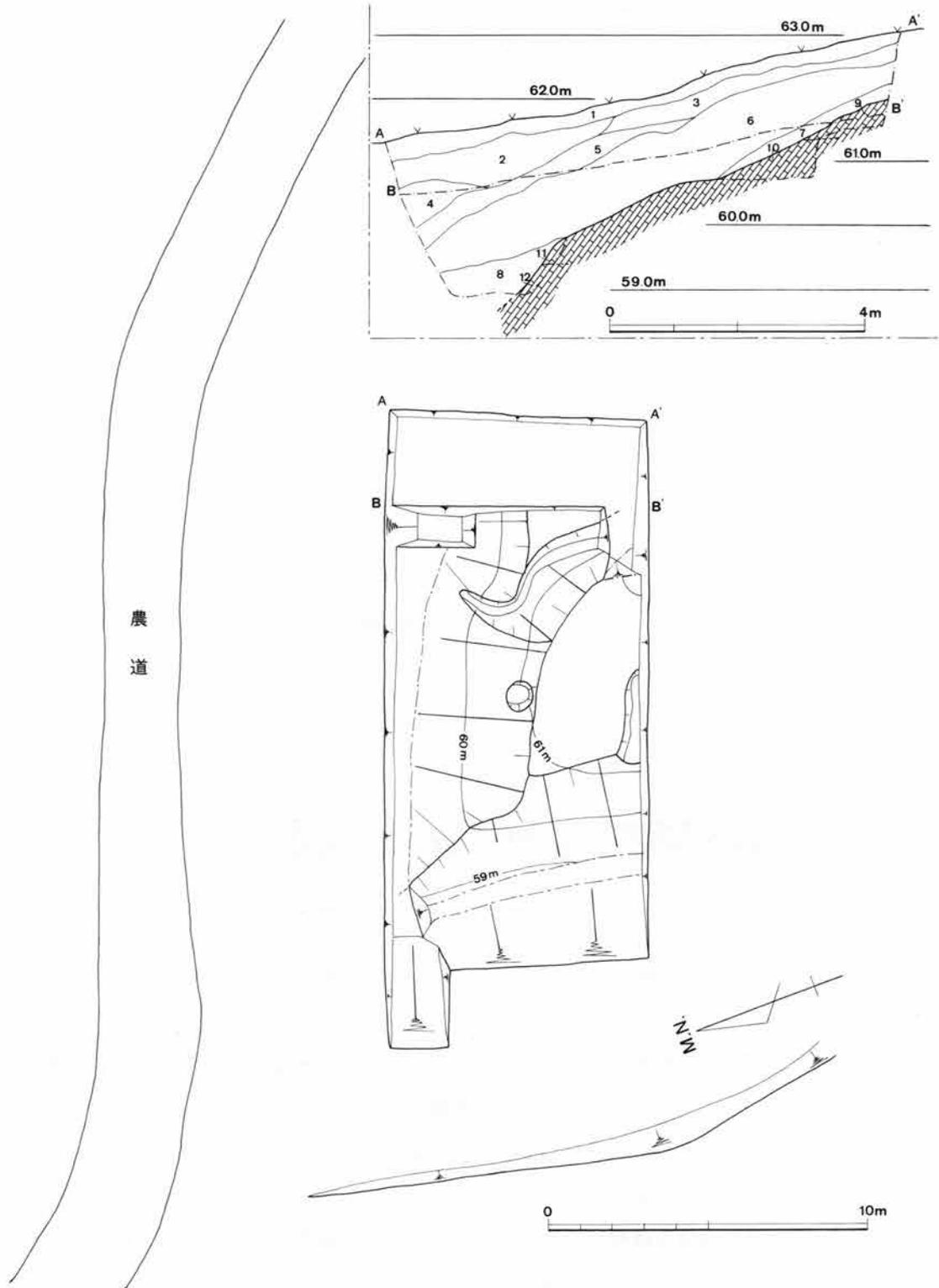
掘削の結果、トレンチ東半と西半に埋没した北方向に広がる谷地形が2か所確認できた。谷の規模は、トレンチ面積の関係上、両方とも確認できなかった。埋土は、黄褐色系砂質土または砂礫が中心で、遺物は出土していないため埋没時期は不明である。このほか、トレンチ中央部の尾根筋付近で直径約1mの土坑を確認したが、遺物は出土せず時期は不明である。

Bトレンチ このトレンチは、丘陵頂部平坦面の北端(標高72m前後)に面積約40m²で設置した。現況は荒蕪地で、以前は畑地であったようである。

掘削の結果、表土の直下で赤橙色砂質土の地山面となり、地山面は南東から北西方向にゆるやかに傾斜している。遺構、遺物は出土していない。

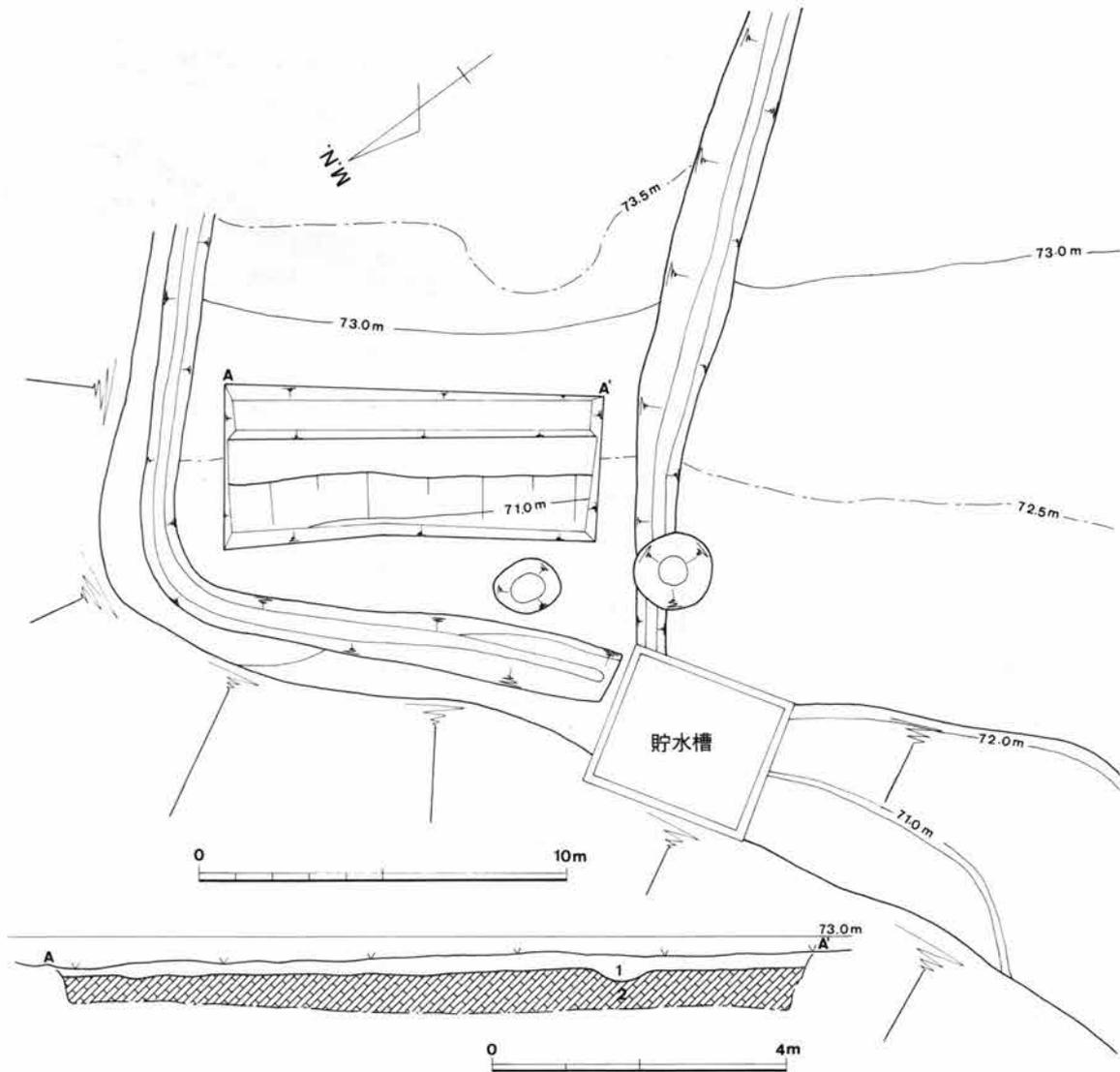


第60図 トレンチ配置図(1/2,000)



第61図 Aトレンチ実測図(平面1/200、断面1/100)

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1. 灰黒色砂質土(表土) | 2. 暗黄褐色砂質土混礫(径3 cm以下) |
| 3. 黄褐色砂質土 | 4. 灰色砂礫(径5 cm以下) |
| 5. 黄褐色粘質微砂 | 6. 淡黄褐色砂質土混礫(径3 cm以下) |
| 7. 黄灰色砂礫(径3 cm以下) | 8. 灰黄色砂礫(径5 cm以下) |
| 9. 黄褐色砂礫(径5 cm以下) | 10. 明黄褐色砂質土 |
| 11. 明黄灰色砂礫 | 12. 灰黄色砂質土(9~12は地山) |



第62図 Bトレンチ実測図(平面1/200、断面1/100)

1. 黒灰色細砂質土(耕作土) 2. 明赤橙色砂質土混礫(径3cm以下・地山)

3. ま と め

今回の調査では、遺跡が分布すると考えられる丘陵の頂部端と裾部の計2か所にトレンチを設置した。その結果、いずれの調査トレンチからも遺構・遺物を確認できなかった。

今回の調査地点は、遺跡範囲の北側縁辺部であり、柏平遺跡の内容に迫る成果は得られなかった。しかし、近隣の芝山遺跡や兜山遺跡では、同様の低丘陵上に古墳群や住居跡などの遺構が分布しており、柏平遺跡も同様な様相になる可能性もある。砂利採取時に発見された柏平古墳がその可能性を傍証しているといえよう。砂利採取による丘陵の削平はさらに進んでおり、遺跡の中心部分にあたる丘陵頂部は残り少なくなっている。(有井広幸)

注1 梶本敏三「柏平古墳発掘調査報告」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第17集 城陽市教育委員会) 1987

注2 調査に当たっては、主に以下の調査補助員・整理員の方々にご協力いただいた(敬称略)。

井ノ口雄三・久田 亨・山田三喜子

版 圖

図版第1 浦入遺跡



(1)調査地遠景（南から）



(2)調査地近景（南から）

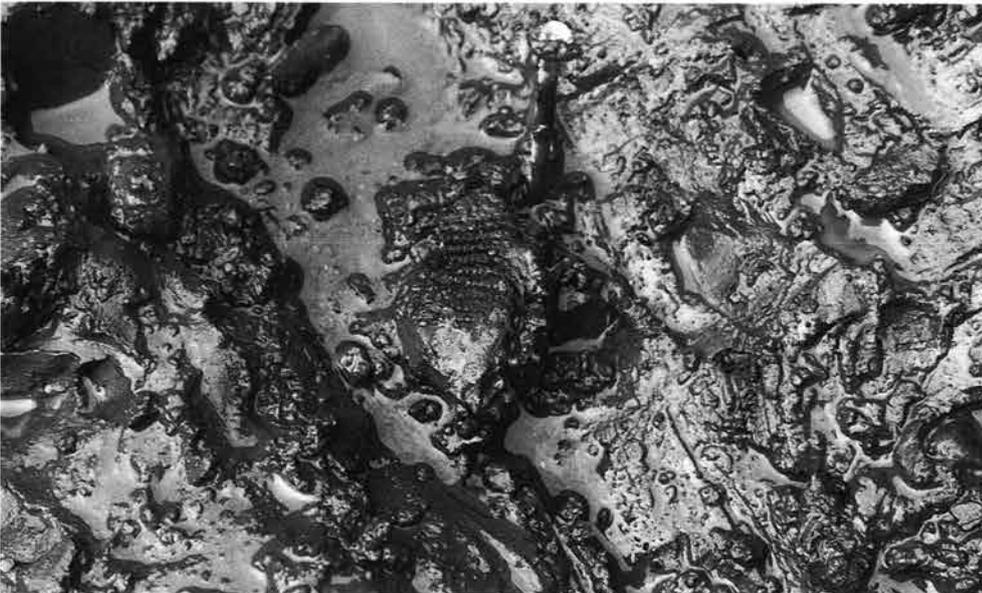
図版第2 浦入遺跡



(1)石囲い炉跡検出状況
(南西から)



(2)縄文時代調査トレンチ全景
(早期末～前期初頭調査区、
南東から)



(3)暗青灰色粘土層遺物出土
状況

図版第3 浦入遺跡

(1) 流路状遺構全景
(南東から)



(2) 流路状遺構 a-b 土層断面
(南東から)



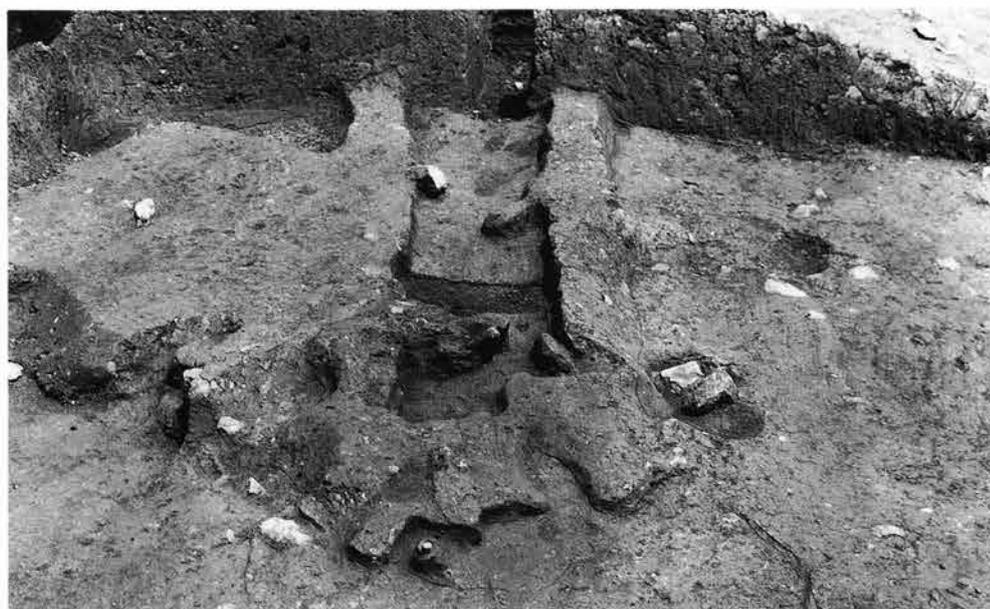
(3) 流路状遺構遺物出土状況
(南東から)



図版第4 浦入遺跡



(1) 竪穴式住居跡
SH01・SH04全景
(南東から)



(2) SH01カマド全景
(南から)



(3) SH01カマド本体近景
(東から)

図版第5 浦入遺跡

(1)テラス状遺構
S H10・S H11全景
(南東から)



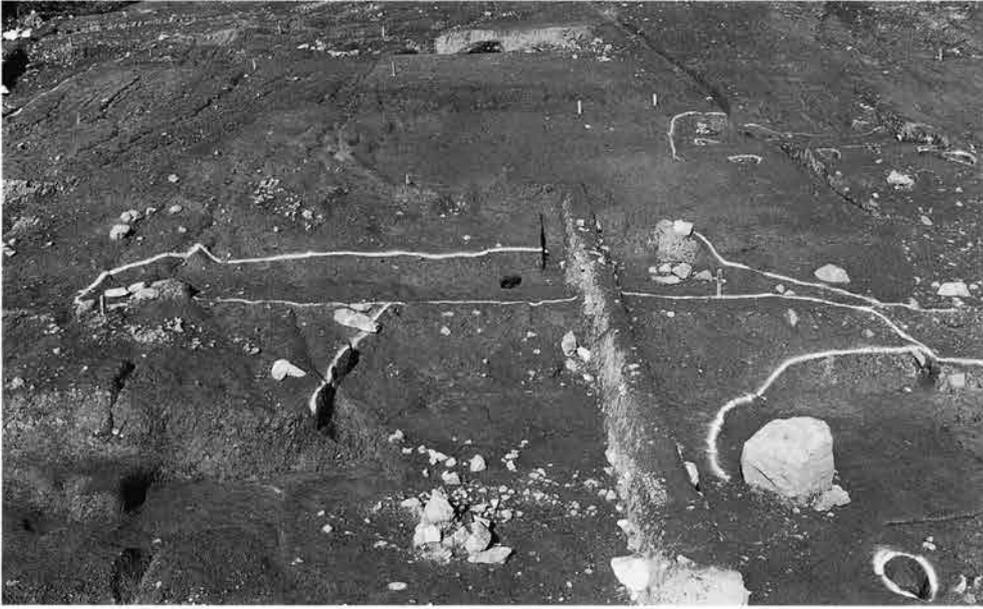
(2)テラス状遺構S H11検出
鍛冶炉跡1全景
(西から)



(3)竪穴式住居跡S H15全景
(南東から)



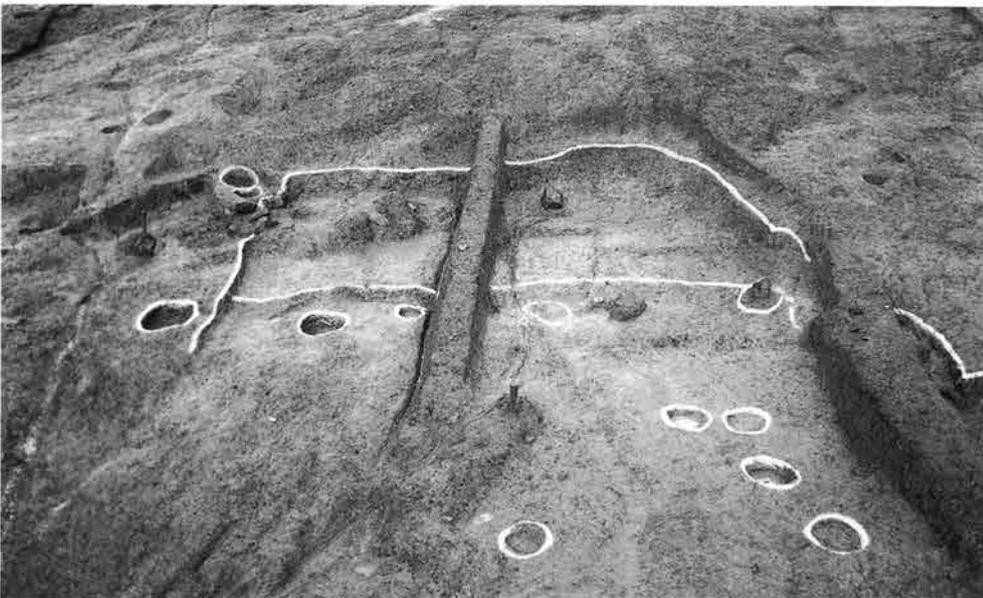
図版第6 浦入遺跡



(1)テラス状遺構
SH13・SH14全景
(南東から)



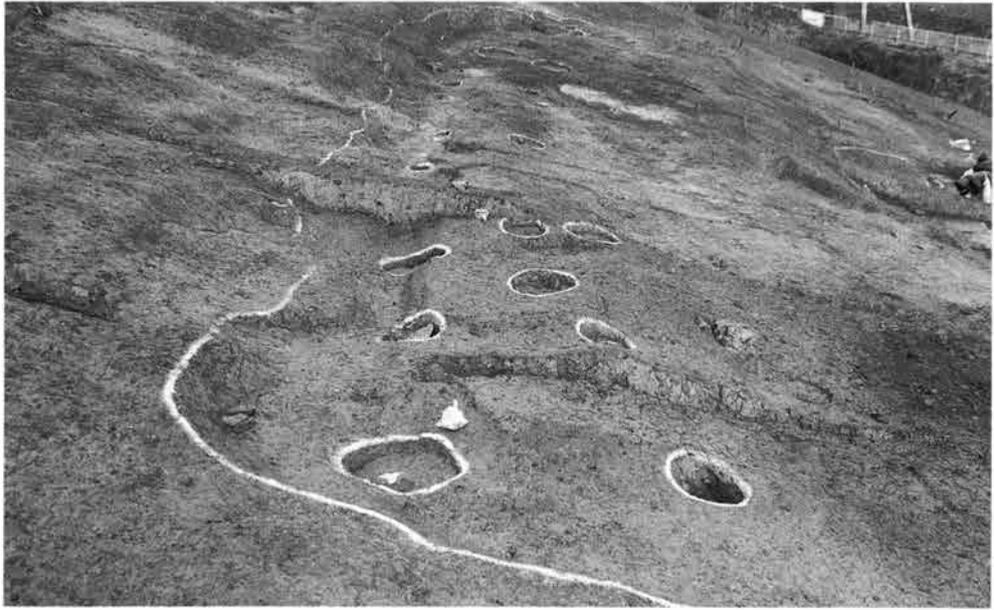
(2)SH14土馬出土状況
(南から)



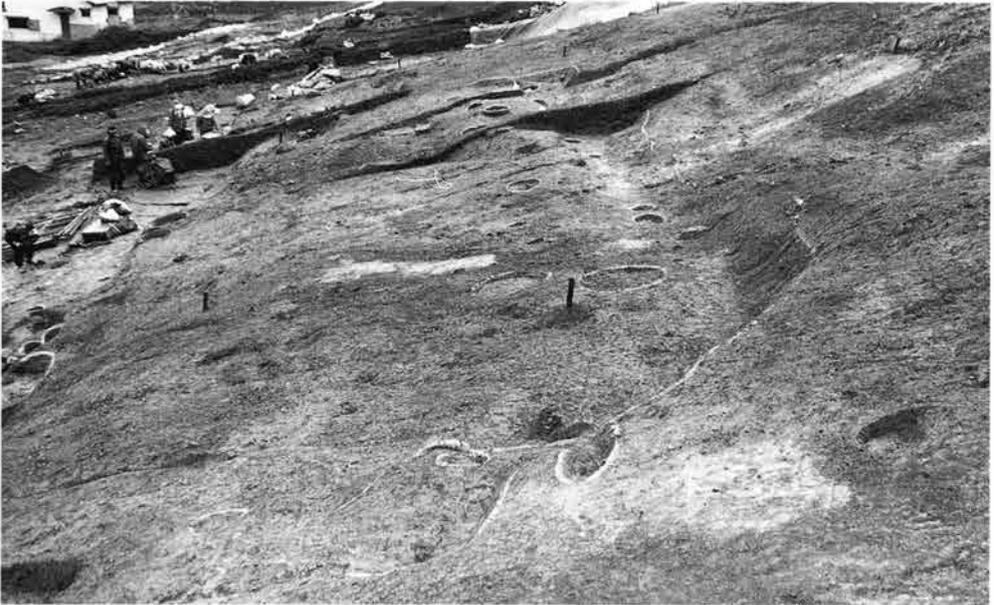
(3)テラス状遺構
SH20・SH23全景
(南東から)

図版第7 浦入遺跡

(1)テラス状遺構S H19全景
(南西から)



(2)テラス状遺構S H19全景
(北東から)



(3)テラス状遺構S H22全景
(南東から)







3



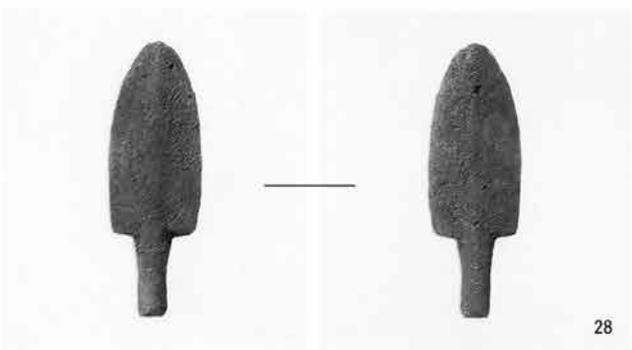
21



14



24



28



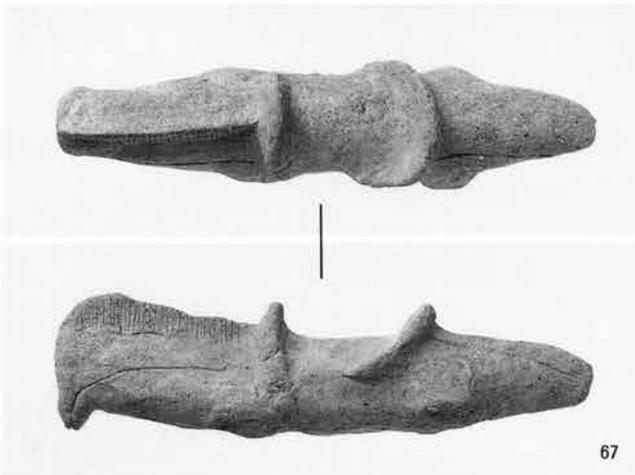
39



41



45





(1)浦入西2号墳・浦入遺跡空中写真(南から)



(2)浦入西2号墳空中写真(南西から)



(1)浦入西2号墳調査前全景(西から)



(2)浦入西2号墳表土除去後石材散乱状況(南から)



(1)浦入西2号墳最終追葬面及び閉塞石検出状況(南西から)



(2)浦入西2号墳最終追葬面棺台検出状況



(1)浦入西2号墳玄門付近遺物出土状況(南西から)



(2)浦入西2号墳追葬面検出状況(南西から)



(1)浦入西2号墳玄室内遺物出土状況(北東から)



(2)浦入西2号墳転用枕付近遺物出土状況(南から)

図版第16 浦入西古墳群



(1)浦入西2号墳追葬面玄室北西壁遺物出土状況(南東から)



(2)浦入西2号墳玄門付近遺物出土状況(北東から)

図版第17 浦入西古墳群



(1)浦入西2号墳羨道部(北西から)



(2)浦入西2号墳羨道部石段状施設(北東から)



(1)浦入西2号墳調査後全景(南西から)



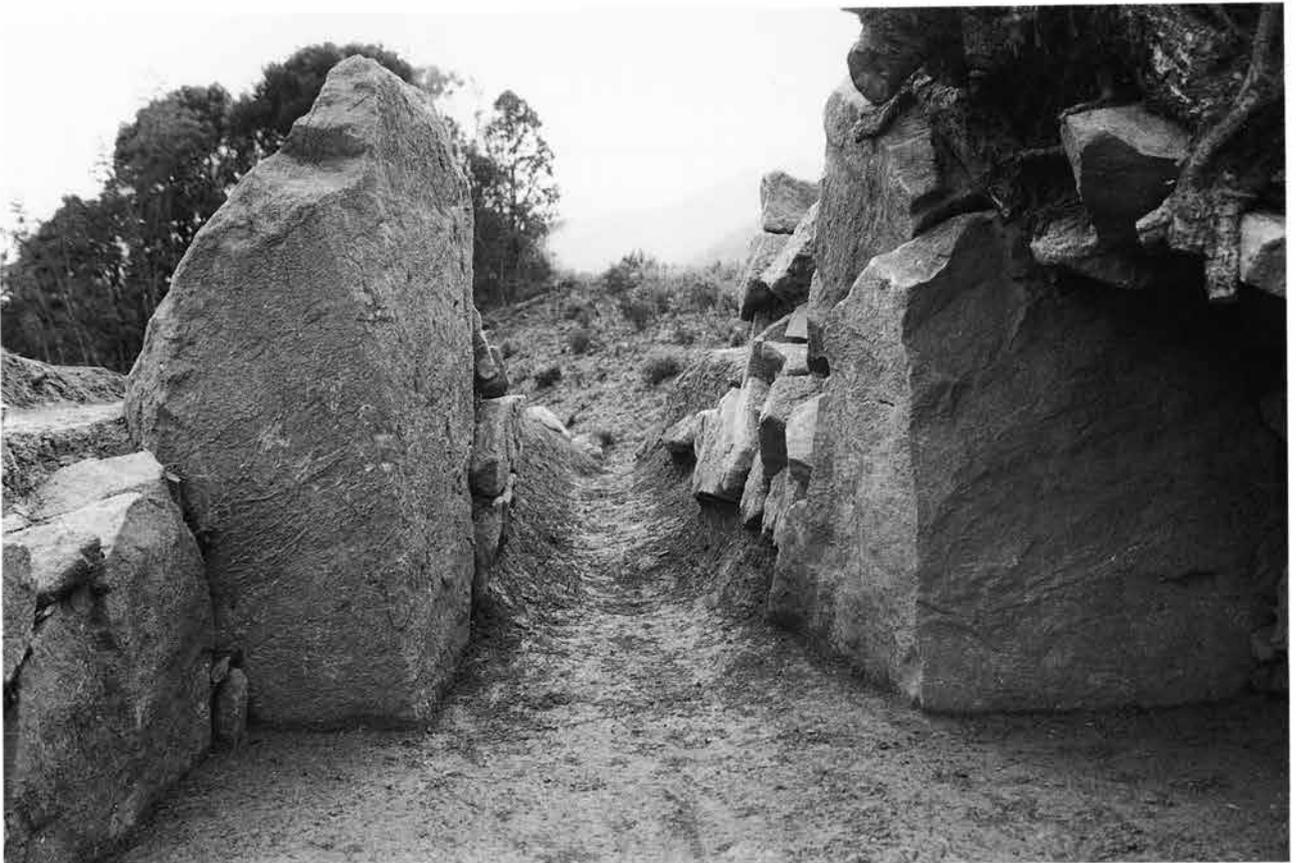
(2)浦入西2号墳玄室奥壁(南西から)



(1)浦入西2号墳玄室南東壁（北西から）



(2)浦入西2号墳玄室北西壁（南東から）



(1)浦入西2号墳玄室から羨道を望む(北東から)



(2)浦入西2号墳羨道南東壁(南西から)

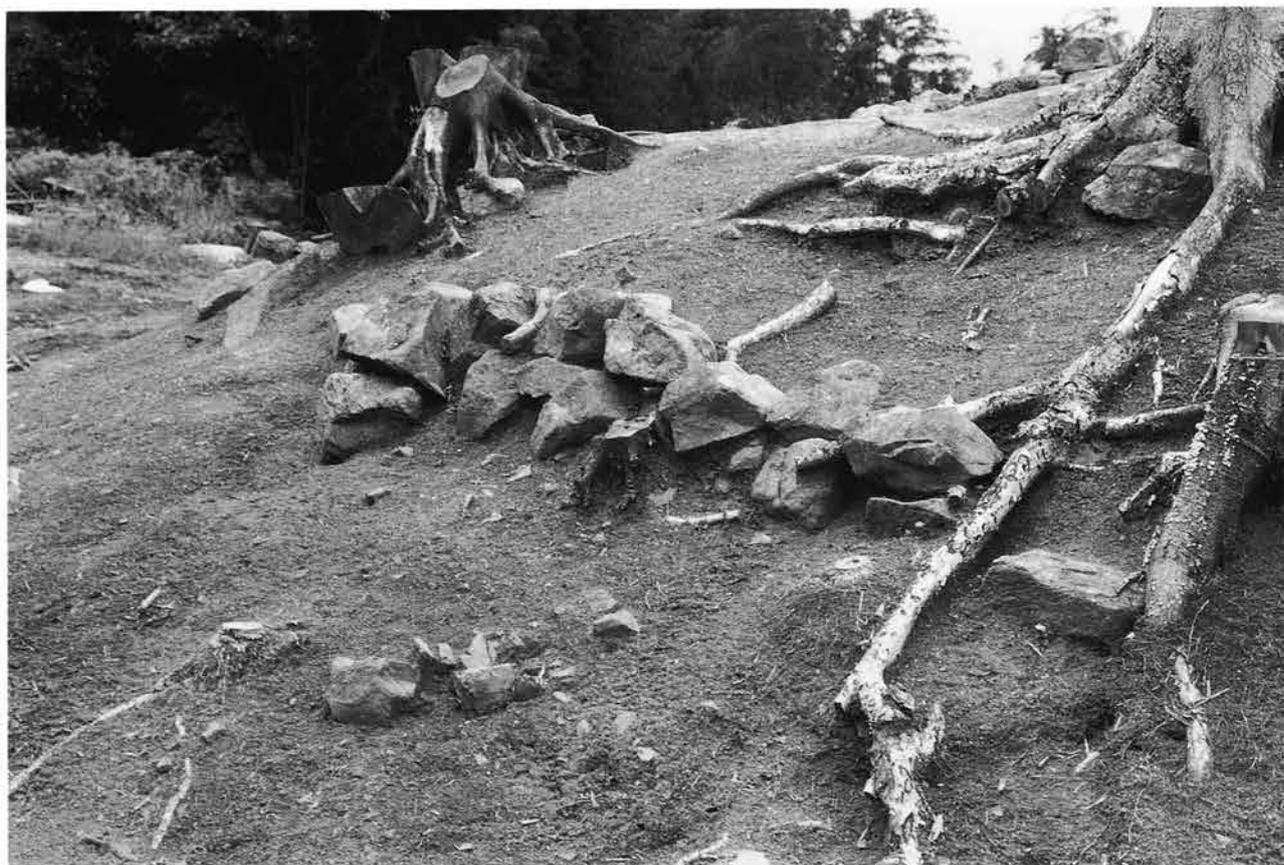
図版第21 浦入西古墳群



(1)浦入西2号墳羨道南西壁(南から)



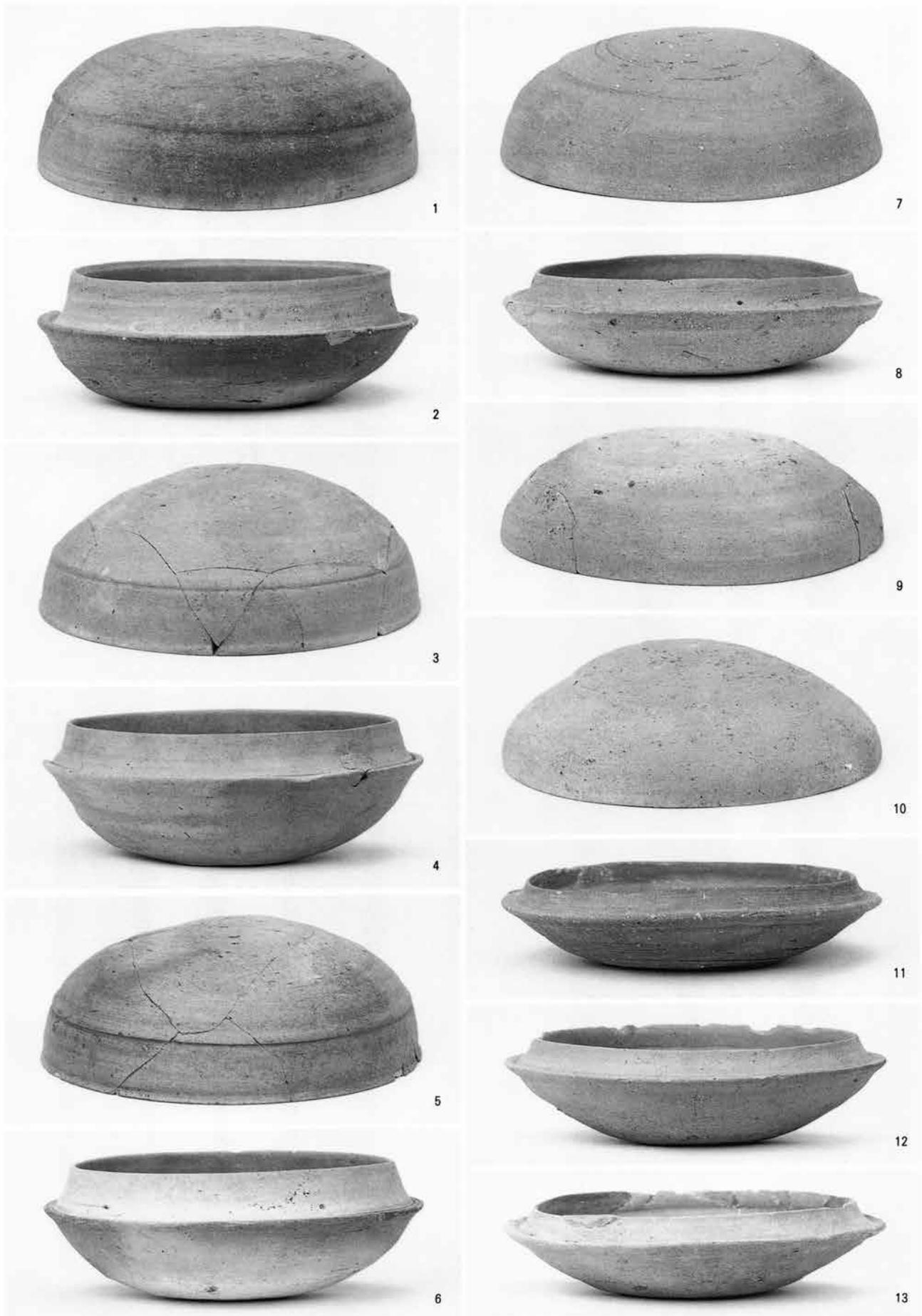
(2)浦入西2号墳列石全景(東から)



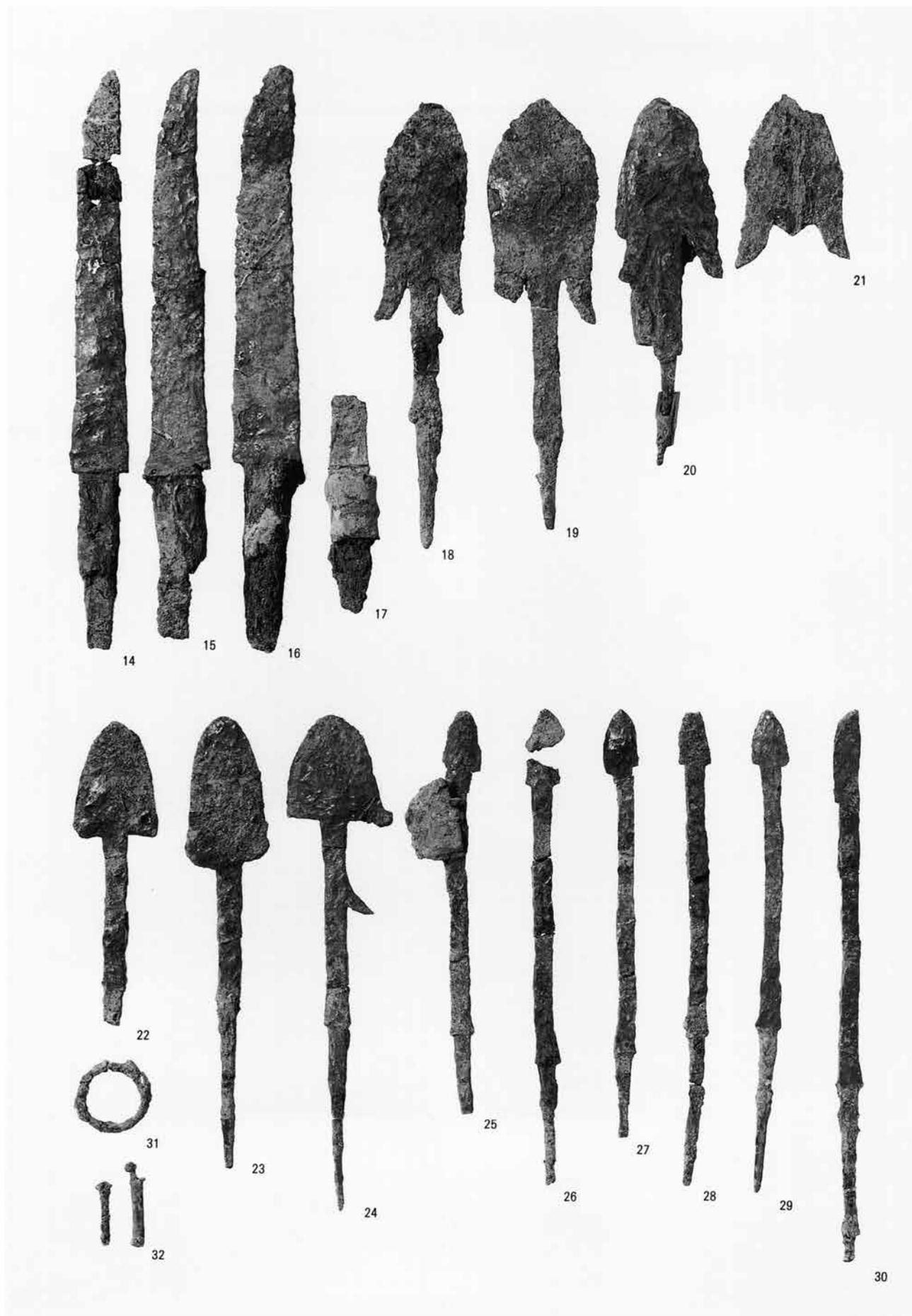
(1)浦入西2号墳列石南半分(東から)



(2)浦入西2号墳列石北半分(南から)



出土遺物(1)



出土遺物(2)

(1)第1トレンチ調査前
(南西から)



(2)第1トレンチ作業風景



(3)第1トレンチ完掘状況
(南西から)





(1)第2 トレンチ作業風景



(2)S X04検出状況
(北から)



(3)第2 トレンチ完掘状況
(東から)



(1)調査前全景（東から）



(2)調査地全景（東から）



(1)方形周溝墓 S X 301 検出状況 (北から)



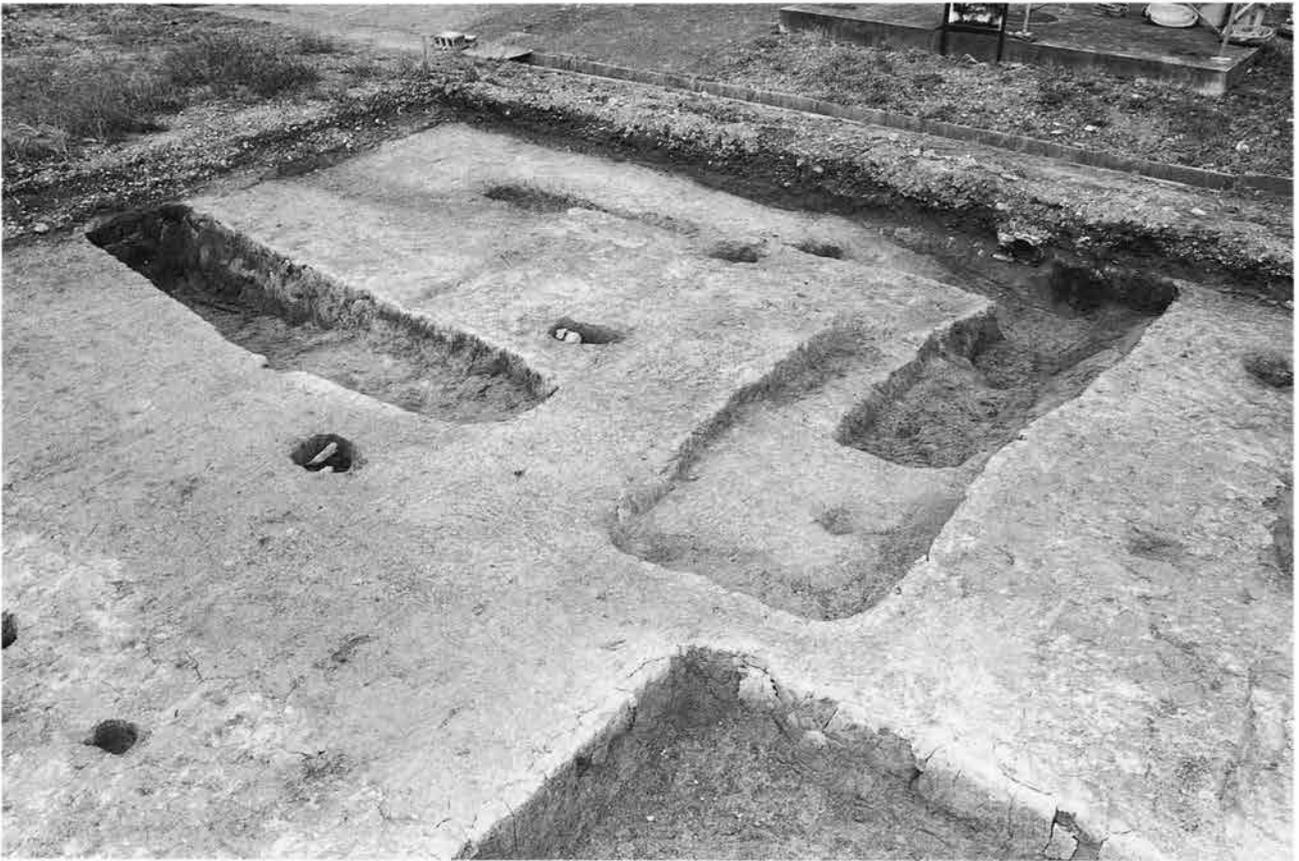
(2)方形周溝墓 S X 301 (北から)



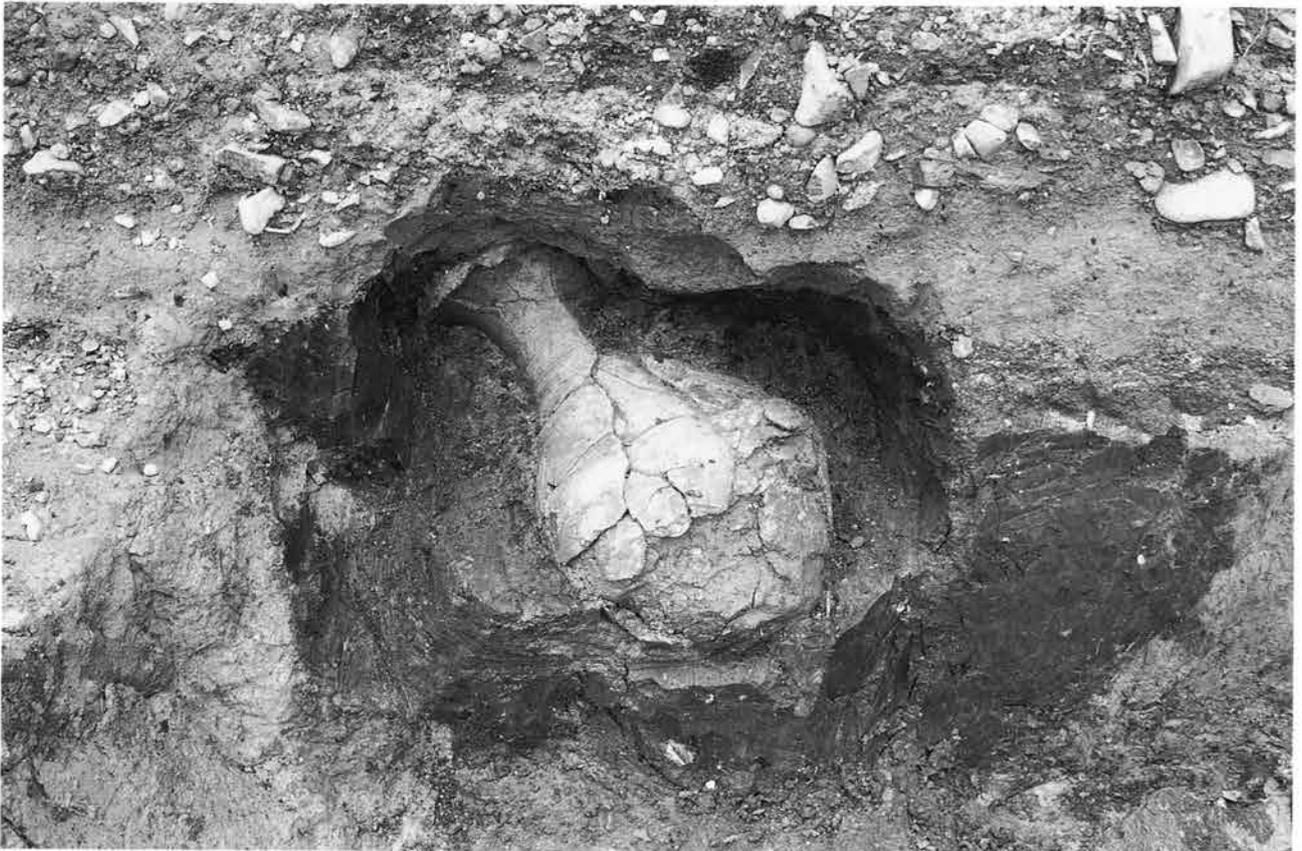
(1)方形周溝墓S X 301 (東から)



(2)方形周溝墓S X 301 (南から)



(1)方形周溝墓 S X 301 (南西から)



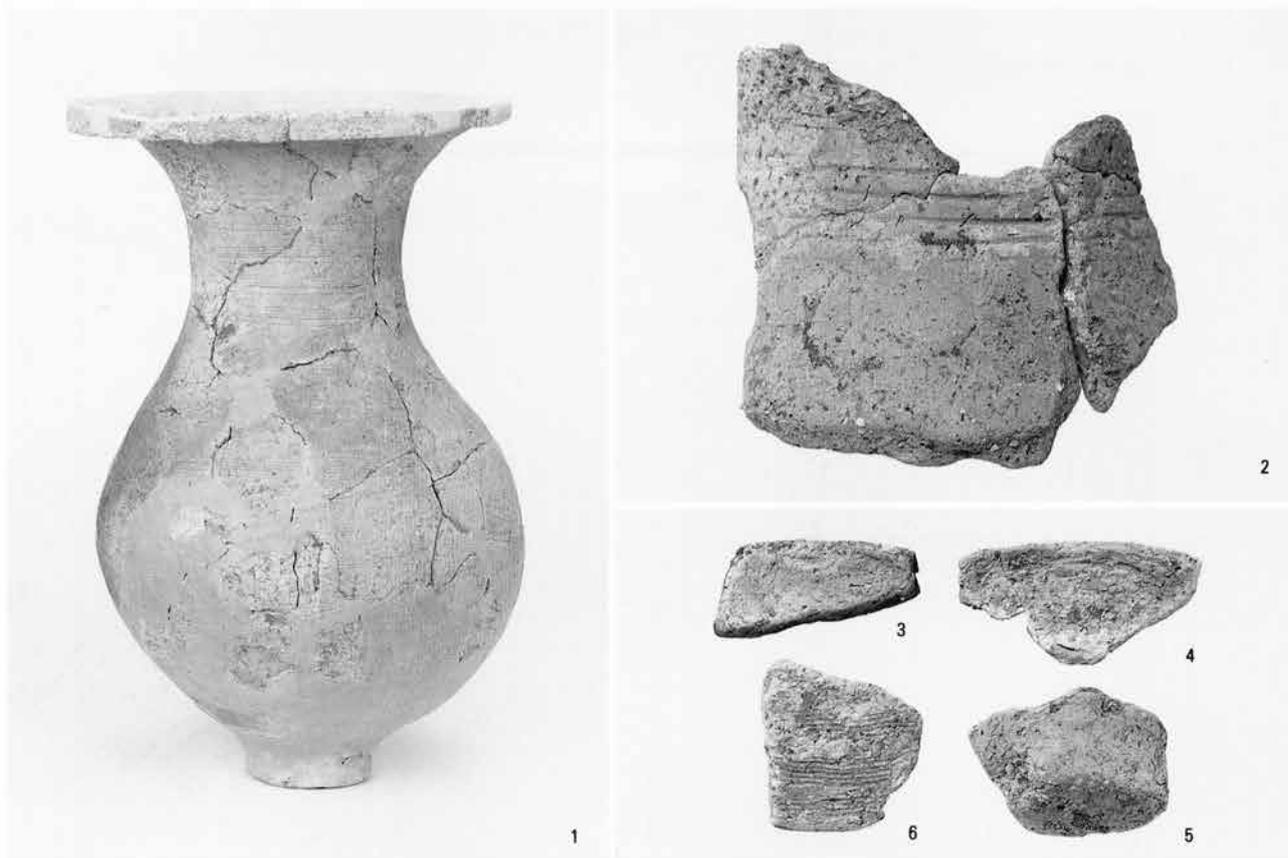
(2)方形周溝墓 S X 301西溝遺物出土状況 (南から)



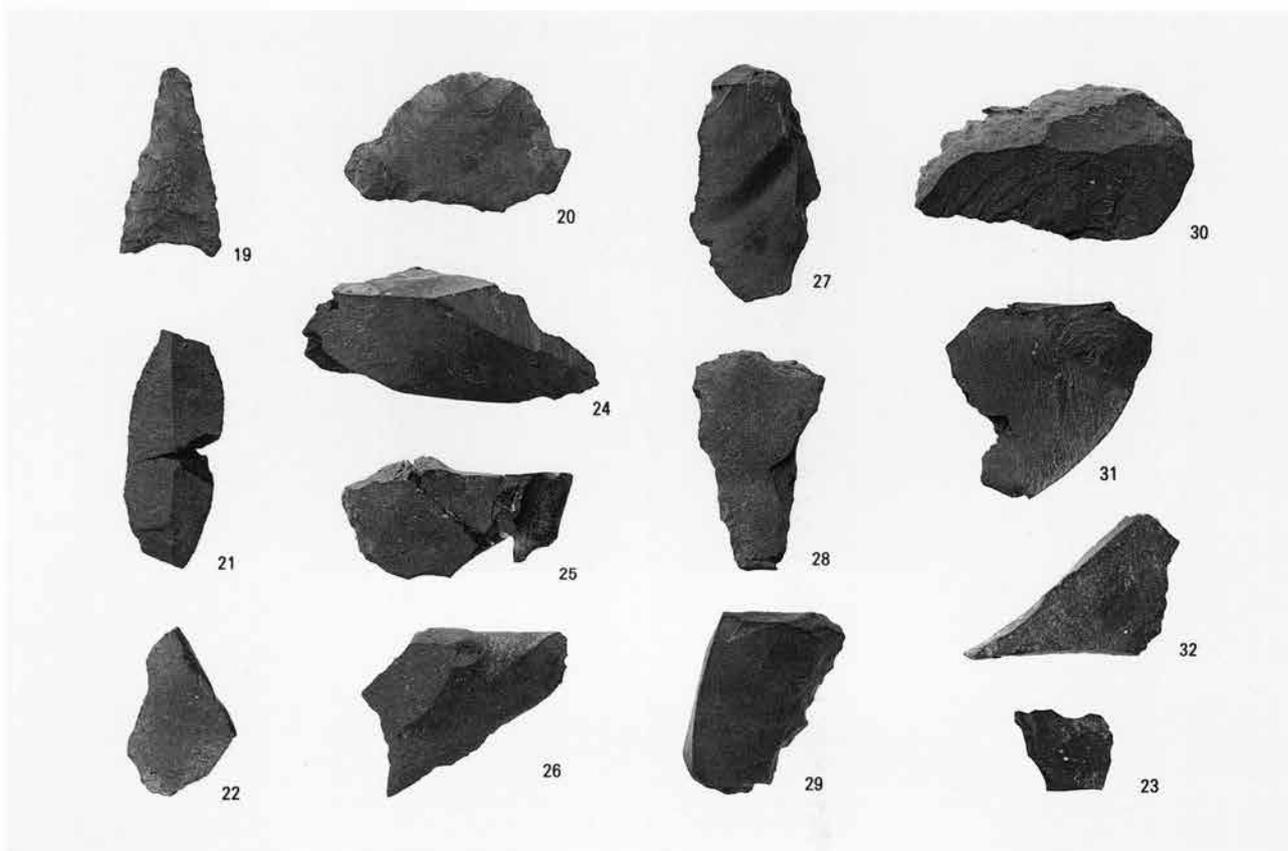
(1) 方形周溝墓 S X301 西溝断面 (南から)



(2) 方形周溝墓 S X301 南溝断面 (西から)

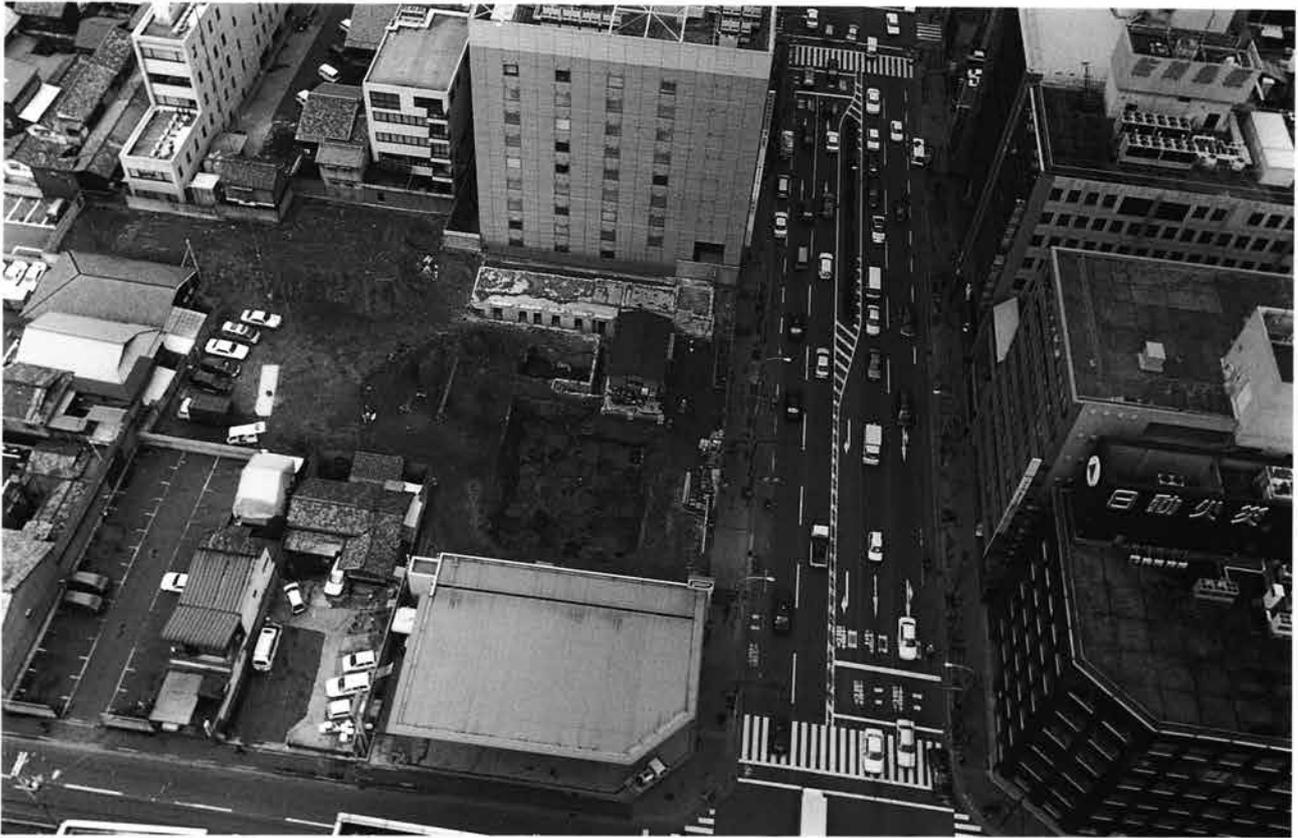


(1)出土遺物 (弥生土器)



(2)出土遺物 (石器)

図版第33 平安京跡左京五条三坊十一町



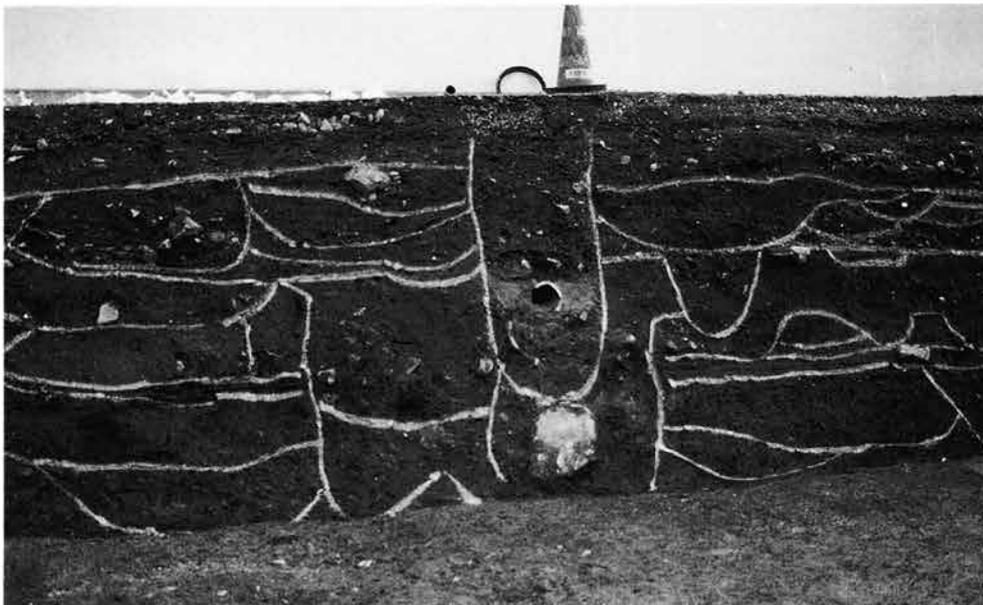
(1)調査地上空から（右は烏丸通、上が北）



(2)調査地全景（西から）



(1)調査前風景



(2)南壁土層断面



(3)調査風景

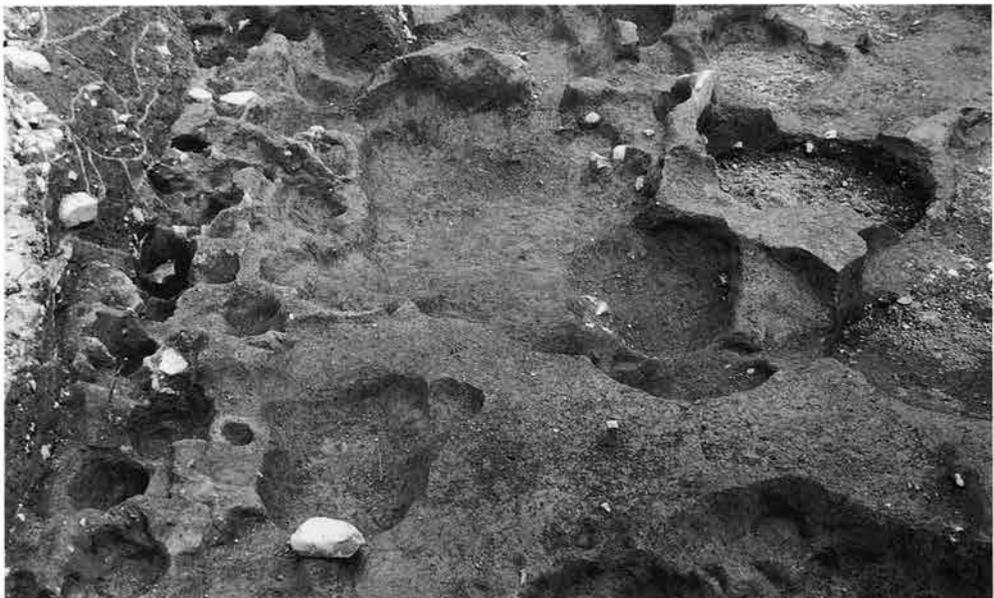
(1) B 4 ・ B 5 ・ C 4 ・
C 5 区
遺構検出状況 (南から)



(2) 調査地完掘状況
(南から)



(3) S A 47完掘状況
(西から)





(1) S X24検出状況
(西から)



(2) S X24検出状況
(南から)



(3) S X24完掘状況
(南から)

(1) S K54検出状況
(西から)



(2) S K54遺物出土状況



(3) 土器溜まり2
検出状況(北から)





(1) S K03検出状況
(東から)



(2) S K98検出状況
(北から)



(3) S K102検出状況

(1) S E 138・S E 148・
S K 146 (南から)



(2) S E 138



(3) S E 138出土
「ギンブナ」





44



62



45



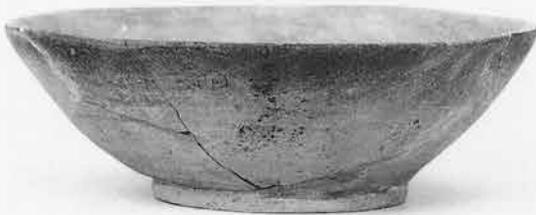
48



38



49



36



64



35



72



74

出土遺物(1) (付番は実測図に対応する)



170



174



222



208



158



187



119



146



105



108



225



237



242



221



238



239



240



(1)調査前全景（北西から）



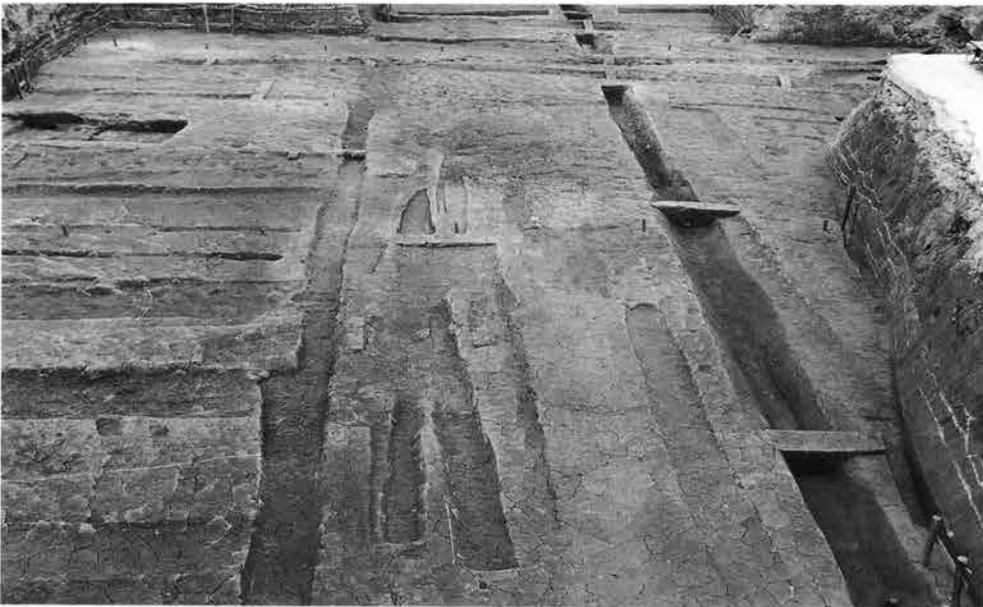
(2)北壁土層堆積状況
（南から）



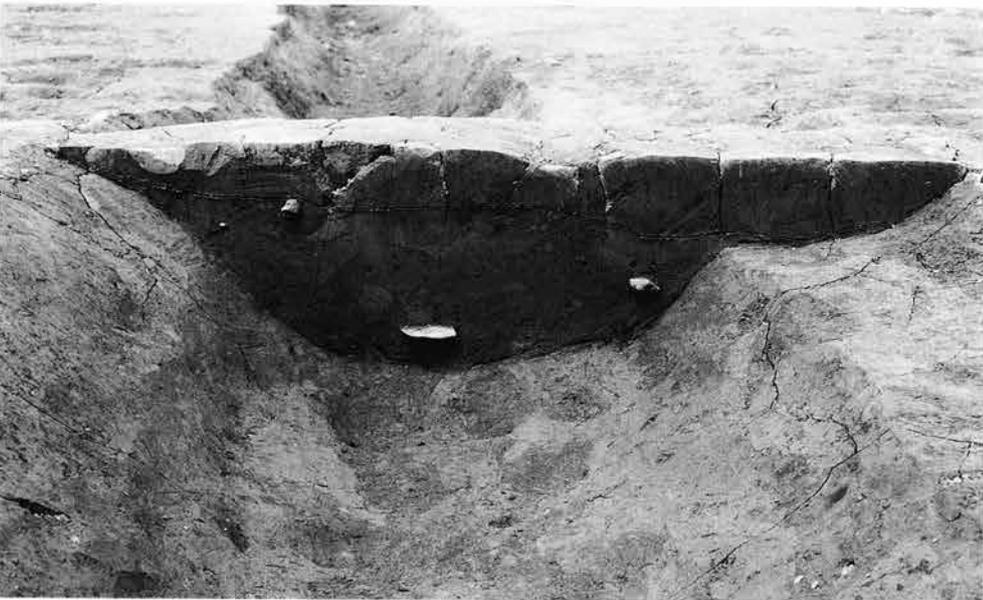
(3)長岡京期完掘状況
（北から）



(1) S D 07・S D 13完掘状況
(西から)



(2) S D 40001（東三坊坊間
小路西側溝）完掘状況
(南から)

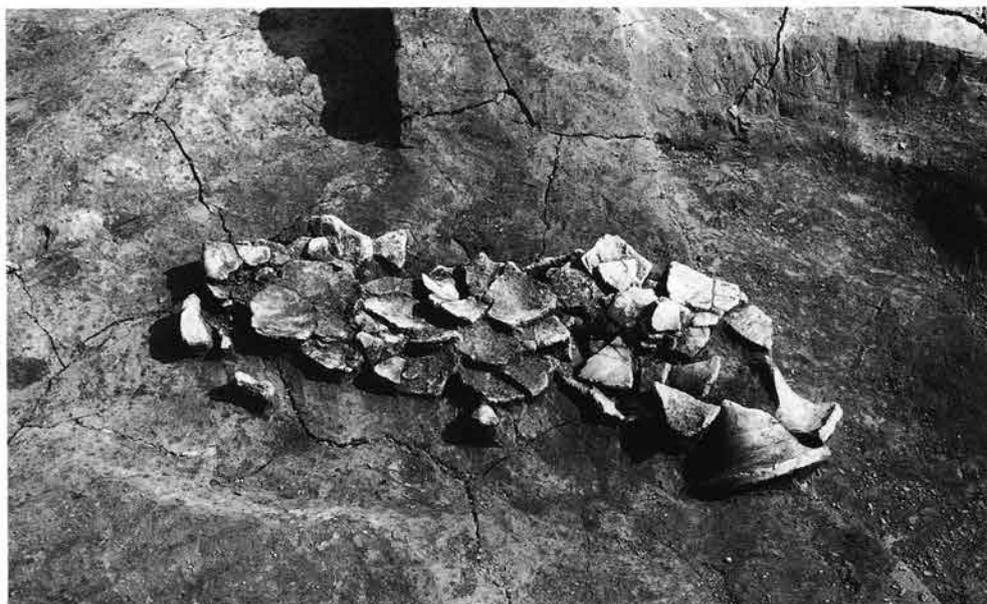


(3) S D 40001溝内堆積状況
(南から)

(1) 弥生遺構完掘状況
(南から)



(2) S D 19 (方形周溝墓 1)
南辺溝内土器出土状況
(南から)



(3) S D 19 (方形周溝墓 1)
北辺溝内土器出土状況
(南から)





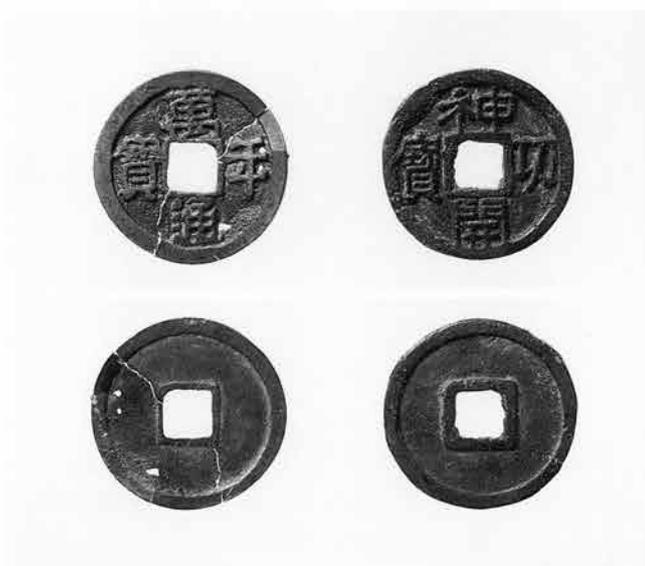
(1) S D 22 (方形周溝墓 2)
西辺溝内土器出土状況
(北から)



(2) S D 22 (方形周溝墓 2)
北辺溝内土器出土状況
(南から)



(3) S D 22 (方形周溝墓 2)
北辺溝内木製鍬出土状況
(西から)





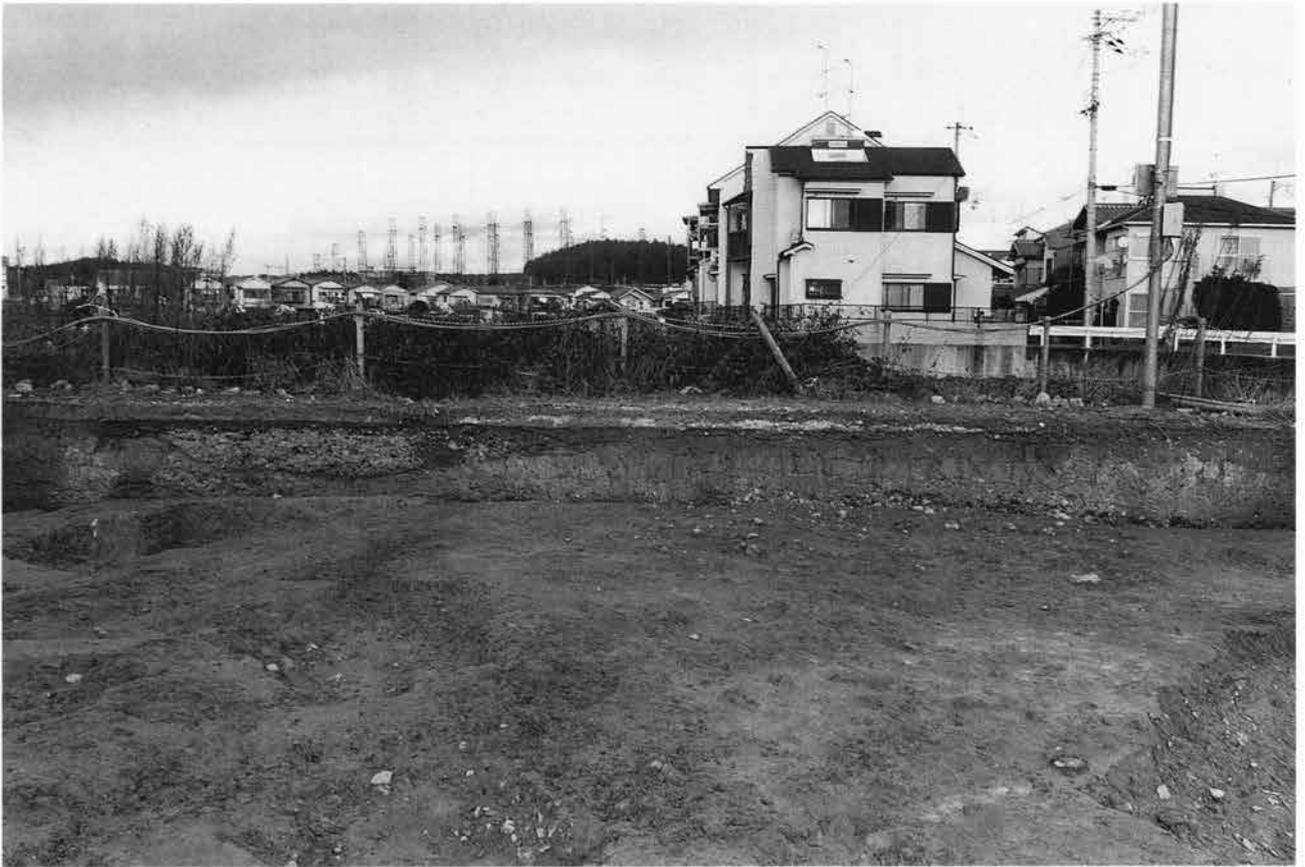
図版第49 長岡京跡右京第584次（7ANGND-1地区）



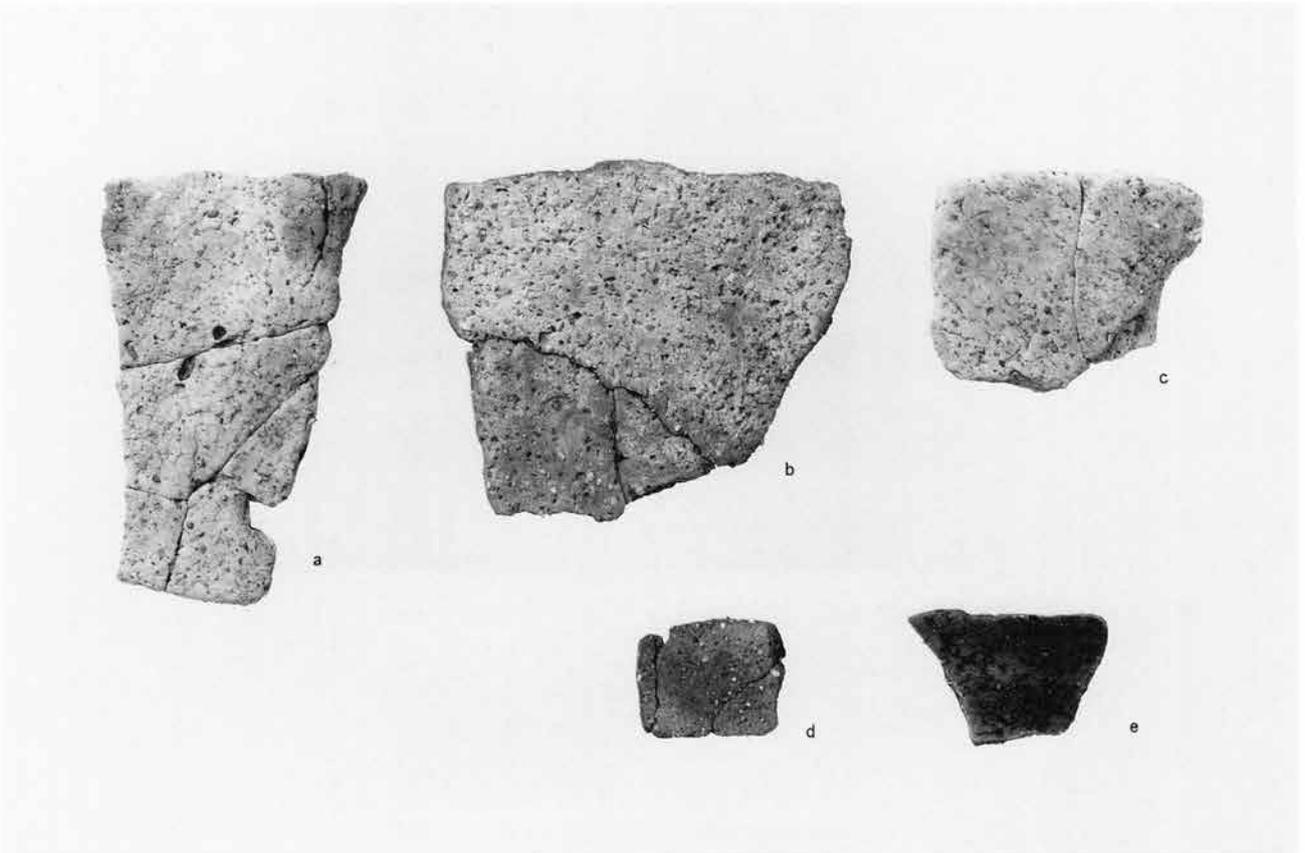
(1)調査地全景（南から）



(2)調査地西壁土層断面（南東から）



(1)調査地北壁土層断面（南から）



(2)出土遺物

(1) Aトレンチ調査前風景
(西から)



(2) Aトレンチ東壁断面 (西から)



(3) Aトレンチ完掘状況 (西から)





(1)Bトレンチ調査前風景（北から）



(2)Bトレンチ南東壁断面
（北西から）



(3)Bトレンチ完掘状況（北東から）

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第80冊							
編著者名	筒井崇史・増田孝彦・竹下士郎・引原茂治・石井清司・八木厚之・有井広幸							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 1998 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うらにゆうい せき・うら にゆうにしこ ふんぐん 浦入遺跡・ 浦入西古墳 群	まいづるしちとせこ あざいけかなる・は ながくち 舞鶴市千歳小字池 カナル・花ヶ口	202		35° 31' 30" 35° 31' 20"	135° 20' 40" 135° 20' 30"	19960416 ～ 19970307	7,590 3,874	発電所建設
たけなかいせ き 竹中遺跡	まいづるしあざどう のおくこあざいなた にぐち・なべもり 舞鶴市字堂奥小字 稲谷口・鍋森	202		35° 27' 28"	135° 26' 5"	19970820 ～ 19970925	360	道路建設
あまるべいせ きだい3じ 余部遺跡第 3次	かめおかしあまるべ ちようわくなり 亀岡市余部町和久 成	206	62	35° 0' 48"	135° 33' 57"	19970701 ～ 19970812	400	建物建設
へいあんきよ うあとさきよ うごじょうさ んほうじゅう いちちよう 平安京跡左 京五条三坊 十一町	きょうとししもぎよ うくからすまどおり たかつじあがるお まんどころちよう682 京都市下京区烏丸 通高辻上ル大政所 町682	106	1	34° 59' 50"	135° 45' 44"	19961105 ～ 19970311	360	警察署建設
ながおかきよ うあとさきよ うだい400 じ・かいでき よみずいせき 長岡京跡左 京第400次・ 鶏冠井清水 遺跡	むこうしかいでちよ うみなみかなむら 向日市鶏冠井町南 金村	208	13・59	34° 56' 17"	135° 43' 14"	19970501 ～ 19970801	630	下水道ポン プ建設
ながおかきよ うあとうきよ うだい584じ 長岡京跡右 京第584次	ながおかきようしい のうちまとだ21 長岡京市井ノ内の 田21	209	91	34° 56' 29"	135° 41' 40"	19971201 ～ 19980127	350	道路延長

かいがひらい せき 柏平遺跡	じょうようしとの かがひら 城陽市富野柏平	207	60	34° 50' 27"	135° 48' 5"	19970825 ~ 19970904	200	公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
浦入遺跡	集落・生産	縄文 弥生 飛鳥 奈良		石囲い炉 竪穴住居・流路状遺構 竪穴住居・テラス状遺構・鍛 冶炉 テラス状遺構・製塩炉		縄文土器 弥生土器・銅鏃 土師器・須恵器 土師器・須恵器・製 塩土器・土馬		
浦入西古墳 群	古墳	古墳		竪穴系横口式石室		須恵器・刀子・鉄鏃		
竹中遺跡	散布地	鎌倉		柱穴・集石		土師器・陶器		
余部遺跡第 3次	集落・墳墓	弥生 鎌倉		方形周溝墓・溝		弥生土器・石器 瓦器		
平安京跡左 京五条三坊 十一町	散布地・都城	弥生 平安 鎌倉 室町 江戸		土坑 井戸 柵列 溝 溝		弥生土器 土師器 須恵器 緑釉陶器・灰釉陶器 白磁・青磁 陶器・瓦・銭貨		
長岡京跡左 京跡第400次	都城	平安		条坊側溝		須恵器・土師器・銭 貨		
鶏冠井清水 遺跡	墳墓	弥生		方形周溝墓		弥生土器		
長岡京跡右 京第584次	散布地	弥生		流路		弥生土器		
柏平遺跡	散布地	—		—		—		

京都府遺跡調査概報 第80冊

平成10年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)